
へた日学園高等部 【もしヘタリアが日本の学園コメディだったら】

陸点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ日学園高等部 【もしヘタリアが日本の学園コメディだった
ら】

【Nコード】

N8401M

【作者名】

陸点

【あらすじ】

もしヘタリアが日本の学園コメディだったらどうなるの？ ドイツが老け顔の風紀委員で、日本が超童顔の爺教師で、だけどイタリアだけはいつも通りのヘタレで……。ヘタリアだけどヘタリアじゃない、学ヘタだけど学ヘタじゃない、そんな学園パラレルぐだぐだコメディ、ここに開幕です。

その1 五月某日 晴れ 板利と宇久先輩が遅刻をした (前書き)

チャイムが鳴るギリギリまで遅刻者を待つてあげる風紀委員つて、
実はものすごく優しい人だと思いました。

だから土井津も俺に優しくしてほしいです。

by 板利

その1 五月某日 晴れ 板利と宇久先輩が遅刻をした

朝のチャイムが鳴る5分程前、高等部の校門へ走る二つの影があった。

「ヴ、ヴえええ……、ちゃんとセツトしたはずなのに……目覚ましが止まつてて起きれなかつたよお……、ヴえええ……」

一人は高等部二年A組の板利いたりフェリ。ヘタレでちよつとおバカなこと定評があるモテカワスリムの愛されボーイである。後半は嘘である。口からヴえーという鳴き声を発するトマトとピツツアと女の子が大好きなお茶目さんである。

そしてもう一人。

「はあ……はあ……、胸が重くて、上手く走れないよ……」バイー
ンドドイーンビーンブブイーン

このやたらと大きいおっぱいが奇怪な音を発している少女は宇久うく蕾菜らいな。三年E組である。前記の通りやたら胸が目立つことと、ややドジで泣き虫なことで知られている。あとめちやめちや怖いことで有名な従弟妹がいたような気がするが、そんなことはどうだっていいんだ。

そして校門の前にはなんかムキムキでめっちゃ威圧感のある男子生徒が一人。

「こら板利何をしている！ もうすぐ予鈴がなつてしまつぞ！？
今月だけで何回遅刻すれば気が済むんだ！ そしてその三年生！
名前は……宇久先輩だったか？ まあいい、早くしないと授業が始まつてしまつてはないか！」

土井津流人ついでん、板利と同じ二年A組の風紀委員である。なんか凄い真面目でムキムキな30代子持ちな軍人っぽい見た目だがれつきとした17歳なんである。ジャガイモが大好物で、同級生からは「芋隊長」とか「ムキムキドS」とか「芋ビール」とか呼ばれてたりする。未成年がビールつて、とかはツツコンじゃあいけない。

続
く

その1 五月某日 晴れ 板利と宇久先輩が遅刻をした (後書き)

もうちょっとだけ続くんじゃ

その2 宇久ライナと愉快的な三年E組 (前書き)

自覚が無いお色気担って、素敵じゃない？

by 風連地お兄さん

その2 宇久ライナと愉快的な三年E組

ここは私立辺田学園高等部、三年E組である。

その1をご覧になった方にはもうお分かりだろうが、宇久ライナが所属するクラスである。

今はちょうど始業のベルが鳴り終え、授業に不真面目な生徒も席に着きだしている。

大方の生徒が着席する頃、教室の教壇側の引き戸がガラリと開いた。

「おうおうおめえら全員揃ってえんだろうなあ？ 授業はじめるぜい」

江戸っ子口調(?)な仮面を被った中年男性、俗っぽく言うとおっさんが教室に入ってきた。怪しさ大爆発だが変質者でも不法侵入者でもない。

おっさんの名前は取古佐竺^{トコシヅク}。数学教師でE組の担任でもある。いわゆる朝のショートホームルームを終えた後、教材を取りに席を外していたのである。

「ん……取古死ね……」

教壇に近い席の眠たげな顔をした生徒から不吉な合いの手が入る。いつものことである。

「あんだとてめえ桐支屋!? いつもいつもおめえは生意気だなばーろーめえ!」

「……うるさいひげ面……顔を近づけるな……おっさん臭が移る……」

取古先生がその眠たげな生徒 桐支屋伯^{きりしやほく}とにらみ合いを始める。

これもまたいつものことである。

「まあまあお二人さん、その辺にせえへん?」

「一応今は授業の時間だからねえ。お兄さん達はともかく勉強をしたい人だっているんだし?」

「ま、喧嘩なら授業が終わった後、他の奴を巻き込まない場所で二人だけでやってる、ってことだな！　んー、今日も俺様は輝いてるぜ！」

教室の後方からでんでんばらばら、というにはチームワークのいいツッコミが上がる。E組名物3バカ……もとい悪友トリオである。それぞれ、やや焼けた肌で怪しい関西弁を使いこなす栖辺院斗仁すへいんと夫、にお高校生の癖して顎にオシヤレ髭を持つイケメン風連地土主、そしてムキムキな弟を持つ小鳥を肩に載せた銀髪赤目土井津義流。どいつきるE組でトラブルがあったら大体渦中にいると思っつていい、要するにトラブルメーカー三人組だ。

「お、おう。すまねえな。桐支屋、そういうわけだ。放課後首を洗って待っつていやがれい」

「ん……今は土井津達に免じて許してやる……。……お前こそ、放課後までに遺書でも書いてる……」

仮にも生徒と教師がこんなに殺る気満々の会話していいのだろうか。だがそれがいわゆるヘタ校クオリティというものである。気にしたら負けという雰囲気既に漂っているのだ。

そんなこんなでやつと出席が取られるというところで、教室の外から足音と聞きなれたドラム音が響いてきた。

「はあ……はあ……、すいません遅れちゃいましたあああ！」
「バイーンブイーンドイーン」

勢いよく引き戸が開け放たれ、息も絶え絶えに入ってくる巨乳の女子生徒。この重低音でお分かりではあるだろうが、彼女こそ宇久ライナである。

「なんでえ宇久、今日も遅かったじゃあねえか。これで何回目ですか？」

教室の視線が取古先生からライナへ移る。

「はあ……はあ……、はい……」

はだけた制服やら赤い頬やら、なんかこう、アニメで言うところ

のサービスシーンみたいになっちゃっているが、これは文章なのでそんなちよつとエロやかなライナさんを拙く表現することしか出来ないのである。誠に遺憾だがしょうがないのである。ちなみにはだけたセーラー服からおっぱいがチラチラ見えちゃってるのはお約束である。やったね！

「う……その、まあなんだ、遅刻のワケは後で聞くから、今はとりあえず席に着いて服装を整えろい」

ライナがものすごく気まずい格好になっていることに気づき目をそらす取古先生。ライナはそれに気づかず、教室前方の廊下側に位置する自分の席に座る。

「ん……今、取古が宇久の胸チラチラ見てた……エロ親父……」

「うつつうるせええ！ つーかよお、おめえなんかチラチラどころかガン見してたるおが！」

「先生、風連地君が宇久さんの胸チラを録画してまーす。殴つていいですよね？」

「つておいなんで俺に向かつてフライパン振りかぶるんだよ帆ヶ梨はんがり！？ おい押鳥おすとり、お前なんとかしろよ！」

「皆さんお下品ですよ！ 大体これでは授業が進まないではないですかこのお馬鹿さん達が！」

「まるで地獄絵図やんなあ」

数行前のやりとりが忘れてしまったが如き騒ぎを尻目に、当のライナはのんびりと服装の乱れを整えていたとさ。

この後、ライナは数学の教科書がないことに気づき、またもや先生に叱られることになるのだが、それはまた別のお話である。

続く

その2 宇久ライナと愉快的な三年E組 (後書き)

悪友の名前が酷すぎるな……。

苗字は国名をアレンジ、下の名前は人名・愛称アレンジになってます。

人名が無い人は宇久薔菜さんみたいになりますね。

後どうでもいいですが制服は高等部が学ランとセーラー服、中等部がブレザーになってます。

今回は二年生組のターンの予定です。

その3 土井津ルウトは静かに勉強したい(前書き)

俺の飯が不味いって言った奴出て来い。

b y 井木

みんな言ってるよ？

b y 呂士谷

その3 土井津ルウトは静かに勉強したい

3年E組でおっぱい騒動が巻き起こっている頃、土井津流人どいづゆひとと板利いたりフェリのいる二年A組では。

「えー、それでは板利君、19ページの4行目から読んでください」
教壇の上で一見子供と見まごうほど背の低い教師が教鞭を取っている。彼は本田菊ほんだきく、二年の国語教師にしてA組に担任の先生である。こんな童顔ミニマムな本田先生だが、もうそろそろ血圧や血糖値を気にしだすお年頃なのである。

「……板利君？ どうかしましたか？」

本田先生が再度呼びかけるが、返事が無い。

「先生、板利ならシエスタしてます。つーか、さっきから寝言が凄いうるさいです」

板利の前の席のやたら眉毛に存在感のある生徒が何故か紅茶を嗜みながら応える。確かに、彼の後ろでは板利が「うーん……：パスタがいつぱい……：食べきれないよお……：ヴえ〜すび〜」とわけのわからない寝言をむにやむにやとつぶやいている。

「はあ……、またですか……。ていうか井木君、今は授業中なので紅茶を飲まないでください。学校に紅茶用の魔法瓶持ってこないでください」

溜息をつき、諦めたように注意する先生。まあ、授業中に妖精幻さとキャツキャウフフされるよりはマシである。

このミスター眉毛の名は井木亜佐のぶすけ。幻覚を見てしまうこと、料理がまさしく“殺人的”に不味いこと、そして眉毛のこと以外はいたって普通で真面目な生徒である。他人に素直になれず、よく照れ隠しに「ばかあ！」などといった言葉を使ってしまうことから、同級生からは「ツンデレ眉毛」などと呼ばれている。

「うふふ、井木くんの紅茶美味しいねえ。ご飯はあんなに美味しくないのにね」

その3 土井津ルウトは静かに勉強したい（後書き）

ポルスカ 堀須賀はさすがに強引か……。

二年A組も三年E組ももつと出したいキャラはいるんですが、ヘタすると紹介だけで終わっちゃうんでなかなか出してあげられないのが残念です。

次は一年生のターン！のはず！

その4 1年B組の端っこでアイを叫んだ空気 (前書き)

今日の日直、早く出てくるある。

b y地那

先生、目の前にいるんですけど……。

b y……誰？

その4 1年B組の端っこでアイを叫んだ空気

「……白露、帰ってこねえあるな……」

2年A組が国語の授業でランニングをおっ始めるちようどその頃、恐怖のヤンデレラこと白露奈多属する1年B組では、地那耀先生が歴史の授業を行っていた。

……なんか苗字と名前はどこから区切るのかわからないとか、日本人なのになんでゼー北京を彷彿とさせる口調で喋っているのかとかは気にしてはいけない。そんなことを言い出したらなんで板利だけ下の名前がカタカナなのかとか風連池お兄さんのオシヤレ髭とかツツコミ所しかなくなっちゃうからである。ちなみに苗字が地那で下が耀なのである。これを機に覚えてくださると幸いである。

「地那先生、彼女は多分呂士谷の所へ行っただから、きっと授業が終わっても帰ってこないと思うぞ！ 気にせず授業を続けたらどうだいい？」

この吹き替えされたアメリカ映画に出てくる若者のような、ちよいちよいイラツとする喋り方をしている眼鏡その1は目利科在、B組の学級委員長にしてヘタ校のKY王である。そのリーダーシップ（と、いう名の自己中とは言うてはいけない）から来年の生徒会長は彼になるともっぱらの噂である。メタボなことと下の名前が地那先生の口調とおなじなのは御愛嬌なのである。

ちなみに彼が先輩にあたる呂士谷を呼び捨てにしているのは、彼が呂士谷ともんの凄く仲が悪いこととは実はあまり関係がない。彼は誰に対してもタメ口を聞く人間なのだった。

「奈多ちゃんも変わってるよねえ……。いくら幼馴染の従兄だからって、あんなに怖くてやたら大きくて居るだけで部屋の温度が10度くらい下がる人を好きになるなんて……」

「羅飛イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ」と、
ここには呂士谷さんも白露さんもいないんだ……。本当に良か

った……」

もしここが軍隊であつたら確実に重営倉（知らない人はググるか怒られるの覚悟で身近な70歳以上のおじいちゃんに聞いてね！）行きとなるだろう失言をしたシヨタ……もとい少年は羅飛来、欧米人でもないのにイニシャルがR・Rになる非常に珍しい少年である。一学年上の利戸簿と同じく呂士谷イジられ三人衆が一人である。よく呂士谷に失言をしてその度に痛ましいお仕置きを受けているのでひよっとするとマゾなのではないかという疑問が浮かび上がっている。

そして羅飛に壮絶にツツコミを入れかけた、強いて言えばイケメンなこと以外は特に特徴がない眼鏡その2は、呂士谷イジられ三人衆最後の一人、江洲登恵努である。利戸簿がストレスによる胃痛担当、羅飛が失言担当ならば、彼はイケメン及びツツコミ担当というテーマそこ代われなポジションである。それと引き換えなのかどうかは知らないが、イケメンのはずなのとにかく地味である。どれくらい地味かというと彼が一日に喋る台詞のほとんどがツツコミでしかもそのうちの七割は「羅飛イイイイッ！」である。しかし、このクラスにはもつと空気が居るので安心してそこでツツコんでいて頂きたい。

どうでもいいが、クラスの眼鏡その1の名前がアルでその2がエドって、なにか某フルメタルな錬金術師漫画を思い出すのである。本当にどうでもいいのである。

その時、羅飛のポケットの中で携帯のバイブレーションが鳴った。彼は失言はするが生来肝が小さいので先生に見咎められないうちに大慌てで携帯を開いた。

『From: 呂士谷さん』

件名: うふふ(^^)(^^)

本文

ねえ、今ぼくのことなんか言った？

言ったよね？

言ったよね？

そういえば授業が終わったなら、2年A組の教室においでよ（＾し＾）
待ってるからね？

もしすっぱかしたら……………

どうしようかな？』

「今度こそ羅飛イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイツ！！！」

こうして哀れな羅飛少年の生涯はあと数十分後に終わることとな
ったのだが、それはまた別の話である。

「あら…………？ お兄様達が校庭で走ってらっしゃいますわ。確か今
日のこの時間は国語の時間のはずなのに…………」

「スヴィーとフィンも走ってるし。なにこれ意味わかんない」

窓際でお嬢様然とした女子生徒とどことなく不機嫌な顔をした男
子生徒が校庭を見下ろし声を上げる。お嬢様な方は水菓璃妃すいすりひ、苗字
から察せられる通り二年A組は水菓芭種すいすばしゅの妹君である。

そして「意味わかんない」「なに期待してんの？」が口癖っぽい
生徒が小折謂寿こあひつぐかすである。彼もまた二年A組に知り合いがいるが、う
っかり前回紹介し忘れたのでここでは語らないのである。

「おおかた誰かが土井津さんを怒らせて、グラウンド十周でも命じ
られたんじゃないですか？ ほら、先頭で走ってるの、土井津さん
だし」

おさげに大きなリボンを付けた、日に焼けた肌が特徴的な少女が
応える。知恵晴子ちえせいこ、お魚大好きな南国産島国っ娘である。どこか別
の時空では乙女ゲーの主人公めいたことをやっていたような気もす
るが、ヘタ校ではごく普通に個性の強い生徒の一人でしかないので
ある。あと、「名前無理やりじゃね？」と思っただ方、気にしないで

ほしいのである。

「こらこらおめーら、授業に集中するよろし。真面目に勉強しないとあいつらみてえになっちまうあるよ?」

はい、と素直に返事するB組一同。誰かフォローしてやれよ。

「んーじゃ今日の日直、19ページの4行目から読むよろし。今日の日直は誰あるか?」

いつもなら誰かがいやいやながらも挙手するか、別の誰かが「君でーす」などと指摘する場面だ。だが、今日に限っては誰もなにも言わず、ただざわざわと顔を見合わせるだけだった。

「あれ? 日直いないあるか? おかしいあるね……、確か昨日の日直が江洲登だったある……、江洲登の次は誰あるか?」

(……あのう、僕ですけど……)

「うーん、いねえならしょうがねえあるな。じゃあとりあえず古里^{こり}矢、お前が読むよろし」

(いや、あの……、僕が、日直なんですけど……)

「兄k 先生! 教科書忘れたから読めないんだぜ!」

「おめえまたあるか! しょうがねえから前の小折にでも借りるよろし!」

「え、意味わかんない」

(え……、あれ……? 僕の声聞こえてない……? ていうか僕、小折くんの前にいるじゃないか……!)

「ていうか先生、なんで僕の前席、クマが座ってるんですか?」

本当に意味わかんない」

「ウルセエゾテメー、クマ次郎サンツテ呼べ」

(クマ吉さん、君だけは僕に気づいてくれるよね……!?)

「……………ダレ?」

「^{かなだ}金田だよおおおおおおおおおおおつ!!!」

^{かなだまじゅう}金田真秀、目利科の双子の兄(現在は家庭の事情により別居)

でありながら誰にも気づいてもらえず、万が一気づいてもらっても9割方弟の目利科に間違えられてしまうという、驚異的なステルス

能力を誇る少年。その空想的な能力さえなければごく普通の善良な少年にすぎないが、残念ながら彼のスタド能力により、幸せな一生を送るのは不可能であろう。

「僕はここにいるんだよおおおおおおおおおおおおおお
おっ！！！！！！」

1年B組に彼の魂を込めた絶叫が響き渡る。が、気づいたものは
あいかわらずほとんどいなかった……。

続く

その4 1年B組の端っこでアイを叫んだ空気 (後書き)

だいぶ間が空いてしまった!

そしてセーちゃんの名前無理やりすぎワロタ!

なんかもう出したいキャラが多すぎてもどかしい!

ところで金田くんは教室にクマ次郎さん連れてきてるけどいいんだ
ろうか……? ?

次は先生たちのターン!のはず!

その5 職員室でつかまえて (前書き)

校長を見かけた者は至急校長室に連れてくるように。
by 教頭

その5 職員室でつかまえて

さて、怒涛の午前授業を終え、昼休みである。

そこは職員室、英訳するとオフィスとかスタッフルームとかになるあの場所であった。

「……と、まあそんなわけで何故か私まで走らされてしまって、腰が……」

「おうおう、そりやあ大変だつたなあ、本田先生」

そこでは三年の数学教師の取古先生と、二年の国語教師の本田先生が何故か机を並べ、緑茶とチャイ（インドとかそつちの方のミルクティー。紅茶と砂糖とミルクを一緒にヤカンでグツグツ煮る。甘い）を啜りながら談笑していた。

「俺んとこの桐支屋もよう、毎日顔合わせるたんびにやれおっさんだなんだつてうるさくてよお……」

「いいじゃないですか、おっさんなんて呼んでもらえるうちは。私最近重いものを運ぶとやたらに腰の心配されるんですよ？」

「そーあるそーある。我なんかもう爺を通り越して最近『仙人』つて呼ばれてるあるよ」

いつのまにか1年の地那先生も混じり、なんだか話題が年寄り自慢になってしまっている。

「そういえば、なんだかここつてやけに高齢の先生が多いですよねえ……」

「お、そおいやあそうだな。ええと、まず俺らと、1年の越野先生と田井先生と九場先生、二年の機田先生と多田先生と上知先生、三年の帆ヶ梨先生と分野先生と貸手先生……、知ってる限りじゃあ9人もいるぜ」

「それに校長と教頭も加えれば11人になるある」

「11人いる！ じゃなくて……なんだかもう、若い先生を探すほうが難しいんじゃないですか？」

よくよく考えてみれば、この職員室には新人のフレッシュな臭いは全く無く、そのかわりに嗅いだ者を絶望の淵へと叩き落す酸っぱい香り……いわゆる華麗臭が漂っていた。

「……私は仙人だから華麗臭なんて出さないある。私の周りは常にフローラルでフレッシュあるよ」

「……？ 地那先生、誰に向かって話しかけてるんですか？」

「ただのでっけえ独り言ある。私はまだまだナウでヤングでピッチピチあるよー」

流石に教員中最高齢であることを気にしているようだった。

そんなおっさん共（仙人・爺含む）がある意味殺伐とした和やかな会話を繰り返している。

「にh……本田先生、入部届け集めてきたでありますー」

「ああ、板利君ですか。入部届けは私の机の上に置いておいてください」

「了解であります！」

二年A組のシエスタ野郎こと板利フェリ（本当は笛理ふえりと書くのだが、本名よりあだ名が定着するのは世の常である）が、人が一人入れそうなほどのミカン箱に入った無数の入部届けをえっちらおっちら運んでいく。

「おお、そっぴやあもうそんな時期か。本田先生は一体どこの部の顧問だったかい？」

「漫画アニメラノベゲームギャルゲエロゲ乙女ゲーBLゲーその他諸々の“萌え”を研究する会、略して“二次元研究会”です。板利君は美術部との掛け持ちですが、他に都合のつく生徒が居ませんでしたのでお願いしました」

「お、おおう……そ、そっかい……」

「本田……部活動に興味を持ち込んだんじゃ駄目ある……」

一瞬波の引く音が聞こえたような気がするほど、ドン引きしていた。本田先生はとて素晴らしい人なのだが、時折こうした『二次元を愛するがゆえの奇行』をしてしまうのである。まあ、その一面のおか

「アアアッ！！」とかなんとか言いながら走っていったきり、校長室に戻ってこない」

教頭の世代ではカメラのことを『カメラ』といってしまうのである。古いとか思った君には、夜寝静まった頃に『妖怪・民族大移動』が来るのである。

「ん？ いつもだつたら教頭が校長の頭ぶん殴って止めるのがいつものパターンじゃねえあるか？」

年の功か威圧感にまったく物怖じしない地那先生が会話に加わる。「いや……その、俺も末孫の勇姿を『写メエル』で撮るのに忙しく、気づいた頃には姿を消していた……」

メールがちゃんと発音できていないわりに携帯を使いこなしていた。っていうか外流男お前もか。

「なんでえ、校長先生を探してんのかい。そんなことなら簡単に見つける方法があるのによっ」

「……あるのか？ 簡単に見つける方法が」
取古先生が大きく深呼吸をし、そして一気に大声を張り上げる。

「ああッ！！ こおんなどころで二年の板利の野郎が泣きながら校長の名前を呼んでるぜえッ！！？」

「ヴ、ヴええつ？ 俺、別に泣いてないけど、フェリイイイイイイイイイイイイイッ！！ おじいちゃんはここに居るぞオオオオオオオオオッ！！ だから安心しておじいちゃんの胸に飛び込んでおいでええええええつ！！??？」

まだ本田先生の机に荷物を運んでいた板利に向かって、光と追いかけてここでできそうな速さで突っ込んでくる無精髭を生やした男。が、板利にたどり着く前に教頭先生が立ちはだかる。

「……見つけたぞ、朗真るま。さあ、さつさと校長室に帰るぞ」
「グフッ！！ く、くそつ…… 図つたな、外流男…… ガクッ」

何故か自分で「ガクッ」まで言って倒れる謎の髭男。ご丁寧に吐いた血で「ゲルオ」とダイニングメッセージまで残している。
「ヴえー、爺ちゃんまたゲルオさんに迷惑かけたのー？ もう、駄

目じゃない、ゲルオさんだつて困ってるんだから」

「なんだか「お前が言うな」なセリフを吐く板利に、血文字で「すまん」と返す謎の（ry。っていうか、校長先生。

そう、この謎（ryこそが“へタ校名物孫バカフリーダムジジイ”こと板利朗真^{いたりろうま}、二年の板利とその兄の祖父にしてへタ校の校長先生である、一応。そして例によって若作りスキルを持っているのである。

「……まだお前の仕事は終わってない。孫と戯れたかったら家に帰ってからやれ」

「うううう……フェリいいい……おじいちゃんはお前を愛してるぞ
おおお……」

「ずるずると教頭に引きずられていくボケ老人。なんだか売られる子牛が荷馬車に揺られる歌を思い出す風景であったという。

「……今更あるけど、なんでアレが校長なんてやってるあるか……」
「……そりゃあ、この学園の創立者だからだろ……」

「孫の成長を見守るために学校一つ作ってしまうなんて……ある意味最強の孫バカですよね……」

昔はどうあれ、今はそんな孫バカの下で働いているおっさんたちは、意識せず思いをシンクロさせていた……。

（）（早いとこ別の仕事場見つけて）おくある……（）（おかねえとなあ……）（おかないといけませんね……）

続く

その5 職員室でつかまえて (後書き)

名前だけなら今回出演キャラ最多かもしれないね。

そして名前だけで終わりそんなキャラも多かったですね。

次回からは日常編本格始動する、か、も？

その6 昼、弁当、屋上にて。(前書き)

貧乏真拳とは！

幼少時代から貧しい生活を送っていた武人・瓶坊が編み出したと
呼ばれている伝説の拳法である。

とても優れた拳法だがその名の通り貧乏な者にしか習得できない
ので、彼の弟子になろうとしてわざわざ金を火にくべた者もいると
いう。

世界の珍武術百選(民明書房刊)より抜粋

その6 昼、弁当、屋上にて。

昼休み。それはランチタイムである。

へ夕校では弁当を持ってくる者、購買でパンやおにぎりを買う者、そして校内食堂で学食を食べる者の3パターンに別れている。

ご存知三年E組の宇久ライナは弁当派であったが、三年生にもなつて未だに友達のいない“残念な子”である彼女は、クラスで和気あいあいと弁当をつつきあう光景に耐えられず、誰もいない屋上（もちろん施錠されている。が、貧乏真拳奥義ピッキングを使えば万事解決だ！ やったね！）でひっそりと食事をとっていた。

とはいえ。

「……やっぱり、誰かと一緒にお弁当を食べたいなあ……」ドバーン
なにも彼女はいじめを受けているわけではない。クラスメイトは優しくしてくれるし、一年と二年には姉弟同然に過ごしてきた従弟妹たちもいる。だが、特に友達でもないクラスメイトに誘われるとなんだかいたたまれない気持ちになってしまうし、従弟妹たちには姉貴分としてついつい見栄を張ってしまう。自分から気の合いそうな人を適当に誘ってしまえばいいのだが、それができたらとつくにぼつちをやめている。

そう、これが一度足を踏み入れたならば二度と戻ることのできない、“ぼつち地獄”なのである。

……まあ、ぼつち地獄はどうでもいいのだ。

とにかくライナが独り楽しく弁当を食していたとき、ふいに扉の向こうから二人分の声が聞こえた。

「……アニメや漫画じゃあるまいし、屋上が開放されているわけがないだろう。なにかの間違いじゃないのか？」

「ヴえ、でもこないだ来たとき鍵が開いてたんだよー。先生に見つかっちゃって出れなかったけど……」

どちらとも聞き覚えのある声だった。が、どこで聞いたのかが思い

出せない。

てか、この状況マズくないか？ ピッキング的に。

「どどどどうしよう……！ 屋上の鍵をピッキングして無理やり開けたなんてバレたら、もつと頑丈な鍵に換えられちゃうー！」「ドイーン
いや、そういう問題ではない。

「……！ 土井津、やっぱり鍵開いてるよ！ ねえねえ、出てもいいでしょ？」

「……しょうがない、今回だけだぞ？ 後でちゃんと報告しないとならんな……」

錆びて立て付けが悪くなったドアが音をたてて外側に開き、中にいた二人とライナの目が合った。

「……」 「バイーン」

「ヴえ……」

「……」 「……」
「なんだかこう、お母さんの誕生日に一家でサプライズをしようとしたら、お母さんが浮気相手連れて帰ってきちゃったときみたいな微妙な空気になった。

「……あ！ もしかして今朝一緒に校門まで走ってたお姉さんじゃない？ ほら、俺ナンパしたんだけど、覚えてない？」

「ああ、宇久先輩か。今朝はこいつが失礼をした」

それでようやくライナも思い出す。この二人は、今朝彼女が遅刻したときにいたなんかヴえーヴえーうるさいナンパ少年と老け顔の風紀委員だ。

「えっと、はじめまして、じゃなくて二度目まして？ まあいいや。俺、二年A組の板利笛理。みんなからはフェリって呼ばれてるんだー。ねえねえ、よかったら一緒に弁当食べない？ 俺たちまだ食べてないんだけど、お姉さんみたいに可愛い娘と一緒に食べたいなあ」

自己紹介から勢い余ってナンパになってしまっている板利。そこに、土井津のゲンコツが脳天へ落ちる。

「こら、出会ってそう間もない上級生を口説こうとするな。別に止めはしないが、この人は呂土谷の従姉だぞ？ 後でどんな目にあっても知らんぞ」

「ヴえええっ!? そ、そういえばなんか顔が似てるような……。ご、ごめんなさい！ もうナンパしないから呂土谷には言わないでえっ！」

慌てて平謝りする板利。ライナはそんな板利が可笑しくなつて、くすつと笑いを漏らした。

「ふふ、お弁当と一緒に食べるぐらいならいちいち依伴ちゃんには言わないわ。わたしもちょうど誰かと一緒に食べたい気分だったし、ね？」ブブーン

「ヴえ……、いいの……？」

「……まあ、昼食をとるぐらいなら別に構わんだろう……。いいかげんもたもたしていると昼休みが終わってしまうしな」

「ヴえええええやったー！ー！ー！」

そんなわけで。

宇久ライナは進級以来初めて他人と一緒に昼食を食べることに成功し、そしてこの日以来昼休みには教師の目をかいくぐり屋上で弁当を食べる生徒が続出し、教頭先生が発見する頃には一、二、三年生合わせ何十人も生徒がここを利用しており、なぜかその中にはボケ老j……もとい校長先生も紛れていたという。

その頃にはライナはもう昼休みには屋上に行かなくても大丈夫になつていたのであった。

続く

その6 昼、弁当、屋上にて。(後書き)

今気づいたがライナさんてキャラめちやめちや扱いづらいじゃないか……！

余談ですがこのメンバーのお弁当の中身は

ライナさん：バターロールとハムと野菜と果物

板利：なんかめちやめちや豪華で彩りのいい洋食

土井津：質実剛健な日の丸弁当と漬物

って感じでしょうかね？

しかし次回のネタが思いつかん……。

その7 誰がためにピアノは鳴る(前書き)

シヨ…シヨックだッ!

目…目利科君は私の机の引き出しを勝手に開けて見ているッ
それにもう2度とあの漫画はもどらないような気がする
読めなくなるまでッ!

by 本田先生

その7 誰がためにピアノは鳴る

「なんで俺たちが職員室なんか呼び出されたんだい？ 特にやましいことをした覚えはないんだぞ」

「えっと、僕も呼び出された理由がわからないんですが……」

アフタースクールと書いて、放課後である。目利科在と金田真秀の兄弟は、担任の地那先生から職員室に呼び出しを食らっていた。

「どーしたもこーしたもねーある。おめえらだけがいつまでたってもどの部活にも入ってねえから、さっさと決めるよろし」

さて、皆さんの学校は、部活動についてどんな決まりがあっただろうか。ヘタ校の場合、クラブ設立については非常に緩く、ぶつちやけ4、5人集まって活動内容が他とかぶらなければ大体成立してしまう。だがその代わり、必ず一つの部活には所属しなくてはならない。二年生からは自由になるが、一年生のうちはたとえ幽霊部員でも入部していなくてはならないのである。

「期限は来週の今日までであるから、とっとと見学してさっさと入部するよろし。ほら、これが入部届ある」

入部届を渡すと、二人の間をすり抜けて職員室を出ていく地那先生。太極拳部の顧問として色々とやることがあったりなかったりするのだ。

地那先生が去ったあと、顔を見合わせる双子。あるいはそれにものごく近い兄弟。

「……どうする、在？」

「うーん、とりあえずこれからの展開的に、面白そうな部活を巡ってみるんだぞ！」

言つが早いかずんどこ……間違えた、ずんずん歩きだす目利科。

「わ、ちよ、待ってよ！」と、慌ててあとを追う金田。Withクマ次郎さん。

そう、これが後に語られる、“恐怖の見学無双事件”の始まり……

…であるかはまだわからないが、とにかくそんなわけで、目利科と金田のちよつと遅めのクラブ見学が始まるのであった。

？ アンサンブル部

さて、皆さんは「なんであの目利科はともかく、優等生っぽい金田まで部活を決めてなかったの？」と疑問にお思いだろうか。なんのことはない。彼がたまたまメイプルの食べ過ぎ（飲み過ぎ？）でお腹を壊したクマ次郎さんの看病で休んだ日に部活動についてのお知らせがあり、彼がたまたま空気がつたため誰もそのことを教えずに今日という日が来てしまっただけである。要約すると金田がたまたま不幸だっただけの話である。

それはさておき。

目利金めりかなコンビ（いちいち名前呼ぶのめんどいからもうこれでいいや）が最初に向かったのは、音楽室にあるアンサンブル部である。ちなみに知らない方のために解説すると、アンサンブルとは人数の少ない合唱団やオーケストラのようなものだ。つまりオーケストラ部やコーラス部がフュージョンしたクラブだ！と思っていたかどうか！

「ねえ、なんでアンサンブル部から見学するんだい？」

「なんとなくなんだぞ！ 本田先生から借りたマンガっぽく言うなら、『そこそこだが、おれにもようわからん』ってところさ！」

まあ、音楽室につくまでにも主にメタバな方関係のトラブルがあったりなんだりしたのだが、いつものことなので時間を吹っ飛ばさせてもらおう。

「Hey！ 見学しに来たんだぞ！」

ノックももしもしもせず、いきなり音楽室に入る自称HERO。クマ連れたなんか霞んでよく見えない方が、「し、しとうれいしま〜す……」と緊張のせいか、盛大に嘔みながらあとに続く。

穴ぼこだらけの壁に、ベートーベンぐらいしかわからない音楽家

たちの肖像画が掛かっている、教室の1・5倍位の広さの部屋。黒板の脇のグラウンドピアノからモーツァルトだかショパンだかクラシックな曲が流れており、椅子に座った一人の女子生徒がそれに聞き入っている。彼女とピアノを弾いている生徒以外に人はいないようだった。

と、目利金コンビの闖入に気づいたらしく、ピアノの演奏が止まる。

「……見学、ですか？　すみません、今日は事情で部員がほとんど出払っているのでまた今度にしてはもらえないでしょうか」

ピアノから顔を上げたのはくるりとまるまった生え際のアホ毛と口元の黒子が特徴的な男子生徒。彼は押鳥おすとりゅう楼出、アンサンブル部の部長である。ちなみに彼はその気品に溢れた仕草などから“貴族”と呼ばれている。

「What's?　どういうことだい？」

まるで生粋のアメリカ人のような発音で疑問を示す目（ry。別の時空では生粋どころか合衆国そのものだったような気もしたが、この世界ではただの生意気な一高校生に過ぎないのである。だってそういう設定なんだから。

「私もそうなんだけど、ここは部のかけもちをしてる人が多いのよ。今日はたまたまみんな別の部に行っちゃって……。かけもちしてない人もいるんだけど、塾だったり休みだったり幽霊部員だったりで……。そんなわけで、今は私と楼出さんしかいないの」

茶髪に四ツ葉の形をした髪留めをつけ、おっぱいが素敵に大きな女子生徒が答える。帆はんヶ梨がし絵里紗えりせ、押鳥のクラスメイト兼許嫁ファイアンセにして、今年のベストフライパニスト賞女性部門受賞者である。フライパニストとはなんぞや？　な方は別に気にしなくていいので安心して読み飛ばして欲しい。きつと返り血と笑顔とフライパンがよく似合う人とか、そんなんだ。

「そうですね……。それじゃあしょうがないですね。また今度、見学に来ます」

「いや、その必要はないんだぞ！」

ただでさえ影の薄い金田の言葉を遮ることで、さらに存在感を薄めることに成功した目利科、ではなく、またここに来ることになるであろうフラグをへし折った目利科。

「え……？ いきなりどうしたんだい、今は部員が二人しかいないんだから、見学なんてできないだろ……？」

「いや、よく考えてみたら俺、別に音楽には興味はなかったんだ」

ず べ しや。

目利科のあんまりにもあんまりな、とんちんかんな答えにその場にいた全員がずっこけた。ちなみに、もちろん押鳥はお優雅に転んだことを付け加えておこう。

「もう、在！？ そういうことだったら初めから音楽室に来る必要はなかっただろ！？」

台詞にビックリマーク（英語ではエクスクラメーションマークという。覚えていても長すぎてなかなか使えないので覚える必要はない）が付いたことで、存在感が増した金田。この状態の金田に説教をされると正直凹むのである。

「いや、だからさっき言ったんだぞ？ 『そこんそこだが、おれにもようわからん』って」

本当によくわからないまま来たのかよ。

「……貴方たち！ 用がないのならもう出てお行きなさい、このお馬鹿さんたちが！」

しまいには音楽室から追い出される目利金コンビ。それぞれ「悪かったんだぞ！ X D D D D D」「すいませんでした！ あとで改めてメイプル持って見学します！」と謝ってるんだかないんだかよくわからないまま走り去る。

完全下校時刻まであと三時間ちよい。目利金コンビの見学珍道中はまだまだ続くのである。

続
く

その7 誰がためにピアノは鳴る（後書き）

気がついたたら某漫画のパロを入れまくってました。実にすいません。全部わかった方はどうか私と友達に（ry

そういえば前回から小説を携帯で打ち、それをPCに送ってメモ帳に保存してup、とめちやめちやまわりくどいやり方でやってるんですが、予測変換がウザいので次からは素直にPCで打とうと思いました。

次回もうっかり紹介し忘れたキャラを出します、多分。

その8 俺とお前とバスケット(前書き)

部員募集中やぞ。

b yバスケット部長

その8 俺とお前とバスケット

? バスケットボール部

さて、音楽室を出た目利金コンビは、特に当てもなくふらふらさまよっていた。

「ねえ、在はこのままめぼしいクラブが見つからなかったら、一体どうするつもりなんだい？」

目利科とほぼ同じ声・口調なのに、どうしてここまでのおんびりに聞こえるのだろうか、といった感じな喋り方をする金田。

「そうだなあ、今はまだあんまり考えてないけど、いざとなったら自分でクラブを作ろうと思ってるんだ。校則にも『一年生によるクラブ設立も可』って書いてあるしね！」

目利科の宣言に、昔のことを思いだして顔をひきつらせる金田。幼い頃から目利科の思いつきに付き合わされ、ろくな目にあっていないのである。

「名前はもう決めてあるぞ！ “世界を大いに盛り上げるための目利科在の団”、略して“SOM団”さ！」

「もろパクリじゃないか！ さては最近、あの超有名ラノベを読んだだろ！？ でも性格は割と似てるから困る！」

「な、なんのことだい？ 俺にはさっぱりわからないんだぞ？」

巷ではやれ長門長門と大人気であるが、個人的には“ちゃん”に出てくるあちゃくらさんの方が好きなのである。和み可愛いのである。

どうでもいいのである。

双子の眼鏡、略して双眼鏡がやれ最近のラノベはメディアミックが多すぎるのだ、やれツンデレとか無口とかテンプレートなキャラしかないのだ、今後のラノベ界を憂いているよーな気がする会話を繰り広げながら歩いていると、眼前に体育館が見えてきた。

「体育館か……。割とこつて、色んなクラブが使ってるよね。今日はどこの部が使ってるんだろ……」

「お、地那先生からもらった書類の中に、体育館の当番表があったんだぞ！ え〜となになに、今日のこの時間は男子のバスケット部が使ってるみたいだ！」

バスケット部、と聞くとなんかやたらデカい人や先生に泣きながらバスケがしたい旨を伝える生徒がいるようなイメージが浮かぶのである。そう、ただの偏見である。

「じゃあ、早速入るんだぞ！」

「ちよつと待つてよ。またさつきみたいに興味もないのに見学しようなんて考えてないよね？」

「その点については問題はないぞ。俺はスポーツならなんでも大好きさ！ これでも小さい頃はマイケル・ジョーダンに憧れていたしね！」

「え、そうだったっけ？ 昔の在は確かベーブ・ルースに憧れていたよつな……」

「き、きつと気のせいだぞ！」

それにしてもこの二人、随分アメリカンなチョイスである。アメリカ人やたまたカナダ人でもないのに、いや全く不思議極まりないのである。

どうでもいいが、『好きな日本人メジャーリーガーは？』と聞かれたら、必ず野茂かイチローかゴジラ松井のどれかに絞られる気がするのである。とはいえ作者はあんまり野球やメジャーには詳しくないので、『ふざけるな！ 私が好きなのは（好きな名前を入れてね）選手だ！』という方は、本当に申し訳ないのである。

「ていうか、前に『一番好きなスポーツはアメフトなんだぞ！』とか言ってなかった？」

「だ、だから気のせいだつて言ってるだろっ！？ 本当に君は、変なことばっかり覚えてるな」

「じゃかあしいんじゃ、ボケ。入るんならとつと入らんかい」

双眼鏡な二人がくつだらなことでごちゃごちゃ言い争いを続け
てることにいい加減イライラしてきた誰かの気持ちを代弁でもして
いるのか、髪を整髪料で上におつ立てた髪型、俗にいう“デッサン
が狂ったよーな髪型”をした長身で若干目付きの悪い青年が、もん
の凄くドスの利いた声でなにやら言いながら体育館から出てきた。

「は、はい……」

こんな時だけ双子シンクロを發揮する目利金であった。

体育館の中は汗の臭いや靴が擦れる音、空気が充分に詰まったボ
ールが跳ねる音で溢れていた。

デッサンが狂ったよーな髪型の青年こと、バスケット部部長の低地蘭^{ひぢらん}
太に活動を見学したい旨を伝えると、「まだ入部届を出していなか
ったのか」というようなことをどこかの方言で呆れたように言い、
「最近クラブの乱立でろくに新入部員が来ない、見学してもし気
に入ったのなら是非入部してほしい」というようなことをおそらく
は中部地方のどっかの訛りで言っていた。

と、いうわけで。

空気に眼鏡とアホ毛とクマが引っ付いてるような少年と噂される
金田真秀^{かなだましゅう}はなにをするでもなく、体育館の隅でぼうつと練習試合を
眺めていた。ちなみに体育座りである、体育館だけに。

双子の空気じゃなくてなんか鬱陶しい方は何故か部員に混じって
試合を楽しんでいた。元々身長はかなり高いほうだし、「見てるだ
けじゃつまらないんだぞ！俺にもやらせてくれ！」とわけがわか
らない論法で強引に参加したのである。

金田も目以下略のように参加しても良かったのだが（なにしろ双
子、身長は同じだ）、彼は自身の兄弟ほど厚かましい性格ではなか
った。まあ、彼の場合もうちょっと図々しくなったほうが存在感的
にいいのだが。

そんな彼が試合を眺めながら考えていたのは、他でもない彼自身が入る部のことである。

さっきのアンサンブル部やこのバスケット部にはあまり興味を感じないし、地那先生から渡された書類の中に入っていた部活動の一覧表を見ても、名前だけでは判断出来ないが自分に合いそうなクラブは見つからなかった。

どうせいずれかの部活動には所属しなければならぬのだから、適当に決めて幽霊部員にでもなってしまう方がいいのだが、金田は「どうせいずれかの部活動に所属しなければならぬのなら、せめて自分がやりたいと思うような部に入りたい」という考え方の持ち主だった。

その点に関しては、なんにでも興味を持って楽しくなにかができる目利科がうらやましかった。

（あーあ、なんで双子なのにこんなにも僕と在は違うんだろぅな……）

なんか最初に考えていたことからだいぶ思考が脱線してきたが、暇人の思考は得てして暴走するものである。

だから、顔面に重たいボールが激突するまで、その存在に気づけなかった。

「め”い”ぶ”る”ッ!？」

「……すまねえない、手元が狂った。大丈夫か……？」

誤って金田にボールをぶつけてしまったらしいこれまた長身の妙に威圧感のある生徒（今しか紹介する隙がないので紹介するが、須^す部^べ鐘^{かね}馬^ま ご存知二年A組、愛称はスーさんである）が寄ってくる。幸いにも眼鏡は割れず、怪我もなかったので「はい、大丈夫です……ひいっ!？」と、前半は具合を聞かれた者の礼儀として、後半は威圧感に圧されたために出た悲鳴で答えた。

「ん……? やっぱり怪我してるんじゃないけ……?」

「いつ、いえいえ! 本当に大丈夫ですから!」

だからこれ以上顔を近づけないで! 怖すぎてむしろ心に怪我を

しそつなんです！ と正直に言えないのが金田の長所兼短所。

流石に片割れのことを心配になったのか、目利科もゼツケンを脱いで（信じられないが、彼はわざわざ体育着を取りにいのが面倒だからと、ワイシャツ&スラックスにゼツケンを着るというごり押しファッションで参加していた）こちらに駆け寄ってくる。

「Wow！ 真秀の顔がまるでトマトみたいに真っ赤なんだぞ！早く保健室に行くべきだよ！」

目利科は慌てて金田をお姫様だっこ……するわけがない。そんなことをしたらジャンルがパラルル学園ぐだぐだコメディから、一部のお姉様方にのみに支持される爛れたジャンルになってしまうのである。とにかく、目利科は慌てて金田に肩を貸すと、さっさと体育館を去ってしまった。

「ちよ、ちよつと！ 見学……っていうか仮入部？ はいいの？ まだ試合終わってないじゃないか」

「んー、そろそろ飽きてきたから別の部を見学しようと思ってたからいいんだぞ。それに俺が今一番好きなスポーツ選手はバリー・ボズだしな！ XDDDD」

いつものように高らかに笑う目利科を見て、しょうがないなあ、とため息とともに笑う。

多分なんだかんだ言いながらも、この兄弟とはこの先もずっと一緒なんだろうなあ、と思いつながら。

ちなみに、目利科があんなにも手際よく体育館を去ったのは、もちろん金田が心配なのもあるが、バスケット部員たちの「入部入部入部入部入部入部入部入部」と訴えるところの妹さんのごとき視線の圧力に耐えきれなくなったからなのであった。

続く

その8 俺とお前とバスケット（後書き）

福井弁とか福島弁とかわかんねえよ！ というわけで新キャラのお二人には少し無口になってもらいました。

人選は本当に適当です。背が大きそうなので、二人とも。

私の中のオランダさんのイメージは口 コンじゃなくてクールで硬派な不良さんだったりします。

パソ禁が辛い……。

その9 トリガーハッピー・ライフルブレット(前書き)

民間防衛部とはッ！

ひとつ 無敵なり！

ふたつ 決して屈したりせず！

みつつ 決して誇りを捨てることはない！

よつつ あらゆる防衛の手段を兼ね備え、しかも軍のそれを上回る！

b y 水巢

素敵ですわ、お兄様。

b y 璃妃

その9 トリガーハッピー・ライフルブレット

さて。

こう書くともまるで名探偵の推理が披露されるような気分になるが、今のところこの小説では、名探偵が出張るような事件は起きていないのである。

それはさておき。

当たり前のことだが、この学園の部活動は目利金が今までに見学したクラブだけではないのである。

現在認可されている部活動を高等部と中等部で合わせると（たとえば、活動内容が重複しているものは除外したとしても）百を超すという。その中には、たとえば野球部、サッカー部といったポピュラーなものから、“より快適なシエスタを研究する会”（通称シエスタ研究会）や、“みんな僕の家の子になるうよの会”（略して僕の会）といった存在する意味すらわからないようなものまである。

何故こんなにもクラブが乱立しているのか？ それはたったひとつの単純な答えである。

“あんなろくでなし校長のいる学校だから”ただそれだけである。

例によってあの孫バカ校長は「なにフェリ？ 入りたい部活がない？ 逆に考えるんだ、『自分がやりたい部活を作ればいいさ』と考えるんだ」といった調子で、たとえば一年生でも4〜5人集まって申請すれば簡単にクラブが作れる校則にしちまったのである。その当時孫たちはまだ小学校にも入学していなかったことから、いかにこのボケ老人が阿呆（いや、むしろ痴呆か）であるか窺える。

まあ、肝心の孫たちが普通に既存の部に入ってしまったのだからざまあない、といった感じである。

長々と閑話休題。

それでは本編の始まりである。

？ 民間防衛部

目利金コンビは保健室に行つて金田の手当てをしたあと、なんかもう、それこそ興味の惹かれた部活動なら片っ端から見学（という名の逆強制参加）をして廻つた。金田の名誉の為に一応付け加えておくと、迷惑をかけたのは目利科だけである。

具体的に描写すると、料理研究部では謎の着色料で全体的に蛍光色なケーキを作って“最悪の晩餐・井木”の再来と恐れられたり（金田の作ったホットケーキONメイプルは全員が美味しく頂きました）。

野球部ではドーピングとコルクバットでも使つてんのかなどと考えてしまうほどホームランをばっかんばっかん大量生産したり（一方金田はクマなんとかさんにユニフォーム着せたりバット持たせたりして遊んでいた）。

二次元研究会ではアメリカンテイストにデフォルメされた自画像を描いたかと思えば、あの世界的に有名な7つのドラゴンの球体を集めたりインフレしまくつた戦闘力で死闘を繰り広げたりする漫画の主人公を原型留めないほどリメイクして本田先生の怒りを買ったり（金なんとかさんは無難に青色猫型ロボやメイド・イン・パン工場なヒーローを描いてた）。

まあ、なんとというかやりたい放題であった。

そんなことを繰り返しているうちに、いつの間にかもう完全下校時刻の30分前ほどになっていた。

「……もうこんな時間かあ。そろそろ帰る？ 今から見学するには遅すぎると思うよ」

すっかり日も暮れている。二人は現在寮暮らしをしていて、あまりに帰るのが遅くなると、食堂が閉まってしまう夕食を買いに行く羽目になるのだ。

「俺も三分ぐらい前まではそう思ってたんだけどな。That's look! 見てみなよ、アレ」 二人が歩いていた四階北校舎

の廊下の突き当たり、見るからに堅牢そうな無骨な金属製の扉があった。そのゴツイ外見とは裏腹に、可愛らしい動物や花のイラストが描かれたファンシーなプレートがかかり、“民間防衛部”と印刷されていた。

「行かないか」

「ウホツ、いい部活……、じゃなくて！ 全然よくないよ！ なんか怪しいし、嫌な予感がしてしょうがないよ！」

見るからに色々とデンジャーな気配がするのである。『ゴゴゴゴゴ』と、どこからか謎の効果音すら聞こえてきそうだ。

「えー、いいじゃないか。なんだかあの部活を見学しないと今日を“締め”られない気がするんだよ」

もし金田がもう少し人に冷たい性格だったなら「知るか。お前一人で行け」とストレートに言っていただろう。ていうかむしろ言える性格なら良かったのに、と本人は思っていた。

「……まあ、どうしても行きたいなら別に止めないけど。でも、僕はもう疲れたし、クマ夫さんだってお腹が空いてる。一人で行ってきなよ、僕たちは先に帰ってるから」

彼にしてみれば精一杯冷たい言い方で、「なんでもかんでもいち僕を付き合わせんじゃねえよこの自称ヒーロー（笑）が」というような意思を表明した金田。が、あえて空気を読めない自称ヒーロー（笑）はあくまでもポジティブに解釈する。

「そうか！ じゃあ君はそのクマ之丞？と一緒に帰っていていいぞ！ 俺もなるべく遅くならないようにするよ！」

自分の意見を押し通す・他人の意見を理解しない・相手の反応は見ない、とまさしくKYの鑑である。言いたいことを言っ、とつとと去っていつてしまった。

「……はあ」

いつものことではある。だが、あの扉からは尋常ではないほどに嫌な予感がする。

在が怖い目に合わないといいなあ、とため息を吐きながら、金田

は本名クマ吉さんと共に家路を歩いたのだった。

「Hey! お邪魔するんだぞ!」

心ばかりのノックをし、返事を待たずに勝手に中に入る。彼にとつてはいつものことだが、今回はそれが仇になった。

ジャキツ、と独特な金属音と共に、首に当たる冷たく硬質な棒状のなにかが当てられる。そしてそれ以上に冷えきり、怒りが込められた声。

「貴様、我輩の許可も得ず、無断で部室に入るとはいいい度胸であるな。部則第27条により貴様を全力で排除するのである」

「.....え、ゑ?」

すっかり人気もまばらになった校舎内に、突如として断末魔のごとき悲鳴が響き渡ったが、その程度のことはこのへタ校では日常茶飯事なのである。非常に残念ながら。

その後目利科は、寮の玄関でまるで命からがら戦場から帰ってきたようなボロボロの姿で倒れているを発見された。

それ以来、彼は何故か部屋に入るとき、ノックを欠かさなくなつたという。

めでたし、めでたし。

そして後日。

目利科は野球部とアメフト部に入部し、どちらでも新進気鋭の大活躍を果たすのだが、それはまた別の話。

一方金田は、散々悩んだ末、料理研究部と“ペット愛好会”という部に入部した。

どうやら自分に合う部を見つけられたらしく、それなりに楽しく充実した日々を送っているのだった。

続
く

その9 トリガーハッピー・ライフルブレット(後書き)

民間防衛部は璃妃も入部してます。てか、部員は二人しかいません。

クラブ見学編が終わったのはいいけど、次のネタどうしよう……

その10 長男失格（前書き）

注意！

本作では板利兄弟は双子ということになっています。原作の元キヤラは双子ではないのですが、筆者の設定ミスでこうでもしないと色々辻褄が合わなくなってしまいました。本当に申し訳ありません。

b y 作者

その10 長男失格

ひたすらトマトを賛美する内容の歌が、板利呂飛いたりろびの制服のポケットから流れた。

取り出して、誰からかかってきたか確かめる。弟の笛理ふえりからだった。あまり気乗りしなかったが、とりあえず電話に出る。

「あつ、もしもし兄ちゃん？ 今どこにいるの？ もういいかげん家に帰ってきてよお、爺ちゃんたちも心配して、」「うるせーバカ弟」

大体予想した範囲内の言葉だったので電話を切る。画面を見ると弟から一時間につき五回も着信が来ていた。いくらなんでもかけすぎだろ、と双子の弟に呆れる。もう煩わせないように、携帯の電源を切った。

彼は三日前から家出中である。きっかけは些細な、というかいつものことなのであまり説明する必要はないような気がするが、とにかく些細なことだった。

弟・笛理が家へ連れてきたためつちゃムキムキな友人が気に食わず、それが原因で兄弟喧嘩（という名の一方的な罵りあい）をし、そのまま勢いで家出をしたのである。

幸い、孫には甘い祖父から大量にお小遣いをもらっていたので、余程浪費をしない限り帰宅せずともしばらくはなんとかなりそうだった。

問題は、宿だ。以前はマンガ喫茶に泊まることが出来たのだが、最近では“未成年ナントカナントカ法”とかそんな感じの法律ができてしまい、深夜はマンガ喫茶にすることが出来なくなってしまった。無論ホテルに泊まるわけにもいかず、となると後は友人宅に泊めてもらうぐらいしかないのだが、この残念な兄は性格やらなんやらで弟さんと比べるとなんだか可哀想な感じになるぐらい、交友関係がさほど多くないのである。

もちろん、皆無というわけではない。が、そのなけなしの友人も大体弟に把握されてしまっているので、迂闊に訪ねていったら待ち伏せされていた、なんて間抜けな展開になりかねない。

そんなわけで、呂飛は寢床を探し、一人で街を彷徨っていた。

街、といつても繁華街だとか、夜間でも人が多いところではない。主に学生が住むアパートやマンション、寮などが集まる、住宅街だ。板利兄弟が通う辺田日学園公認の学生寮もここにある。

ところで、呂飛は街を彷徨ってはいたが、ちゃんとした目的地がなくはなかった。

しかし、そこへ行ったことは一度きりしかなく、しかももう四年前になるので、僅かな記憶を頼りに一軒一軒確かめながら歩いているのである。

だから、そこに着いたときには夜も大分更けた時間になっていた。アパートと呼ぶにはいささか立派で、かといってマンションと呼ぶにもどこか遠慮をおぼえるような、中途半端な大きさな集合住宅。その四階建ての建物の、二階の一室の前に呂飛は立っていた。

しばらくの間そこで押すか押すまいか悩んでいたが、やがて意を決しインターホンを押す。ピンポン、とやや控えめな音が鳴り、少しして聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「はい、どなたですかー？」

「……俺だよ、鈴子。板利呂飛だ、コノヤロー」

「……………」
しばしの沈黙。

「ええっ!? 呂飛君!? え、なんでこないな遅くに!? てかそもそもなんで来たん!? どゆこと!? わけわからへんわ」

「とりあえず、家に入れる。話はそれからだ、ちくしょー」

「えっ、あ、うん、今開けるわ」

ぱたぱたぱた、と小走りで近づいてくる音が扉の内側から聞こえてくる。やがてチェーン錠とサムターン錠ががちゃがちゃと開けら

れ、扉が開かれた。

「えっと　なんて言えばええのんかわからへんけど……。その、
久しぶりやね　呂飛君」

シヨートボブの髪にヘアバンドをし、ネコに似たつり目と丘のご
とき胸元が特徴的な、呂飛とさほど変わらない年頃の女の子だった。

低地鈴子^{ひくちりんし}

現在バスケット部長を務める兄を持ち、自身もアンサ

ンプル部や料理研究部に所属する、滋賀弁を話す高校二年生である。
そしてかつて、板利呂飛の、いわゆる一般的に言うところの“幼
なじみ”であった。

今はもう、幼なじみどころか友達ですらないが。

幼なじみは幼なくなったら馴染めないのである。

低地鈴子の部屋。

女の子らしい、可愛い小物が所々に置かれ、漫画のように愛らし
くデフォルメされたネコのぬいぐるみが机やベッドを飾りたててい
る。

そして現在、呂飛は座布団を敷いてあぐらをかいており、鈴子は
ちゃぶ台を挟んで向かいに正座していた。

「……………」

「……………」

すっかり見つめあうように座ってしまったため、なんだか気まず
い、例えるならば親に無理矢理セツティングされたお見合いに出た
ら、お相手が付き合っている彼氏彼女だった　みたいな、とにか
く微妙な雰囲気である。

「……………ええと、その……………なんで呂飛君、独りでこんな遅くに来たん
？　笛理ちゃんはどうしたん？」

幼い頃から粗野で毒舌な一面を見せていた呂飛とは違い、常に大
人しくいじめられっ子気質だった笛理は、名前や女の子っぽい服装
とあいまって女の子だと思われていた。成長したことによりその誤
解も解けたが、鈴子のような幼なじみたちからは未だに“笛理ちゃ

ん” “フェリちゃん” などと呼ばれている。

ちなみに、呂飛も弟のあだ名に合わせて“ロヴィ”というあだ名がつけられたが、元々の名と大した違いがないので広まっていない。
閑話休題。

「家出してきた。泊まる場所がない。泊める」

普段、女性には優しく接する呂飛だが、なにしろ相手は物心ついたときから中等部に入るまでずっと一緒に遊んでいた幼なじみである。昔ならともかく、今さら女の子扱いするには、彼は少し照れ性であった。

「家出つて……呂飛君、まだそういうのやってたん？ あはは。な
んや、やつぱ呂飛君は変わらへんね」

ひとしきり笑ったあと、ふいに鈴子が不思議そうな顔をする。

「でも、なんでうちん家なん？ こういうとき、いつもだったら斗と
仁にお夫におん家に行くんじゃないの」

斗仁夫とはもちろん栖辺院斗仁夫ことである。彼もまた板利兄弟の幼なじみで、特に呂飛とは腐れ縁のような関係を築いている。

全くどうでもいいことだが、実は筆者は栖辺院の名前がこの漢字であっているか自身がない。自分の責任なのだが、こいつの名前漢字が多くて複雑でよく覚えられないのである。今のところ確かめる方法がないので、もし間違っていたらご愛敬ということにしていた
だきたい。

「栖辺院の家に行ったら、あいつが叱られるんだよ。癪だけど、今
まで散々迷惑かけてきたからな。これ以上迷惑かけられねー」

まだ呂飛も栖辺院も幼かった頃、いつものように家出し、栖辺院の家に泊めてもらおうと押しかけたら、ちょうど栖辺院が呂飛のことで母親から叱られているところを見てしまったのである。それ以来、彼は栖辺院の家には行かなくなったのだった。

「え……うちも結構迷惑なんやけど……。おにいちゃんもおるし……」

「いや、お前ん家、まだ泊まったことないだろ？ 俺の経験からす

ると、二、三日ぐらあまでは大丈夫だ」

「うちの気持ちももう少し汲み取ってくれへん？」

親しき仲にも礼儀あり、という言葉があるが、この場合『親しくないのに礼儀なし』って感じである。

さすが呂飛！ おれたちにできないことを平然と以下略。

「まあ、昔のノリなら普通に泊めれたんやけど……。でも、もううちら、十七歳の男女やん？ 一つ屋根の下で寝るのはちょっとアレやし……。大体、おにいちゃんが許してくれへんわ、そんなこと」
鈴子とその兄・蘭太はへ夕校に通うため、実家から離れたこのアパートで二人暮らしをしている。

で、現在その蘭太さんは何をしているかということ、風呂に入っているのだった。

兄貴が入浴している間に、自分の部屋で勉強だとか明日の準備だとかやっているときに呂飛が現れ、蘭太に気づかれないようにそつと彼を招き入れたのである。

「ん、それについては考えてある」

そうのだまいながら呂飛が背負っていたリュックから取り出したのは、表紙に可愛らしい小さな女の子が描かれた、『LO』という雑誌だった。

.....。

これについては少々解説が必要だろうか。

低地蘭太にはロリコン疑惑がある。

その噂が囁かれはじめた発端は全く些細なものだったのだが、いつしかそれは某奇妙な冒険漫画に出てくるギャングのボスがヘタレ認定されているのと同じくらい常識扱いされてしまっているのである。

で、たった今呂飛が手にしている雑誌はいわゆるその、有り体にいうところのエロ漫画雑誌であり、しかもロリコン向けなのである。表紙はあんなに可愛いのに。

そんなわけで、呂飛は蘭太にエロ本を渡すし懐柔させようとしていたのだった。

解説おしまい。

「な　なんでそないな本持つてるのん!?　そ、それって、その……つまり、えっちな本、やないの!?!」

どうやら鈴子はこの雑誌のことを知っているらしかった。

まあ、ロリコン(?)の兄を持っていると、色々なくていい苦労をするのだろう。

「別にこのくらい、簡単に手に入るぞ。てか、男がエロ本持つてて悪いかこのやるー」

念のために言うておくが、呂飛にはロリ趣味もシヨタ趣味もない。お忘れなく。

「わ、悪いに決まってるやんっ!　なんでそれをうちん部屋に持つてくるん!?　しかもそれを見せびらかすなんて……うちやなかつたら今すぐ追い出しとったで!?!」

確かに、仮にも女の子にエロ本を見せびらかすのはいささかデリカシーが足りない行いである。

「　もう!　わかつたわ、泊めたるわ!　でも、おにいちゃんからOKが出たらやで!?　それに、一泊以上は絶対駄目!　あと、うちの部屋にはながあつても入らんとして!」

流石に嫌気がさしたのか、とうとう鈴子が折れた。付けられた条件は、まあ、女の子としては当たり前のことだろう。

「ありがとう、素敵ハンビターなお嬢さん。今夜の恩は、一生忘れないよ」
先程までの態度とは裏腹に、紳士的に礼をいう呂飛。一応この兄弟は、やればできる子なのである。可愛い女の子の前限定ではあるが。

「じゃあ、おにいちゃんには呂飛君から話をしといて。おにいちゃん、もうお風呂あがってるはずだから。うち、ちょっとやらなあかんことができちゃって」

言いながら、携帯電話とファンシーなアドレス帳を取り出す鈴子。

呂飛はそれに気づかず、「おー、任せとけー」と呑気に手を振りながら部屋から出ていった。

自分の部屋に一人きりになると、鈴子はアドレス帳を開き、誰かの番号を探しはじめた。目当ての番号が見つかると、携帯に入力し、誰かに電話をかけた……。

「あ、もしもし笛理ちゃん？ 久しぶりやね、うち、鈴子やけど憶えてる？ 夜中にいきなり電話してごめん。えと、呂飛君のことなやけど……。うん、知ってる。実は今、うちん家におるねん。あ、今すぐには来なくてもええよ。もう少ししたら泊まるかどうかはつきりするから、そしたら電話するわ。え？ いやいや笛理ちゃんが謝らなくてもええから……。確かに迷惑はしてるけど、久しぶりに呂飛君と話できて楽しかったし。中学生になってから、ろくに会いもでけへんかったやん？ ま、とにかく迎えに来てくれればそれでええから。笛理ちゃんの顔も見たいし。ん、今度みんなで会おうって？ あはは、ええね。楼出とか斗仁夫とか土主とか義流とか、いっぱい呼んで同窓会でもしよつか。ふふ、ん、それじゃあ、またかけなおすから」

プツツ、ツー、ツー。

そして、翌日。

「なんで朝一番にバカ弟が迎えに来てんだよこんちきしょ

」！

「兄ちゃんこそなんで鈴子ちゃんと蘭太兄ちゃん家でお世話になつてんのさ」

そんな感じの板利兄弟の涙目喧嘩が、何故か早朝に、低地家のあるアパートの前で、近所迷惑を考えずに盛大に行われたとき。

続く

その10 長男失格（後書き）

やべえ！ 段々書く文字数がどんどん増えて行ってやがる！ めっちゃ短かったその1が懐かしい！

そんなわけで「その10 長男失格」でした。今回は本文がめっちゃ長いので、あとがきもめっちゃ長いです。ぶっちゃけ読まなくてもなんの問題もないので、時間がない人は読まないほうがいいです。

まず、板利兄弟が『双子』なこと。

単純に凡ミスです。当初は弟が一年生、兄が二年生の予定だったのですが、その1でうっかり弟も二年生にしちゃったので、設定の辻褄を合わせるため『双子』にしてしまいました。本当に申し訳ありません。

本文のこと。

最初は呂飛君のドタバタ家出騒動記の予定で書きはじめたのですが、気がついたら鈴子さんとのラブコメになってました。どうしてこうなった。

新キャラ、呂飛君と鈴子さんのこと。

どっちのキャラも把握しきれずに書いたからこんな有り様だよ！ 二人とも好きなんだけど……。なんか、二人してあまり書いたことのないキャラなので喋り方とか苦戦しました。

特に鈴子さん。滋賀弁わかんねえよ！ ということでステレオタイプな関西弁になってしまいました。

鈴子さんの名前の由来は、元キャラのベルギーさんのあだ名『ベルベル』からベル、つまり鈴を連想して。最初は鈴の一字で『すず』と読む名前だったんですが、お兄さんの蘭太さんとの語呂を合わせたくなったので今の形に。

らんだとりんこ。

呂飛は……。まあ、当て字です。今気づいたんですが、なんだか

三国志に出てきそうな名前ですね。

彼こそ正統派ツンデレだと勝手に個人的に思ってるので、鈴子さん共々プッシュしていきたいです。

しかし、子分なのに親分との絡みゼロで終わってしまった……。

次回作は……どうなるのかな。色々話の候補とかあるけど。笛理のちび時代番外編とか、悪友編とか、井木無双とか。まだ出せてない人たちがいるし。

とりあえず次回からは、もう少し話を短くしたいです。書いても書いても終わらないんだよ。

とにかく、今後もヘタ日を見てくださったらありがたいです。

長文駄文失礼しました。

その11 下着砦の三悪友 上(前書き)

近頃、下着を盗難される被害が出ています。下着はなるべく外に干さず、夜は家の中に入れておくようにしましょう。

b y 女子寮管理人

その11 下着替の三悪友 上

「ねえ義流、今ヒマ？」

放課後、いわゆるアフタースクールである。この言い回しにはなんだかデジャヴを感じるが、多分気のせいである。

三年E組の帰宅部エースこと土井津義流とじつゆりゅうは、今日も俊敏にして華麗な下校を繰り広げようとしていると、幼馴染みの帆ヶ梨絵里紗はんがり えりさが声をかけてきた。

「いや、これから帰ってルートにちょっとかい出したり小鳥と遊んだりしなきゃいけないから超忙しいぜ？」

「……それを世間では“ヒマ”って言うんじゃないかしら……」

呆れたように息を吐く絵里紗。慣れっこではあるが、義流のちゃらんぽらんぶりにはほとほと呆れさせられる。

「ちょっと相談があるの。大っぴらには言えない話だから、ここではできないけど……。できたらでいいから、風連池ふれんちや栖辺院すへいんも呼んでくれる？ 彼らにも関係ある話だから」

「んー、風連池は料理研の部長だし、栖辺院は、確か今日はシエ研のほうに出てるみてえだから呼べるかどうかはわかんねえけど……。つか、なんで俺に相談すんだ？ 自分で言うのもアレだけどよ、俺はオンナ心とか、そんなんよくわかんねえぞ？」

「誰もアンタにそんなもん期待しないわよ」
そういうものが期待できる人は他に沢山いるのである。誰とは言わないが。

「とにかく、私、茶道部の部室で待ってるから。二人を誘ったらそこに来てね？」

さつさと会話を終わらせ、颯爽と教室から出ていく絵里紗。その背中からは、なんとも形容しがたい、強いていえば“漢”らしさがかいま見えた。

「……………相談、か」

てか、俺相談受けるつつたっけ？ と素朴な疑問を脳内に駆け巡らせながら、義流も悪友たちの元へ向かうべく教室を出た。

「今日集まってもらったのは、他でもないわ」

時が移り、茶道部の部室、つまり和室である。絵里紗は集まった面々に対し、そう切り出した。

なんかよくわからない、壺とか置いたり上に掛け軸を飾ったりする謎の段差に腰掛けた義流。漆喰の壁に背中を持たれている風連池。畳に胡座をかいた栖辺院。戸のすぐそばに仁王立ちしている絵里紗と、その隣に戸惑いつつ立つ 皆様は覚えておいでだろうか、南国産カジキマグロな一年生である 知恵晴子ちえせいこ、というメンバーである。

どうでもいいが（この言い回しもこれで何回目だろうか）、茶髪の絵里紗、アルビノの義流、金髪の風連池、褐色肌の栖辺院と晴子と、見事なまでに和室に全くそぐわないメンバーが揃ったものである。

「実は女子寮のほうで」「あつ、待ってください。私から話しますから……………」

口を開きかけた絵里紗を、晴子が制する。“せいこがせいする”となんか駄洒落みたいになったが、別にそんなつもりはなかったのである。

「……………じゃあ、晴子ちゃん、お願い」

不安そうに、そして心配そうに引導を渡す絵里紗。それに対し、晴子は意を決したように話を始める。

「実は、最近女子寮に下着泥棒が出るんです」

「……………下着ドロお？」「……」

意図せずして男性陣の声がシンクロする。

「はい。夜、ベランダに下着類を干しておく、次の朝には根こそぎ無くなってるんです……………」

下着泥棒はチープでありがちな犯罪と思われ、実際そうなのだが、それでも被害者にとっては笑い事ではない。どこの誰ともわからない人間に普段着ている下着を盗まれ、それをどういった意図で使われてしまうのか、という生理的嫌悪を味わうのだ。流石に性犯罪ほどではないが、それでも、被害にあつた女性は酷く不快な思いをするのである。

「寮に入ってる人みんなが被害にあつてる、ってわけじゃないんだけどね。ただ、一年生の被害が酷いらしくって。それで、一年生の代表として晴子ちゃんが寮長の私に報告してくれたの」

漢気溢れる大和撫子として名高い絵里紗は、学内外で様々な仕事を頼まれることが多い。そのうちの一つが女子寮の寮長である。まあ、他の三年生に任せられる人がいない、というのもあるが。なにしろモブを除けば、絵里紗以外の三年女子は今のところライナしかいないのである。

「ふえつくしよいつ!!」ドイン

「っ!? どうしたの姉さん、風邪でもひいたの?」

「大変、後で卵酒でも作って兄さんと結婚しなきゃ」

「その後半必要ないよ!? 必要ないよね!？」

「うう……誰か私のことを噂してくれてるのかなあ……」バイーン

「姉さんに限ってそれはありえないと思うわ、友達いないし」

「う……うわああああ……ん!!」ドドインブイーンバイーン

「ね、姉さ　んっ!？」

………閑話休題である。

「……あー、つまりこういうことかな? 『お兄さんたちに女子寮に出没する下着ドロを捕まえてほしい……』」

流れるに全然喋られなかったので、ちよつと存在を忘れかけてた風連池が結論を出す。

「Exactly(その通りでございます)、と言いたいところだけど、ちよつと違うわ。私があんたたちに頼みたいこと、それは

「
「 よりにもよって女の子の下着を盗むなんてゲスな真似をする
糞野郎を捕まえて、そいつが二度とまともな生活を送れないように
ぎったんぎったんに叩きのめすのよ」

その瞬間、背景に般若が浮かんだかと錯覚してしまうほどスの
効いた声に、しかし表情は大輪の花を咲かせたかごとき笑顔の絵里
紗。

その場にいた男性陣の気持ちを、やっぱり空気だった栖辺院が代
弁する。

「……ほんま、女って怖いなあ」

「ちよつ、私も同類ですかっ!？」

女の子の中でも特に例外のほうに属しちゃう絵里紗といっしょく
たにされるのは、流石に心外な晴子であった。

「へー、晴子ちゃん、釣り同好会に入ったの。お兄さん、ちよつと
意外」

「はい、私、ちっちゃいころはよく海や川で魚釣りしてたから、な
んか懐かしくて」

「そうなん？ 確か南の島に住んでたんやろ？ どんな魚が釣れた
ん？」

「そうですねえ……あんまり覚えてませんけど、お爺ちゃんに船釣
りさせてもらったとき、カジキマグロを釣った覚えがあります」

「カジキ!? マジかよすっげーじゃねーかそれ! あれだろ、な
んか長い角生えたやつだろ!? かっこいいよなあ! 俺様ほど
じゃねえけどな!」

「なんで魚とかっこよさなんて張り合うのよ……」

夜、具体的に言うとお八時すぎぐらいである。

あれから一旦解散し、それぞれ夕食を済ませ学校に集合した彼ら

は、いよいよ今宵の戦場である辺田学園女子寮に向かっていた。

ただ黙々と歩くのもなんなので、トーク上手な風連池が元々知り合いだった晴子に色々話を振り、返ってきた応えにまた話を広げ、と実に上手いこと場を盛り上がらせていた。

そう、彼はああ見えて、女性に優しく紳士的で頭も良く運動神経なイケメンという、一步間違えれば乙女ゲーの攻略対象になっというそんな人間なのである。

これでセクハラ大好きな変態でさえなかったら、いわゆる究極の^{アルティミッ}ト・シンケ生命体・風連池土主の誕生のだが、いやはや、天とは気紛れで残酷である。

「そういえば、うちのクラスに風連池さんと同じ名字の子がいるんですけど、ひよっとして妹さんですか？」

「萌那もなのことかい？ そっか、晴子ちゃんと同じクラスになったのか……萌那、教室ではどんな感じ？」

「ちよつと堅いとこありますけど、すごく真面目で良い人ですよ？ 目利科さんと一緒に学級委員やってるんですけど、目利科さんと違って全然サボらないし、むしろその分の仕事を引き受けちゃうくらい」

「えっ、萌那つたらよりもよって目利科と仕事してるの？ 全く……後で目利科には注意しなさいって言わないと……」

「なんだお前、妹なんていたのか？ 全然想像つかねーな」

「俺、前に見たことあるけど、めっちゃ別嬪さんで眼鏡がよう似合っつったで。ほんま、風連池にはもったいないくらいや」

「でしょ？ いやあお兄さん、自慢できるものは結構あるけど、中でも特に萌那は自慢してもしたりないね！ ちよつと世間知らずなのが玉に瑕だけど、ほんと可愛くて可愛くて仕方ないんだ！ だから、変なちよつかい出したら、お兄さん容赦しないよ？」

「なんか意外ね、風連池がこんなにシスコンだったなんて。どこかのブラコンとペドそっくり」

「シスコンじゃないよ！ 水菓とキャラが被るじゃない！」 「ブラ

「コンじゃねえし！ 弟可愛がつてなにが悪いんだよ！」「ペドちやうがな！ 子分可愛がなのは親分として当たり前や！」

「ほんと、三人とも似た者同士なんですネ ……」

そんなお馬鹿会話をひとしきり繰り広げたのち。

一行はついに、女子寮の前にたどり着いた。

「そーいえばよお、なんで押鳥じゃなくて俺たちに頼んだんだ？」

「だって、楼出さんって荒事にむいてないでしょ？ その点あんたらはこういうの慣れてるだろうし、なによりちよつとぐらい怪我させても何の問題もないし」

「いや、問題はあると思いますけど……」

晴子は知らなかった。かつてこの三人が中学時代、ヘタ校に悪友ありとまで言わしめたほど暴れていて、それをほんの少しではあるが大人しくさせたうちの一人が絵里紗その人であることを。

「……まあ、晴子ちゃんが心配することやあらへんって。俺ら結構やんちゃしとつたから、怪我には慣れてるし、そもそもそんなドジは踏まへんよ」

「そうそう、お姫さまはお城で騎士の活躍をのんびり眺めてなよ。

お兄さんたちの活躍見てたら、きつと惚れちゃうよ？」

「そーいうことだな。全てが終わるころには、俺様たちを称える歌の一つや二つ、歌いたくなっちまうだろうぜ」

不安がる晴子をよそに、いつになくかっこいい感じの悪友ズ。なんかこのままだと、「俺、これが終わったら好きな人に告白するんだ……」とか言い出しちゃいそうな雰囲気である。

「……ふう。『自分の身を守る』『他の女の子も守る』両方しなきゃいけないってのが寮長の辛いところよね……。覚悟はいい？ 私 は出来る」

「つたりめーだろ！？」「当然」「いつでもええで！」

「それじゃ　　いくわよ」

めちやくちや漢らしく出陣していく絵里紗たちを見、（やっぱりこの人たちを敵に回したくないなあ）と晴子は内心で再確認したの

だった。

後半に続く

その11 下着替の三悪友 上（後書き）

へた女子って普段どんな下着付けてんでしょね？

と、いう最低な出だしで始めてみました。今回も、っていうかこれからはずっとちょっと長めのあとがきです。

今回、このままだと絶対長くなると感じたので、上下構成です。これを書いている時点ではその予定です。上中下になってたらすいません。

新キャラは出ず、登場済みのキャラのみで回してみました。新キャラ期待してた方、すいません。次々回か次々々回には出ます、きつと出ます。

悪友主人公ということで、女の敵と対峙させてみたら、そんな奴を姐御が生かしておくわけないよね、ってことで何故か絵里紗さんが主人公っぽくなってました。晴子ちゃんはヒロインポジションですな。

いやあ、晴子ちゃんって使いやすいキャラですね。アクティブに動いてくれます。もっと出番増やしてあげよつと（ボソツ

登場には至らなかつたけど存在を匂わせた萌那さん。超大好きなんです。なかなか出してあげられないので、代わりに風連池お兄さんに代弁させたらお兄さんが完全にシスコンになってしまいました。いいのかな、これ。仲の悪い兄妹だったらどうしよう。

ちなみに、仲良し（笑）従姉妹ズはなんか気づいたら出てました。ライナさんが大好きなのを再確認できました。

絵里紗さんのキャッチコピー、“漢気溢れる大和撫子”は個人的に大ヒットです。絵里紗さんの性格を一言で表したらこうなりました。いつか和服着せてみたい。そういうえば茶道部なんだよな、あの。本文中では語れなかつたけど。

ここで明日使えない無駄無駄知識。この作品では基本、男子は苗字、女子は下の名前、先生は苗字+先生です。しかし、兄弟などで

苗字が被る場合は下の名前で書きます。義流とか呂飛とか。二人とも兄なのにな。

そんなわけで、へた日学園高等部その111 下着皆の三悪人 上
でした。次回も見てくださいたらありがたいです。

その12 下着砦の三悪友 下(前書き)

フライパンは武器ではありません。くれぐれも寮内で振り回さないでください。

by女子寮管理人

その12 下着砦の三悪友 下

「香、梅花、聞くんだけ！ 俺たちが前回のあらすじを語ることに
なっただぜ！」

「前回、絵里紗さんは義流さんたちを呼び出して、晴子ちゃんのと
ころに連れていったんだヨー」

「女子寮に出没する下着ドロを退治する的な」

「でも四人とも武器もなにも持ってないのにどうやって戦うネー？」

「素手でガチバトル的な？ マジありえなくね？」

「でもいざというときにはきつと、絵里紗さんのフライパンが唸り
をあげるヨー！」

「マジすげえ。超リスペクトつすマジで」

「あ、アイゴー……あらすじを言おうと思ったら、既にあらすじは
終わっていたんだぜ……」

「……お前ら、こんな夜中になに騒いでるあるか？」

「なんや、俺らの知らんとこで今、あらすじをやってたような
気がするわあ」

「気のせいじゃね？」

時刻はもうすぐ十時になるころ。悪友ズは女子寮に入る許可をも
らい、絵里紗の部屋で待機していた。

絵里紗曰く、次に下着泥棒に狙われるのは晴子の可能性が高いと
いう。晴子自身もそれを自覚していたため、絵里紗に相談を持ちか
けたのである。

だが、いくら非常事態であろうと、男子が女子の部屋に入るのは
いささかモラルに問題があるだろう。そう考えた絵里紗は、悪友ズ
を自らの部屋に待機させ、援軍が必要になったときのみ呼び出すこ
とにした。結果的に絵里紗という女子の部屋に三人もの男子が手持
ちぶさたで待ちぼうげという、これはこれでマズいんじゃないか

みたいな事態になったが、まあなんだその、気にしてはいけないのである。

「それにしてもさ、女の子の部屋にいて、その部屋の女の子がいなくなるときって、なんかやることがあると思わない？」

風連池がなにやらにやけ面で切り出す。セクハラするときやなにか性的なイタズラを思いついたとき、彼は決まってこんな顔をする。「あれやな」「あれしかねえな」

栖辺院すへいんと義流が訳知り顔で頷く。本人たちは努めて真面目な表情を作っているのかもしれないが、残念ながらそこかしこから笑みがこぼれ出ている。

「 第一回 ギャルのパンティ大搜索大会IN絵里紗' s ルーム
~~~~~!」

「うお ツ!」

風連池が完全に深夜の工口番組なタイトルの、わけのわからない大会の開会を宣言し、それにもう二人のバカの雄叫びが重なる。

どこからともなく聞こえてくる、ドンドン、パフパフ、といった幻聴や、紙吹雪やら花火やら鳩やらの幻覚が乱舞する中、風連池は儼かな顔つきでダンスの前に立ち、最上段の引き出しを一気に開いた。

「パンティは ここかッ!？」

なかった。そこにあっただのは夏物の服や小物類であった。というか、彼らは一体なにをしているのか。

風連池はある種のカリスマ性すら感じてしまうほど素早く華麗にダンスの引き出しを次々と開けていく。だが、結局どの引き出しにも下着はしまわれていなかった。

「くそッ 絵里紗の素敵なパンティはどこにあるんだ……!？」

ついには這いつくばり、床を殴りだした風連池。アメリカの刑事ドラマとかで、事件の手がかりが見つからないとき刑事さんがよくこんなことをするシーンがあるが、今探しているものはそんな高尚なものではないのである。あ、いや、下着が高尚なものではない、

という意味では断じてなく。

「土主しす！ ベッドの下に収納スペースがあつたで！ もしかしたら  
こん中にしまつてあるかも……」

部屋を泥棒さながらに物色し、ベッドの下を覗きこんでいた栖辺  
院が顔を上げる。ていうか、もうお前らが下着泥棒でいいんじゃない？

「え、ベッドの下ア？ おい、そこはやめとけよ、多分、変なもん  
しか入つてねえぞ」

なにかに気づいた義流（こいつはこいつで、クローゼットの中を  
物色していた。普通、下着はクローゼットにしまわない）が、他の  
バカ二人を止めようとする。が、風連池はそれを聞かずに、収納ス  
ペースを開けた。

そこにあつたものは

「……………」

「……………」

「……………」

一面の、小説や漫画。ただそれだけだったなら、三バカも沈黙し  
なかつただろう。

問題は、表紙やタイトルである。

表紙の大半は、二人の男性が様々なポーズや構図、服装で描かれ  
ているものである。ただ、やたら露出度が高かったり、抱きあつて  
いたり絡みあつていたり、まるで恋人同士のように見つめあつてい  
たり。タイトルも、やたら淫らなものばかりだった。

てつとり早く言うと、絵里紗のベッドの下の収納スペースには、  
いわゆる“BL”ジャンルの小説や漫画が、ところ狭しとぎっしり  
詰め込まれていたのである。

「……………」

栖辺院はなにも言わず、ただそつと収納スペースを閉じた。

「……………忘れよう。見なかつたことに、してあげよう」

「そつだな……………」

彼らは心の平安の為、今見たものは全て忘れることにした。

三八カ、もとい悪友ズが下着を探したり見つけちゃいけないものを見つけて沈黙している頃。

絵里紗と晴子は晴子の部屋でガールズトークに明け暮れていた。

「でね、やっぱり王道は“アサキク”だと思うのよ！ 普段“受け”に回りがちなアーサーが、大人しく謙虚で乙女なキクをこそとばかりに“攻め”る！ “受け”するときのアーサーも萌えるけど、“攻め”のアーサーもすっごく可愛いの！ で、攻め方がよくわからないアーサーを、受け慣れたキクが優しく受けとめて」

「は、はあ……そうですか……（アサキク？ 受け攻めつてなに……？）」

……否、“一部の”ガールズにしかわからないトークに明け暮れていた。

なお、絵里紗のセリフの意味がわからない方は、無理に意味を調べないでいただきたい。調べたら八割方あつちのほうに染まってしまっているので、そのままの貴方でいてほしいのである。意味がわかってしまう方は、わからない方に教えないでほしい。

「……それにしても、下着泥棒、出ませんね。今日はもしかして来ないんじゃないですか……？」

絵里紗の発酵トークが一段落したのを見計らって、晴子が話を切り出した。正直、絵里紗の話がさっぱり理解できない晴子としては、これ以上腐敗してたり発酵してたりする話が続くのはちよつとばかり嫌なのである。

「ううん、そうとは限らないわよ。ホシの犯行時刻が夜つてこと以外なにもわかっていないから、少なくとも徹夜覚悟で動かなきゃいけないわ。本当は、監視カメラかなにか仕掛けられたら良かったんだけど……高いし、ここら辺じゃ買えないし……」

以前、暗視機能の付いたビデオカメラを仕掛けておいたのだが、犯人に気づかれたのか、翌日には壊されていた。そのビデオカメラは絵里紗が自腹を切って購入したもので、その件も含め下

着泥棒は痛い目にあわせてやろうと絵里紗は固く心に誓ったのだ。

その時、ベランダに干してある洗濯物がかすかに揺れた。

「――」

二人に緊張が走る。風かなにかかもしれない。だが、今日は無風といつてもいいほど風の吹かない日だった。

絵里紗は部屋の状況を確認する。消灯時間が近いことと、明かりが点いていては困にならないのと、部屋の電気は全て消してある。今まで小声で話していたし、外から部屋の中を確認することはできないはずである。絵里紗はなるべく静かにベランダに近づいた。

夏が近づき、いい加減暑くなってきたので、戸はガラス戸ではなく網戸にしてある。戸が薄い分あちら側の様子が窺いやすいが、逆に言えばあちらからもこちらの様子が窺いやすいことである。洗濯物で遮られているとはいえ、大きな動きは控えねばならない。

洗濯物の揺れは続き、いよいよ大きくなってきた。やはり、下着泥棒が来たらしい。下着類はあらかじめ内側に干しておいたため、探すのに手間取っているのだろう。犯人の手が内側に伸びたときが、捕まえる最初で最後のチャンスである。

絵里紗は息を止め、少しずつ、だが確実にベランダへと近づいていった。

「（晴子ちゃん。なるべくベランダから離れて、アイツらにメールを出してくれない？ 『私の部屋を出て、この部屋のベランダの前に来るように』って）」

絵里紗が声を潜めて指示を出す。晴子は頷き、そろそろ後ろへ下がっていった。正直、あの三人を信用していないが、保険にはなるだろう。

あと数歩でベランダに出られる距離になり、絵里紗は動きを止める。そして、やや大きめな通学カバンから、自身の得物、すなわちフライパンを取り出し、構えた。

手が、下着に辿り着く。

絵里紗は網戸を一気に開いた。

「  
ウおおおおおおおおおおおおおおおおオオオオオオオオオオオツツ！！！」

静寂を破り、熟練の兵士ですら怖じ気づくような雄叫びをあげ、フライパンを振りかぶり、洗濯物を薙ぎ払う勢いで手を、下着泥棒を殴りかかった。

「くたばれええええええええええツ、こんのクソカス腐れダボがあああああああアアアアアツ！！！」

彼女の許嫁である押鳥楼出が聞いたら、恐らく卒倒してしまうほど、乙女に似合わぬ罵倒を吐きながら、さらに殴り続ける絵里紗。下着泥棒（多分）の男は既に気絶しているが、構わず顔を重点的に狙って殴り、打ち、叩く。鬼気迫るとはこのことだった。

「ちよつ、絵里紗さん、もう止めて下さい！ 泥棒さんのライフはゼロですよ！」

このままで「オラオラ」とか「無駄無駄」とか、さらには「アリアリ」「ボラボラ」だの言い出しそうな雰囲気（おつとじりゆうで）の絵里紗を、どこかで聞いたことのあるセリフで止める晴子。ギャグとかじゃなく、あのままだと本当に墓地へ逝きかねない。

ずっと姐さんのターン！ である。  
「はあ、はあ……そうね、晴子ちゃん。殺したら死刑台に送れないものね……」

荒い息でとんでもないことを口走る絵里紗。流石に現在の日本の法律では、下着泥棒程度では死刑にも無期懲役にもできないので、念のため。

元々の顔が全くわからないほどぼっこぼこになった下着泥棒（笑）を二人で見下ろす。見れば、彼のポケットには晴子のものではない下着も突っ込まれていたので、下着泥棒で間違いないだろう。

「……おい！ そっちは終わったのか？ なんかそっちの方からすげえ音が聞こえてきたけど……」

後れ馳せながら悪友ズがベランダの外に到着した。晴子の部屋は一階にあるので、彼らからもベランダの中を窺うことができる。

「ええ、全部、終わったわ。悪いけど、通報してくれる？ 私、ちよつと疲れたから……」

「お、おう……」

ちなみに、下着泥棒の変わり果てた姿を見て、先程まで下着搜索をしていた三バカどもが震え上がったのは、今更言うほどのことでもなかったのだった。

「あの下着泥棒さ、近所に住むフツのサラリーマンだったんだってよ」

全てが終わわり、結局全く活躍しなかった悪友ズは、帰路についていた。

「結局、俺たちってなんの為に呼び出されたんやるなあ。なんか色々遊んどるうちに、なんもせずに終わってもうたわ」

「あれでしょ、絵里紗の部屋で遊ぶ為じゃない？ 深く考えるのはよそう？ 全て平和に終わったってことで、いいじゃない」

「あれが『平和に終わった』で済むのかよ……？」

下着泥棒の顔を思いだし、再び震えに襲われる義流。

「そんなことよりさ、こないだ女の子三人ナンパしてさ、今日の日曜合コンすることになったんだけど、行く？ “聖タリア女学院”の娘たちんだけど」

「え、“タリ女”の娘たち！？ どうだったん、可愛え娘なん！？」

「ふふ、聞いて驚かないですよ。フランス人のハーフで金髪美人の『ほしけの仏ノ座フランスソワーズ』ちゃんに、ちよつと日に焼けてて清楚な

『西条アン』ちゃん、そして義流みたいなアルビノの『独活林綺羅』  
ちゃんだ。みんな凄く美人だったよ〜?」

「よっし、ぜつてー行く! その日は一日中予定開けとく!」

「俺も予定ないし、そんなに可愛え娘なら行かないわけにはいかん  
やろ」

「じゃあ、日曜の十時に駅前集合ね。遅刻したら置いていくから、  
そのつもりで」

「おう!」「わかったわ」

バカ男どもの楽しそうな声は、男子寮に到着するまで、いつまで  
も続いた。

そして、蛇足。

「……おかしいわね、服やダンスが妙に乱れてるわ。あいつら、一  
体なにやったのかしら……明日、学校で会ったら問い詰めてやらな  
くちや……」

続く

## その12 下着砦の三悪友 下（後書き）

上巻より長い下巻ってどうなんでしょね？

という上巻よりは確実にマシな出だしで始めてみました。

今更ですが、本当にこのタイトルで良かったんでしょか。「絵里紗の頑張り物語」とかのほうが、内容にあってる気がします。

どうでもいいですね、はい。

ここから下は作品解説みたいななにかなので、まだ本文を読まない方は読まないほうがいいです。

下着泥棒さん。完全にモブですね。構想時にはとあるツンデレ眉毛の妖精さんだったんですが、フルボッコにされる元ヤン紳士を見なくなかったのでやめました。そういえば全然出番ない人ですね。次回あたり出すか。

絵里紗さん。無双です。なんかもう、さん付けしなきゃいけないような気がしてしょうがありません。

どうもこの人、私の中では『ジヨジヨ』に出てくるエルメス兄貴や『うみねこ』の楼座さんとイメージが被るんですね。だから無双させてしまいました。

いつか書きたいな、うみねこ×ヘタリア。

無双させるために前半はあえてコミカルにしようと思い、今まで使ってなかった腐女子ネタを使いました。作中に出てきた固有名詞はあくまでフィクションです。本当にフィクションです。

頑張って書いてはみましたが、正直、何回か心が折れました。無双より折れました。だって腐った方の気持ちなんてわかりませんよ、腐ってないんですもん。本当ですよ！ 嘘じゃないです！ 受け攻めってなんですか！？ 面白半分で同人誌紹介雑誌を読んで、思いの外へこんだ経験なんてないんですよ！

……まあ、そんなわけで、絵里紗さんの腐描写は完全に想像と妄

想によるものなので、「これはこうじゃない、こうだろ！」なことがあつたら笑って見逃してください。

悪友。……どうしてこうなった。

前半をコミカルにしようと思った結果がこれです。ボーイズトークを繰り広げようと思っていたら、いつのまにかパンティを探すバカ話になってました。

いや、嫌いじゃないですよ。大好きですよ、悪友は。男子が集まって中二のノリではしゃぐのは好きなんです。ただ、中二のノリどころか変態紳士のノリになってました。活躍もさせてあげられなかったし、本当にすいません。

いくらエルメス兄貴に似てたって、絵里紗さんはパンティをくれないでしょうね。

晴子ちゃん。残念ながら今回語ることはありません。前回誉めすぎました。ただ、色々役に立つキャラなのは間違いないので、今後もちよくちよく出ると思います。

聖タリア女学院の方々。元ネタはにやたりあです。へた日学園があるのなら、にやた日学園があってもいいじゃない、二次創作だもの、な感じで考えました。いつかそのうちへた日の外伝で書くかも。ただ、ガリ男やリヒ男も在籍しているはずなので正式な女学院じゃないでしょうね。何年か前に共学になったけど、看板替えんの面倒で名前変えてないとかそんなんだと思います。

……よし、これで全部消化できた。

ていうか、書きたいこと書いてたらエラい長さになっちゃったよ！ せっかく本文は短くできたのに！

まあそんなわけで、へた日学園高等部その12 下着砦の三悪人下 でした。

今回は多分、ツンデレ眉毛元ヤン紳士こと井木がなんかやらかすと思います。

それでは、またお会いできることを祈っています。

その13 ロードオブザ“キャラ弁” 前(前書き)

お前ら平日の朝くらいちゃんと起きなさい。

by 風連池

### その13 ロードオブザ“キャラ弁” 前

ある朝の井木家　　もとい、へ夕校男子寮の一室にて。

「もう、お前らいつまで寝てる気！？　お兄さん先に学校行っちゃうぞー！」

「ん……あと五分……ってああ！？　もうこんな時間かよ！　やばい遅刻するー！」

「うう……あと五分ですよ……ってうばあつ！？　もうこんな時間ですか！　遅刻しちまうですよー！」

「お前らこんなときでもそっくりりなのな！　とにかく、弁当はここに置いとくから、早く学校行く準備しろ！」

「べ、別に起こしてくれてありがとうなんて思っただけだからなっ！」

「ヒー君は亜佐とは違ってちゃんと感謝してやるですよ！　だからお前も感謝しろですよー」

「そんなこと言っていないで早く準備しなさい！　……もう、なんで俺がこんなお母さんみたいなことをしなきゃいけないかな……」

「隣に住んでる幼なじみ設定だからじゃないですかね？」

「なにこの夢も希望もない設定！　全員男だから誰も得しないじゃない！　あと“設定”とか言っちゃ駄目！　お兄さんも言っちゃったけどね！」

「いや、帆ヶ梨あたりなら喜ぶと思うぞ」

「いいから早く用意しろ」

「……そんなわけで、今日も一日が始まるのである。」

そして時は移り、四時間目。

ここは高等部から家二、三軒ほど離れたところに位置する小等部である。ここを卒業し、さらに中等部を卒業した者のほとんどがエスカレーター式に高等部に入学することになる。

ちなみに、小等部自体にはこれといった制服はないが、中等部のブレザー、高等部の学ランセーラーに影響されたのか、制服っぽくデザインされた服を着たり、同じようなデザインの服を毎日着たりといったことが流行っていたりする。

それはともかく、五年四組の教室。

高等部二年A組に属する井木亜佐の弟、井木秀太ひしたのクラスである。……今、「その当て字・読み方はねーよ」と思った方、自腹で某海上未承認国家の爵位を買うのである。

今の時間は国語のだが、担任の先生が出張でいないため自習で、申し訳程度に出された課題のプリントさえ仕上げてしまえば何をしてもええじゃないか空間と化している。

女子が集まってコイバナを繰り広げたり、男子が集まってDSやらPSPやらで通信対戦で盛り上がりたりする中、秀太は独り早弁をしようとして弁当箱を取り出していた。

普段、秀太は食にはこだわらない人間のだが（何しろ、兄特製消し炭……もといスコーンと、隣人特製絶品ケーキを食べ比べて、「どっちも美味しいですよ！」と言える逸材だ）、今日だけは特別なのだ。

今日持ってきた弁当は、レストランが開ける程料理の得意な隣人に、何日もかけてお願いしてやっと作ってもらった、特製のキャラクター弁当なのである。

彼は昼食の時間を今か今かと待ち焦がれ、そして四時間目が自習だとわかるやいなや、わくわくを抑えきれず早弁へと踏みきったのだった。

だが、そんな秀太の前に影が一つ。

「秀太君駄目じゃん、早弁したらさ」

髪を左側でくくり、秀太と同じような（残念な）眉毛をした少女である。額に貼った絆創膏からやんちゃそうな印象を受ける。

奥州戸和衣おうちわがすえ、秀太の隣の席の女子である。ちなみに“ワイちゃん”というそのまんますぎるあだ名と呼ばれている。

へその見えるチューブトップにホットパンツを履き、ピンク色のパーカーを羽織るといふなんと大胆な服装だが、年中水兵服の秀太に比べれば別にどうということでもないのである。

「えー、ほっといてくださいですよ。ヒー君が食べたいと思ったから食べるんですよ」

「だーかーらー、それが駄目なんじゃん。みんなが食べてないのに自分だけ食べるのはいけないことだよ？」

これは没収ー、と秀太の手から弁当を取り上げる和衣。

「あー！ 返せですよヒー君のお弁当！」

「返したら食べるんでしょ？ お昼になるまで返さない」

座ったまま手を伸ばす秀太とその手が届かぬよう弁当箱を高く持ち上げる和衣。微笑ましい光景である。

「……じゃあ、中を見るだけですから返せですよ。お昼になるまで絶対食べないですから」

「本当？ ちゃんと約束する？ 神様に誓える？」

「神でも悪魔でも亜佐の眉毛にだって誓ってやるですよ！」

「保証OK」

見てるとなんだか懐古の念に囚われるやりとりをし、弁当箱が和衣から秀太へ返還される。

「でもさ、なんで今日に限って早弁なんかしようと思ったの？ 確かに今日はたまたま自習だったけど……」

「今日のお弁当が特別な存在だからですよ。風連池に頼んで作ってもらった、特製ギソガマソ弁当なのですよ」

ギソガマソとは、ギソガマソである。いわゆる戦隊モノの一つで欧米では『パワーレンジャーロストギャラクシー』とか呼ばれていたような気がするのである。なんかかっこいいのである。かくいう筆者も幼少時は大ファンだったのだが、ギソガブルーがゴリ顔だったのだけは納得がいかないのである。

「な、なんで今ギソガマソ？ 最近は“ゴセイザー”とか“仮免ライダーゼローズ”とかなんじゃないの？」

何故か最近の特撮ヒーロー事情に詳しい和衣であった。

「ギソガマソがかっこいいからですよ！ レッドがマッシュルームカットの戦隊や変身音がダサくてかけ声が『せいやー！』なライダーなんか目じゃないですよ！」

その割にはしつかり詳しいのは気にしてはならないのである。

「へ、へえ、そう。じゃあこれ、いわゆるキャラ弁なんだ。それならあたしもちよつと見てみたいかな」

「ふっふっふー、それならお前にも見せてやるですよ。見て驚けなのですよー？」

だらららら、とどこからかドラムロールが聞こえる中、秀太がゆっくりと蓋に手をかける。

だが。

そこにあつたのはギソガマソではなかった。

普通。どこまでも普通で、しかし作つた者の腕前がかなりのものだとわかる、彩りのいい普通の弁当であつた。

「これ、ヒー君の弁当じゃないですよ……」

秀太がスクイズ最終回の桂言葉並みに眼からハイライトを無くして呟いた。

四時間目も、残り半分である。

「なるほど。つまり君は朝のゴタゴタで、お兄さんのお弁当と自分のを取り違えちゃつた、つてわけなんだね」

和衣が状況を整理した。

普通なら重さや大きさを間違えないだろうが、慌てている人間は注意力が弱くなるものである。

「うう……このままじゃせつかく作ってもらつたヒー君のギソガマソ弁当が亜佐に食べられちゃうですよ。楽しみにしてたのに……」

椅子の上で膝を抱え、すっかり落ち込んでしまった秀太。心無しか、彼の周りだけどんよりとした空気が漂っていた。

「もう、そんなに落ち込まないでよ。また作ってもらえばいいじゃ

ない」

「ヒー君はあのギソガマソ弁当が食べたかったのですよ。たとえば作ってもらったって、それは別のギソガマソ弁当で、ヒー君の食べたかったギソガマソ弁当とは違うのですよ……」

和衣の励ましに、下を向きながら応える。こういう子供のあれじやなきや嫌！ というわがままにどれだけ大人が泣かされてきたのか、彼は知らない。

和衣はため息を吐き、出来ればあまり言いたくなかった提案を口にすることにした。

「じゃあさ。直接お兄さんの高校に行つて、お弁当取り替えてもらえばいいじゃん。お兄さんの高校、同じへタ校なんでしょ？」

その言葉に虚を突かれた顔をし、やがて顔を輝かせる秀太。

「お前天才ですか!？」

「あたし時々思うんだけど、秀太君ってひよつとして馬鹿？」

眼が百万ドルの夜景状態の秀太に呆れ返る和衣。

「あと二十分ぐらいでお昼だけど、早く行って早く返してもらえばお昼までに間に合うはずだよ、たぶん」

和衣は高等部の広さと先生から見つからずに小等部を抜け出す大変さと時間が過ぎる早さを知らなかった。

「だったら善は急げですよ! とつとと高等部へ行つて亜佐の野郎から弁当を取り返すですよ!」

椅子を蹴つて立ち上がり、走つて教室を出ていく秀太。普段の授業中なら絶対にできないが、そこは自習ええじゃないか空間、誰も気にしなかった。

「本当に行くとは思ってなかった……」

走り去つた秀太を見、またも呆れる和衣。そして、ふと彼の机を見て、忘れ物に気づいた。

「お兄さんのお弁当忘れちゃ駄目じゃん……」

こうなつてはしょうがない。自分で招いた事態だ。

そう腹をくくり、亜佐の弁当を持ち、彼女も高等部へ向かうこと

にしたのだった。

続く

### その13 ロードオブザ“キャラ弁” 前（後書き）

また前後編かよ！

というわけでその13です。どうやら私には、ひたすら長くするか前後編に分けるかの二つしかできないのかもしれないかもしれません。

それはともかく。

新キャラのお二人、秀太君と和衣ちゃん。どちらも限りなくだじやれですね。

シー君はキャラのイメージが固まってるので書きやすいんですが、ワイちゃんのキャラはあまり把握出来ていなかったもので、中々筆が進みませんでした。ここだけの話、前後編に分かれたのはそのことが原因の一つだったりします。

好きなんですけどね、強気でじゃじゃ馬な女の子。ロリですし。ロリロリですし。

そういえば、以前活動報告でシー君は中等部と言ったような記憶がありますが、冷静に考えてそれはねーよと気づいたので小学生になりました。その活動報告で書いたネタの一つを消化できたのでよかるうなのだと思ってますが、苦情がある場合は随時受け付けています。あと感想もお待ちしています。リクエストも大歓迎です（ただしBL、テメーは駄目だ）。

後編は多分この二人が高等部で暴れ回るんでしょうね。羅飛君の胃が心配です。

今度こそ井木はちゃんと登場します。させるつもりです。またまともに出なかつたらすいません。

せつかくなので、次々回予告でも。

今のところ、その2で出たっきりの桐支屋を活躍させようかと思っっています。ねこたりあも出して、タイトルは『猫は桐支屋伯が好き』みたいな感じで。

まあ前回の予告みたいにまた内容が変わるかもしれません。前回

の予告のアイデアはいつかちゃんと使うので、期待してた方は長い目で見てやってください。

そんなわけで、『その13 ロードオブザ“キャラ弁” 前』でした。

また次回会えることを心より願っています。

その14 ロードオブザ“キャラ弁” 後(前書き)

井木亜佐は家庭科室の出入り絶対禁止。破ったらシベリア送り。  
by料理研究部一同

## その14 ロードオブザ“キャラ弁” 後

「ねえ縁楠へりくす、なんか今日は俺たちが前回のあらすじを担当することになったみたいだよ」

「えー前回なんか知らんしー、十里ちぢりがやればいいと思うんよ」

「もう、しょうがないなあ……。えっと、前は確か……。井木さんの弟の秀太君ひいたと、奥州戸さんの妹だか従妹だかの和衣ちゃんかえが登場したんだっけ」

「今思いついたんだけど、あらすじもピンクに染めたら可愛いと思わん？」

「どうやって染めるの！？ それでえっと、風連池さんに作ってもらった特製のキャラ弁を、井木さんのお弁当と間違えて持っていったらだんだよ」

「一面のご飯に桜でんぶぶっかけたピンク弁当とかマジ可愛くない？」

「そんな弁当食べるのは縁楠と目利科さんぐらいだよ……。それで、これからお弁当を取り替えてもらう為に高等部に行こうとしてるんだ」

「あらすじ終わったー？ 早くチェスの続きやるし！」

「……忘れてるかもしれないけど、今は調理実習中だよ？」

携帯電話の予測変換機能で『高等部』と出そうとすると、高確率で『後頭部』と間違えてしまうのである。

どうでもいいのである。

秀太と和衣は、誰にも見つからずに小学校を脱け出すというちょっとしたミッションインポッシブルをスークばりに切り抜け、どうにか高等部まで辿り着いた。

「まさか本当に段ボール箱被るとは思ってたけど……」

「パパに教えてもらった“ダンボリス”のおまじないですよー！」

そんな二人は現在進行形でミカン箱を被っている。

「で、お兄さんの教室が何階のどこにあるか知ってるの？ あたしここに来るのは初めてだから、よくわからないんだけど」

「……………考えてなかったですよ！」

「駄目じゃん」

ため息をつく和衣。こうなったら、入ってから探すしかない。

「お昼までに見つかるといいんだけどね……………」

和衣は、その台詞は見つからないフラグだと気づかなかった。

「大丈夫ですよ！ 大船に乗った気持ちで、ヒー君にどーんと任せますよ！」

わざわざフラグを強化する秀太。もはや九割九分確定である。

立てるべきでないフラグを立てまくった二人は、スネー っぽい格好でそのまま校舎へモソモソと入っていった。

「二年生の教室は三階にあるみたいだね」

「亜佐の野郎はA組だから、北校舎の一番端つこにあるですよ！」

校舎内には幸いにして案内板があり、二人は向かうべき場所の見当をつけることができた。

「急ぐ。早くしないと尺が……………じゃなかった、時間がないから」

階段を駆け上がるうとする二人。が、そうは問屋が卸さなかった。

「ん？ なんでえお前ら。小学生か？ なんでこんなところにいるんでえ？」

取古佐笹、ヘタ校名物の一つ、仮面おっさん教師である。仮面を

取ったらかなりダンディーでハンサムなのだが、四六時中仮面を付けているためただの変質者にしか見えないのはご愛嬌である。

「きゃあああああっ！？ 変なおじさんが現れたですよーっ！？」

秀太が妙に可愛らしい悲鳴をあげた。

「に、逃げるよっ！ 捕まったらきつと酷い目に遭うから！」

いくら怪しいとはいえ、言いたい放題である。

「て、てめえら！ 人をなんだと思っただやがるんでえ！？」

当然キレた取古先生。江戸っ子口調にも怒気がこもる。

「「きゃああああああっ！！」」

取古先生の恫喝にビビり、脱兎のごとく駆け出す二人。階段を昇るなんて余裕はなく、滅茶苦茶な方向へ走って行った。

「あつ、こら！ 待ちやがれいっ！！」

その後を大人気なく追いかけていく取古先生。いや、小学生が学校を抜け出して高校に忍び込んでいるのだから当たり前のことなのだ、何も知らない人が見たら酷い誤解を受けそうな光景である。

そんなわけで、二人の児童とおっさん仮面教師がおいかけてこを繰り返している間、中継で秀太の兄の井木亜佐の様子をご覧ください、なのである。

「わあああッ！？ 誰だ井木に料理（笑）を作らせた奴は！？

家庭科室が火災現場みたいになつてるじゃねーか！」

「うるさいばかりかあつ！ 俺はただスコーンを作ろうとしただけだっ！」

「井木、それスコーンやない、小麦粉製の消し炭や」

「うっかりつまみ食いした板利が泡を吹いて倒れたぞ！ 誰か救護班を呼べ！」

「何故食べたし」

「……………大惨事であった。」

それはさておき、カメラは秀太と和衣の元へ戻るのである。

「はあ、はあ……………やっと、撒けた、みたい、だね……………」

「あのおじさん、おじさんのくせに、足速すぎ、ですよ……………」

シニアvsジュニアの地獄の鬼ごっこに、持ち前の若さでどうにか勝利した二人は、先程とは違う廊下にいた。

「ていうか、ここどこだろ？ 何も考えずに走ってたから、変なところに来ちゃったよ」

「何回か階段を昇った覚えがあるですから、一階じゃないとは思ってますよ」

ちなみに二人が今いるのは、一年生の教室がある四階である。いくら一年だからって、一番昇るのが辛い階にしなくてもいいと思うのである。

どうでもいいのである。

「とりあえず、階段の所に行けばいいのかな。何階か書いてあるし、案内図もあるし」

「でも、階段ってどこにあるですか？」

「……………」

返事はなかった。しかばねのようだった。

絶体絶命、である。

このままじつとしていたら時間がなくなるし、下手に動いたらあのおっさん仮面に見つかるかもしれない。

二人の間に、（だから嫌だったんだよあたしは……）（早くギソガマソ弁当食べたいですよ……）みたいな、ある種険悪な空気が漂い始めたとき。

救い主は頬に冷えピタを貼ってやってきた。

「っ！？ あれ、どうして秀太君がここにいるのっ！？」

皆さん、羅飛来らひらいの名は覚えておられるだろうか。具体的に言っと、いつも呂士谷にお置ききされてる童顔チビなあの子である。

「？ 秀太君、あの人知ってんの？」

直接羅飛には会ったことがない和衣が訊く。

「羅飛ですよ。なんか色々あって仲良くなつたですよ」

極めてざっくりとした秀太の答えに、「ああ……」と頷く和衣。

秀太の話には、割と頻繁に羅飛が登場するのだ。

「それより、なんで羅飛がこんな所にいるんですか？ 今は授業中ですよ？」

自分たちのことを華麗に棚に上げて秀太は訊いた。

「ああ、それはね、ちよつと水道管で殴られちゃって保健室に行つてたんだ。じゃなくて！ それはこっちの台詞だよ！ 学校はどうしたの！？」

さりげなくとんでもない発言をしながらノリツッコミする羅飛。

「それはですねーかくかくしかじかでー」

秀太はこれまでの経緯をざっと説明した。

「ギソガマソ弁当ねえ……普通弁当を間違えたぐらいでここまでするかなあ……」

二人の向こう見ずっぷりに呆れる羅飛。

「ギソガマソ弁当の為ならなんだってできるですよ！」

「だからってなんでもしていいわけじゃないと思うよ……」

羅飛が注意するが、秀太は聞く耳を持たない。

「早速ですが、二年A組の教室に行きたいんですけど、どう行ったらいいですか？」

実はすぐ近くに階段があり、そこを降りればすぐ二年A組だという事実を秀太は知らない。

「その角を曲がったら階段があるから、そこ降りたらもう目の前にあるよ」

その事実を簡潔に説明する羅飛。

「そんな近くにあったですか!？」

「あ、ほんとだ、階段ある」

話を聞き見に行った和衣が報告した。

「ありがとうございますよ！これでヒー君はギソガマソ弁当を食べられるですよ！」

「お礼はまた今度するよ！」

「あ、うん。もうこんな危ない真似はししないでね」

元気良く駆け出していく二人を羅飛は苦笑して見送る。が、彼女の姿が見えなくなった直後、あることを思い出す。

「そういえば、さっき三階で取古先生とすれ違ったけど、大丈夫かな……？」

彼らの清々しい笑顔を思いだし、それが死亡フラグに見えた羅飛であった。

結論から言うと。

二年A組の教室に行き、見事弁当を奪還（正確には井木の鞆を漁りまくり、弁当を交換しただけ）した二人だったが、帰還途中に運悪く取古先生と鉢合わせし、壮絶な鬼ごっこ二回戦を繰り広げた結果。

「今時罰で廊下に生徒を立たせる学校があるんだね……」

「お腹空いたですよ……」

そこには、元気に廊下に立ち続ける二人の姿が！

鬼ごっこ二回戦では年の功で戦略負けしてしまい、取古先生に捕まった彼らは、小等部の先生に引き渡されてしまったのである。

その結果、罰として昼食抜きで廊下に立たされているのだ。

「一時はどうなるかと思っただですけど、ギソガマソ弁当の為ならどんな苦行にも耐えられたですよ」

後日、秀太は語った。

「でも、もう無断で学校を抜け出したりはしないですよ」

「……それって、先生に報告すればいいと思ってるの？」

最初から最後までとぼっちりだった和衣は呟いたのだった。

続く

## その14 ロードオブザ“キャラ弁” 後（後書き）

今度こそ井木をちゃんと登場させるといったばかりなのに……ス  
マン、ありやうそだった。でもまあ、その彼は活動報告の方で書い  
たSSでたくさん活躍したから良しとするってことでさ……こらえ  
てくれ。

というわけで後編です。期待してた方、本当にすいません。これ  
じゃまるで“出す出す詐欺”ですね。

なんででしょうね。構想段階ではたくさん出番あったのに、取古  
先生が出たとたんおっさんとガキの鬼ごっこ話になってました。大  
人気ないおっさんが好きだからかな？

ちなみに、家庭科室では二年の三クラス合同で調理実習をしてま  
した。テーマは『昼御飯の後に摘まめる軽食』。その結果がああ惨  
事ですが。暇な人は誰がどの発言をしたかを考えてみたら楽しいか  
も。全問正解者には好きなキャラ・テーマでリクエストとか。いや、  
いつだってリクエストは募集中ですが。

久々の羅飛君。あまりにも久々すぎてどんなキャラか忘れてまし  
た。薄幸不憫キャラで良かったんでしょうか。どうせなら江州登も  
出せばよかったなあ。

そういえば、最近諸事情でキタユメをなかなか見られないんです  
が、イギリスの映画ネタには爆笑しました。あれはイギリスがカナ  
ヅチキャラと解釈してよろしいのか。よろしいよね。

作中ではそろそろプール開きの季節なので、井木が目利科辺りに  
泳ぎ方を教わる話でも書くこうと思っています。タイトルは……『限  
りなく透明に近いプール』なんてどうでしょう。はい、ただのダジ  
ヤレです。

そして次回予告。

一年B組の女子学級委員長・萌那が朝一番に登校して見たものは、  
校庭を埋め尽くすほど大量の“ネコ”の群れだった　！？　みた

いな。タイトルは『猫は桐支屋ハクが好き』の予定です。内容が変更  
わってたらすいません。

まあそんなわけで、『その14 ロードオブザ“キャラ弁” 後』  
でした。

それでは、次回もまたお会いできることを心から願っています。

その15 猫は桐支屋ハクが好き(前書き)

“変態”って、縦に縮めると“恋”になるよね。

b y 風連池土主

……なにを言っているのか、よくわかりませんが、兄さん。

b y 風連池萌那

## その15 猫は桐支屋ハクが好き

六月である。

衣替えとプール開きの季節である。

いくら現実ではもうすぐ年が変わるといっても、この世界では未だに六月で、学ランがカッターシャツに、セーラー服は半袖に変わっているだけなのである。

それはさておいて。

一年B組の風連池萌那ふうれんち もなは学級委員長である。

もう一人の自称ヒーローなメタボリック委員長とは違い、彼女はいたって真面目な学級委員長であったので、今日も早朝から登校し、学級委員長としてやらなければならぬ仕事をしようとしていた。

校門に着き、そこから見える光景を見さえしなければ。

「な、なんなのだ、これは……？」

猫。

猫である。

校庭に、猫がいるのである。

別にそれだけなら驚くほどでもないだろう。学校には塀や囲いがあるとはいえ、人間より遙かに小柄で敏捷な小動物はいくらでも出入りができる。

ただし。

校庭を埋め尽くさんばかりの数となれば 話は別である。

「ニャー」「ニャニャニャーニャ」「マーオ」「ルルナーオ」「ニャフフ」「ギーツ」「ヴェニャー」

「……………」

様々な猫の鳴き声が飛び交う校庭を見て呆然とし、思わず後ずさる萌那。

そしてその後ろから、明らかに生徒にしか見えないような幼い容姿だが、きつちりスーツを着こなしたおかつぱ頭の教師が駆けてき

た。説明するまでもなく本田先生である。

「わ、私としたことが寝坊してしまうなんて……しかし、なんとか他の皆さんが来る前に登校できたようですね……って、ええっ!？」  
本田先生もドキッ猫だらけの校庭にぎよっとする。

「な、なんですかこれは……! 猫だらけじゃないですか! よく見たらうちのたままでいますし……と、とにかく校長に連絡を……!」

その後、遅れてやってきた他の教師たちとその場で臨時職員会議（学校内には入れなかった。入ろうとすると、猫たちが「フーツ」と威嚇してきて怖いから）をした結果、今日は臨時休校となった。

授業が無くなり喜ぶ者、これから遊びに行く相談を友人とする者、登校する前に連絡網が回ってきてこれ幸いと二度寝する者、猫と戯れる者と、それに対する生徒の反応は様々なものだった。

ただしその中のどれにも ある生徒は混じっていないなかった。  
へた校一の猫好きで知られる、三年E組の桐支屋伯きりしや はくである。

彼は校庭の真ん中で大の字に寝ていた。

「……ZZZ……ZZZ……」

日は既に昇りきっているが起きる気配は全く無い。むしろこのまま涅槃に入りそうな勢いである。

そんな折り、彼の周りに猫が八匹ほど集まってきた。まるで会議でもするように顔を突き合わせている。

「ニャー! ニャニャニャニャーニャニャニャニャーニャーニャーニャニャニャニャニャニャニャニャー!」

一番自己主張の激しそうな、顔に眼鏡のような模様がある猫が何事か言った。

ぶつちやけニャーニャー書くのが面倒くさいのと、何話してるのかちんぷんかんぷんなので、ここから先は「」この括弧を使って猫語を翻訳して進めるので、そのつもりで読み進めて頂きたい。

「よーし! これから町内猫会議を始めるぞー!」

先ほどの猫語を翻訳すると、眼鏡顔の猫はこう言ったのである。

「唐突だな……議題はなんだ？」

額にぶつとい眉毛模様の猫が顔を洗いながら言った。

「大体、なんでここなんだ？ お兄さんの美しい毛並みが砂まみれになっちゃうじゃない」

長毛種の猫が毛並みを整えて言う。確かに、校庭は猫集会にはむいていない。彼（？）が砂を落とす間にも、風が彼の身体に砂を付けていく。

「決まってることだろ、こいつのことさ！」

眼鏡顔の猫 仮に“アル猫”と呼ぼう は、前肢でズビシイ

ツ！ と桐支屋を指す。

「ヴェニヤー、この人、近所でも有名な猫好きな人だね？ なんでこんな所で寝てるのー？」

人懐こそうに眼を細めた、頭から一本だけ妙な毛が生えた猫がぺしぺし桐支屋の顔を叩く。すぐさま、首にドイツ国旗柄のリボンを巻いた凜々しい顔の猫が止めにかかる。

「やめる、フェリ。こいつの顔に肉球の痕が付くだろう」

ドイツリボンの猫（以下、ルート猫）がフェリ猫の首をくわえるが、もう桐支屋の頬にはくつきり肉球のスタンプが付いていた。

「それにしても……全然起きませんね。一体どうしたんでしょう？」

本田先生から「たま」と呼ばれていた猫（本田先生が飼っているの）で仮称菊猫とする）がしげしげと桐支屋を眺める。

「そう！ それなんだ！ 今日の議題は、こいつがずっと眠り続けている件についてなんだよ！」

今にも「ザツツライト！」とか言い出しそうな雰囲気アル猫が叫ぶ。黒い毛並みの猫が「うるさいあるー」と耳を掻く。

「どうということなのか全然わからないよ。説明してほしいなあ」

やたら毛がモコモコしたデブ猫……いや、ふっくらした体型の猫が「ニャフフフ」と笑いながらアル猫に妙な威圧感を与える。アル猫はそんな威圧感にもめげず、「どうもこうもないんだぞ！」とテ

「ブルを叩くように前肢で地面を叩く。」

「みんな、ここに来たときのことを思い出してくれ！俺達はこうしてここに来たんだ！？」

「それは……なんでだろうな？」

「まるで何かに引き寄せられたみたいだったね」

「引力って感じ？」

「なんかわからんが、とにかくここに来なければならぬと感じてな」

口々に似たようなことを口走る猫たち。その反応を見て、アル猫は確信を得たような顔をする。

「やっぱりみんなそうなんだな……よし、これはあくまで俺の仮説でしかないが、聞いてくれないか」

いつになく真剣な顔つきなアル猫。キリツを語尾につけても何ら違和感はない。

「俺達は今まで、ここに集まることは一度としてなかった。普段は人間がいるし、砂だらけだしな。いつも集会や会議をするときは、人間のいない所や、こいつみたいな猫好きの家ぐらだった。ここまではいいかい？」

ところでこいつ、なんか居心地がいいと思わないか？人間なのに、いつまでも一緒にいたいというか、日だまりの縁側みたいに。こいつの身体って凄く落ち着くよな。

俺が思うに、こいつの身体からは俺達猫を引き寄せるフェロモンとか、引力みたいなものがあるんじゃないか？最近の集会はこいつの家でばかりやってきたし。

つまり、俺が何を言いたいかというところ

そこで言葉を切り、他の猫の顔を見渡すアル猫。急にシリアスになった空気に、時折息を呑むような音が聞こえる。

「俺達がここに集まったのはこいつのせいなんだ！つまり、こいつが起きてどこかに行かない限り、俺達はここから離れられないんだよ」

「「「「「「な、なんだって  
!?」「」「」「」「」  
どうやら猫の世界にもあの漫画は知られているようだった。」

「え、えっとつまり、俺達、この人を起こさないところから出られないってこと!?!」

「だからそういつてるんだぞ!」

「起こす……か。しかし、どう起こすんだ? こいつ、さっきから起きる気配がないぞ」

「アーサー、あれ持ってこいよ。マーマイト味の猫缶」

「校庭を地獄に変える気ですか!?!」

「お前ら、マーマイトをなんだと思ってるんだよ!?!」

「毒物以上食物未満、かな?」

「我もあれだけは食える気がしないある……」

「Do Not Eatなんだぞ!」

「お、お前らああああああああ!」

アル猫の宣言以降、猫たちは火を点けたようなパニックに襲われていた。

「と、とにかく! こいつをどうにかして起こすことが先決だ!

お前ら行くぞ! 行くぞ? 行くぞ!?!」

「いいから早くやらんか!」

そして、猫たちは『ドキドキ 桐支屋お目覚め大作戦』を始めた。具体的には、顔をペロペロ舐めたり、顔や身体を肉球で踏み踏んだり、身体を擦り付けて臭い付けしたり、身体の上で跳び跳ねたり、身体の上で毛繕いしたり、耳元で「にゃあ〜ん」と鳴いてみたり。ぶつちやけ、全国の猫好きが見たら羨ましくなるぐらいの接待っぷりだった。

……だが。

「起きないな……全く」

それでも桐支屋は目覚めなかった。相変わらず、「ZZZZ……」と寝息をたてるだけである。

「もう、俺達じゃ起こせないんじゃないか……？」

フラ猫（毛並みの良い猫）が諦めがちに言う。他の猫も似たようなメンタル状態だ。

「そうだな……もう、諦めようか……」

アル猫が珍しく後ろ向きになったとき。

突如として、人の足音が近づいてきた。

猫たちの身体がビクンツと跳ね、それぞれ散り散りに走り去る。

「はあ、はあ……やっと見つけたぞ、桐支屋！ どうしてこんなところで寝てるんでえっ！？」

仮面でおっさんなことに定評がある取古先生だった。走ってきたのか息が荒く、仮面も外してそのダンディな顔が露になっていた。

そんな取古先生シークレットバージョンの声を聞いた途端に桐支屋は跳ね起きた。

「ん……取古……なんでここにいる……」

「なんではこつちの台詞だ！！ てめえのおふるさんから『息子が昨日の夜から帰ってこない』って電話が来て、こつちは町中探してたんでい！ なんでこんなところで暢気に寝惚けてンだよ！」

「……昨日は天体観測してた……。校舎の鍵が開いてなかったから、仕方なく校庭でやってたら……そのまま寝てしまった……」

「阿呆かてめえは！」

桐支屋と取古先生の口喧嘩に猫たちは呆然とする。

「す、凄いな、あいつ……怒鳴るだけで起こしちゃまったぞ……？」

「あんなにやったのに起きなかつたのが嘘みたいだ……」

そんな猫たちを尻目に、二人の口論はヒートアップする。

「ええいくそ、とにかくさっさと帰りやがれ！ おふるさんが心配してんだぞ！？」

「ん……お前に言われなくてもそうする……この髭面……」

「てめえ憎まれ口だけは一人前になりやがって！」

互いに手を出さないのが不思議なほど口論は盛り上がっているが、しかしまるで親子喧嘩のような微笑ましさを含みながら、二人は桐

支屋の家へと向かう。それに伴い、学校に居た猫たちも少しずつどこかへ去っていった。

「……なんだったんだ、一体」

ルート猫が拍子抜けしたのか、地面にどさりと身体を横たえながら言う。

「まあ、終わりよければ全て良しっていうじゃないか！」

「あれで終わりがいいって言えるあるか……？」

「いいんじゃないかな？ ニャフフ」

「ま、そろそろ俺達も帰ろうか。お腹も減ったし」

「今日はツナ缶でしょうかね……」

「俺パスタが食べたいな」

「猫がパスタを食べるな！ 大人しく缶詰かドライフードで我慢しろ」

「ヴェニヤー……」

口々に言い合いながらアル猫たちも自分の家去っていく。そろそろ日が傾き始めていた。

そして、翌日。

「な、なんだこりゃあ！？ 校庭が猫の糞だらけじゃねーか！」

「うわ……強烈なアンモニア臭……」

「サッカーゴールに爪研ぎされてる……」

「ゲホツゲホツ！ そこら中に猫の毛が……俺、猫アレルギーなんだよ……」

この日もやむを得ず、休校になったという。

こうして六月某日は、“へた校が猫だらけになった日”として全へた校生&教員の脳裏に深く刻みこまれたという。

続く

## その15 猫は桐支屋ハクが好き（後書き）

にゃんこ可愛い！ にゃんこ、にゃんこ〜っ！

……失礼、取り乱しました。そんなわけで今回はねこたりあ祭りでした。

桐支屋が寝てるのを良いことに猫たちがめっちゃイチャイチャしてます。これが人間だったらえらい事態だ。一介の猫好きとしては羨ましい限りです。

それはさておき。

新キャラの萌那さん。どう喋らせればいいのかいまいち掴めなかったので出番少なめです。次回こそはもっと目立たせたい。

ねこたりあ。キャラは大体変わらないのでそれほど苦労はしませんでしたね。強いて言えば名前をどう呼ぶか。とりあえず、『人名+猫』にしてみました。

桐支屋と取古先生。この二人の喧嘩を書くのは楽しいです。ていうか、取古先生がいたらどんな展開でも進む気がする。

桐支屋は久しぶりでタイトルにもなったのにあまり喋りませんでしたね。寝てたから当たり前なんです。余談ですが、彼のお母さんはもちろんビザンツさんです。取古先生と同級生で色々青春してたらいいなあ。あ、でも校長はどうしよう。

どうでもいいですが、桐支屋はこの作品では天文部所属という設定です。星座がギリシヤ神話的な意味で。毎晩「ん……あれがカシオペア座……」とかやってたりしてます。

今回は……確か前回のあとがきで、井木が泳ぎを覚えてもらう話といいましたっけ。タイトルは『限りなく透明に近いブルー』で。相手は目利科かなあ、やっぱり。他に奴が頼りそうな人いないし。

弟分に泳ぎを教えてもらうの、辛いでしょっね。

まあそんなわけで、『その15 猫は桐支屋ハクが好き』でした。相変わらず長つたらしい文を最後まで読んで下さり本当にありがとうございます。うぐざいました。

またお会いできたら幸いです。

その16 限りなく透明に近いプール(前書き)

風連池登場率高くね？

b y 井木

気のせいじゃない？

b y 風連池

## その16 限りなく透明に近いプール

六月、それはプール開きの季節である。

この始まり方にデジャヴを覚えるかもしれないが、それは気のせいである。

それはさておき。

男子がクラスでちょっと気になるあの娘のスク水姿にどきまぎしたり、スク水を着たくない女子が女子ならではの体調不良を盾にして見学したり、見学してた娘に水をかけて体操着を透けさせて「ちよつと〜やめてよ〜」をしたりする季節である。

ようやく梅雨も明け、ヘタ校にもそんなシーズンが到来したのであった。

そんな中。

「どうしたんだい、亜佐？ 自分の料理の味にやっと気づいたのかい？」

ヘタ校は食堂。何やら青い顔をして風連池印の特製弁当を食べる井木亜佐に、ホットドッグを持った目利科めりかが声をかけた。

ちなみにこの二人、パツと見には金髪ぐらいしか共通点がないが、従兄弟同士なのである。今でこそ他人だよみたいな顔をしているが、昔は目利科の双子の兄弟である金田とともに一つ屋根で生活したりもしていたのだった。

「なつ、そんなわけないだろばかあつ！ ……別のことだよ」

いつも通りのツンデレテンプレで返すと、再び浮かない表情でミートボールを食べる井木。その姿に目利科が首を傾げると、

「ほら、もうすぐプール開きじゃない？ こいつカナヅチだから憂鬱なんだよ」

と、やってきた金髪碧眼に髭を生やした生徒が井木の弁当をつまみ食いしながら答えた。

「ぶつ風連池！」

「いいじゃないどうせバレるんだから。ていうか何年も一緒に暮らしててよくボロを出さなかったな？ うん、やっぱりお兄さんの料理は絶品だね」

髭の生徒 風連池ふれんちしず土主しずが自分で作った料理に酔いしれるのを尻目に、目利科は何か思い当たることがあったのか納得の表情を見せた。

「そうか、だから君は海にもプールにも連れてってくれなかったんだな！」

「しょうがねえだろ！？ 自分が泳げないのに、泳げるかどうかもわかんねえような子供連れて水場に行けるか！」

井木の逆ギレじみた反論に、目利科は「だったら」と口を開く。  
「なんで泳ぐ練習をしないんだい？ 泳げなくて得をすることなんてないだろ？」

「うっ、それは……」

目利科の素朴な疑問に声を詰まらせる井木。

「ああ、そうだ」

何気に井木の弁当を四分の一近く食べていた風連池が突然声をあげた。

「お兄さん、知り合いからプールのペアチケット貰ったんだけど、萌那が要らないって言うからどうしようか悩んでたんだよねえ。無駄にするにも悪いし、良かったら貰ってくださいない？」

棒読みで、あからさまに嘘臭い言い訳でチケットを差し出す風連池。だがAKYの目利科はそれに気づかず「Thank You！なんだぞ！」と貰ってしまう。

「あれ？ このチケット今週末が期限じゃないか。これは早速使わなきゃなんだぞ！」

目利科は井木の肩をがっしり掴むと、満面の笑みでサムズアップする。

「と、いうわけで今週末はプールで亜佐の泳ぎの特訓なんだぞ！」

「はあ！？ なんだよそれ！？」

目利科の提案に、井木は思いつきり嫌そうな顔をする。

「反対意見は認めないぞ！ そうと決まれば、さつさと章変えして週末にLet's Goなんだぞ！」

「だからなんだよそれは

！？」

食堂内には白眼で青筋を浮かべて突っ込む井木の怒鳴り声が響き渡り。

金髪三人集は別の意味で白眼視され食堂から追い出されたのだが、それはまた別の話なのである。

そして時は経ち、週末。具体的に言うと土曜日。

「そんなわけで俺達はプールにやって来たんだぞ！」

「誰に向かって言ってるんだ？ それは」

目利科の言う通り、味音痴な元兄弟は市内にある大型のプールに来ていた。

この街、辺田市は元々華族や富豪が集まる高級住宅街だったので、こういった室内型の娯楽施設はかなり充実している。

このプールも例に盛れず、競泳用プールから幼児用プール、ウォーター 슬라이ダーや流れるプールにその他水系アトラクション、果てはサウナ温泉レストランゲームコーナーと、『朝から晩まで一日中遊べるプール』として季節を問わず人気を博している。

唯一の難点は料金が若干高いことだが、チケットを持つ目利科達には関係のない話である。

そんな二人は競泳用プールに程近い、井木のような人達のための水深浅めの練習用プールの前に立っていた。

プールの前に、海パン姿の男が二人。

花も何もない光景である。

「じゃあ始めるぞ！ 準備はいいかい？」

星条旗柄の海パンを穿き、眼鏡を外した目利科が準備体操を終えた井木に声をかける。

「……なあ、本当にやるのか？」

対する井木は、ユニオンジャックがプリントされた海パンを穿いて、例えるなら彼の料理を残さず食べと言われたときの板利弟のような、心底嫌そうな顔をしていた。

「当たり前じゃないか。ていうかこの際だからぶっちゃけると、元兄が泳げないなんて俺が恥ずかしいだろ？　ただでさえ君は汚点だらけなのに」

「てめえそれが本音かあああああつ！」

本日の目利科は井木に対しやけに辛辣だった。

これが後の鬼畜眼鏡である。

もちろん、嘘である。

「まあそれは置いといて、まずは水に入ろうじゃないか。いくらなんでも、顔を水に浸けるくらいはできるんだろっ？」

目利科はいつの間にか既にプールに入っていた。

「まあ、できることにはできるが……」

井木もちゃぶ、ちゃぶ、と脚を水に入れる。しばらく体を水に慣らすと、ゆるやかに少しずつ入水した。

そして、そのまま底へと沈んでいった。

「……………え？」

目利科には目の前で何が起こっているのかわからなかった。

井木は、若い父親が幼い我が子を湯に浸けるような慎重さで、自らの身体を水に預けた。そこまではいい。だが、その穏やかな勢いのままで水の底へ沈んでいったのはどうということなのか。

目利科は停止しかけた思考を無理矢理再起動させ、淵に表示された水深を確かめる。1.3メートル。小学生ならいざ知らず、170センチ以上ある高校二年生が足をつくことが出来ないわけがない深さである。

「な、んだ、これ……？　意味がわからないんだぞ……」

ぶくぶくぶく、と井木が沈んだところから泡が無数に浮かんでくる。少なからず英語が使える目利科には、それらを生み出す音が『Heip』という風に聞こえた。

井木による精一杯のヘルプサイン。彼を救出には、その音が目利科の鼓膜から脳に伝わり現在の状況を正しく認識するまでかかった。

「……わ、What's!？　なんでいきなり溺れてるんだい!？」

「（気づくのおせえよばか　っ!）」

井木は水中でがぼがぼと水を呑みながら突っ込む。

不幸にもその渾身の叫びが彼の肺に残っていた酸素を使いきり。

彼の意識は、そこで途切れた。

「う……ここは……」

井木が目を覚ますと、そこは休憩室だった。

「やっと起きたんだな。ずっと眠ったままだから心配したんだぞ？」  
海パン姿のままの目利科が、右手にコーラ缶、左手に紅茶缶を持ってソファに寝そべる井木に話しかける。紅茶を井木に投げると、目利科はソファの向かいにあるベンチに座り、コーラのプルトップを開けた。

時計を見ると、時計は二時を指している。井木の記憶が正しければ、二時間近く気を失っていたようだ。

「……………!」

井木はふと、自分がどう助けられたのか考えてみた。井木は確かあの時、大量に水を呑んでいた。だがさっき水を吐き出した覚えはない。誰かが彼の氣道を確保し、心臓マッサージを行ったのだろう。そして、溺れるといえれば定番のお約束がある。

そう、マウストウマウス　人工呼吸だ。口ごしに気絶した相手へ息を吹き込むその行為は、合法キス（いや、キスは端から合法だが）といっても過言ではない。

ラブコメや少女漫画では鉄板のイベントであるこの行為。好きな

相手にしたりされたりなら天国だが、同性だったり嫌いな人だったりしたときは地獄である。

井木が危惧していること それは、もし目利科が自分を救助したのなら、“それ”をされたのか否かである。

「な、なあ或」

井木は震える手で缶を開けながらそれとなく目利科に訊ねようとする。だが、そこはAKYな目利科、

「元氣そうで何よりなんだぞ！ 俺はもうちょっと泳いでくるから、君は少し休んでなよ！」

350ミリリットルコーラを飲み干し、さつさとウォータースライダーのある遊泳ゾーンへ走っていった。

「あ、おい」

呼び止めようとするも、目利科は全く聞かずにプールサイドへ。途中で足を滑らせ、監視員に注意される。

「……………」

井木は、もやもやとした気持ちで紅茶を啜る。紅茶に関してだけは舌の肥えた井木には、午前だか午後だかの紅茶はあまり美味しくなかった。

「おい、早くしろよ！」

「ま、待ってよお、浮き輪が膨らまないんだよ」

井木の横を兄弟らしい小学生が通りすぎる。弟の方が持つ浮き輪には、レンタルなのかこのプール施設のロゴは印刷されていた。

「……………浮き輪、か」

飲み干した缶をゴミ箱に捨てると、井木は兄弟がやってきた方へと静かに歩いていく。恥ずかしいが、もう今日だけで散々恥をかけた。今更どうということもないだろう。

その後、両肩に浮き袋を装着した井木が目利科の前へ現れ思う存分笑われた後、元兄弟二人でこのプール施設最大最恐のウォータースライダーに挑戦し、滑る途中で井木の浮き袋が外れてしまい再び溺れたりしたのだが、まあ、それは別の話なのである。

そして、後日談。

「へえ、それでプール開きのときに浮き袋を付けてたんですね。さらつと僕だけハブって……」

「しょ、しょうがねえだろ！ ペアチケットだったんだから！ 文句なら風連池に言えよ！」

「ふーん、お兄さんに責任押しつけるんだ。普通に忘れてたくせに真秀、こんな無責任な眉毛はほつといて、今度お兄さんとプール行こうか。チケットはまだまだあるし」

「ほう……兄さんは私より知り合いを優先させるのですな？」

「もつ、萌那！？ いつの間にここに!?!」

「いいですけど、兄さんがその気なら私にも考えというものがあります。というわけで行きまず、真秀さん」

「えっ僕!?!」

「萌那がグレたー!?! ちょ、いくら相手が真秀でも不純異性交遊は認めないよ!?!」

「これが噂の三角関係ってやつかい？」

「いや、違うだろ………多分」

今日はなんだかやけに金髪の密度が高いへ夕校食堂だったとさ。

続く

## その16 限りなく透明に近いプール（後書き）

ようやく井木が主役になった、と思っただけで溺れてただけでござるの巻。

そんなわけで限りなく以下略です。

なんでこんなくそ寒い中プールの話なんか書いてんだらうね。

今回のテーマは、「井木に泳ぎを習得させようずwwwwww」です。泳げてねえじゃん！

元ネタはご本家のブログ記事から。正直イギリスは好きでも嫌いでもなかったんですが、アレは可愛いと思って書きたくなりました。

え？ 竹林はあんな溺れかたじゃなかった？ ははは気のせいだよははは…………… すいません。

溺れかたのモデルはわたくし事ですが私の母です。母はカナヅチでうっかり自分の身長より深いプールに入ると瞬く間に沈んでいきました。海で溺れたときは底を這って浜辺まで辿り着いたそうです。

結局目利科は人工呼吸したのか？ それは永遠の謎にしておいてください。

風連池は何故チケットを持っていたのか？ バイト先で貰ったとかそんな感じで補完してください。

…………… もう書くこと無いな。次回の話まだ決めてないし。そんなわけでここから先は嘘予告です。

「なあ、兄さん。“土井津神羅”って……………誰だ？」

ある日土井津流人に届いた手紙。“土井津神羅”の名義で書かれたそれには、『そこをどけ。そこは俺の立ち位置だ』という文面が。

その手紙をきつかけに、土井津の周りで次々に怪奇現象が起きる。失踪した笛理。少しずつ無くなっていく土井津の所持品。謎のドッペルゲンガー。そして、覚えの無い幼少時の記憶。

「いいか、ルツツ。この家にはそんな奴はいねえ。存在しねえんだ。いいか？」土井津神羅はいなかった”んだ”

沈黙する兄。それでもなお探し続ける土井津の前に現れたモノとは

！？

「おかえり。ずっと待ってたんだよ？ 神羅」  
次回、知られざる土井津家の秘密が暴かれる。

……いや、嘘なんですけどね。

予定ではおっさん教師の若返りか、謎の転校生（笑）か、ついに登場！ 北欧ファイブ！ のどれかにするつもりです。

それでは、ご読了ありがとうございました。またお会いできたら幸いです。

その17 北の故郷から／韓国製のCDは見つからない（前書き）

今回は短編二本立てという構成らしいですね。

b y 押鳥

僕たちの出番はいつ来ますか？

b y 江州登

## その17 北の故郷から / 韓国製のCDは見つからない

その17 1 北の故郷から

六月である。

梅雨の湿気と夏の暑さが同居するこの時期は外出する気を著しく削り、人々をファミレスやコンビニ等の極楽浄土へと誘い込む。

そんなわけでへた校に程近いとあるファミレスは、授業を終えたへた校生たちの溜まり場となっていた。

そして、その中のボックス席の一つに、でかかったり威圧感出したり小さかったりする五人組がドリンクバーでたらだら駄弁っていた。

「……にしてもあちいべな。な、諾？」

「あんこうざい。暑苦しい」

「あ、僕ドリンクバー行きますけど、何か入れてほしいものありませんか？」

「コーヒーさくれ」

「ジンジャーエール頂戴」

えー、一ター一人一人を描写するのも面倒なので、一気に紹介するのである。

まず、最初にうざがられていたのが、この集団のリーダー的存在の出幕<sup>でまくちようじ</sup>丁滋である。垂れ目と大きな口、逆立てた髪の毛が特徴的な茨城弁の高三である。

そんな出幕をうざがっていたのが乗江<sup>のゑつぐのり</sup>諾威、死んだような目をし、十字型のヘアピンをつけたこれまた高三の不思議さんである。

ドリンクバーへ向かったやや丸く小さいのは州臣<sup>すおみともゆき</sup>智之。この集団の癒し担当である。こう見えてバイトでサンタクロースをしたり、飼い犬に危うく“血まみれ花たまご”とか“特攻バクダン野郎”とか名づけたりしそうになったりする、変なところでアクティブな高

二である。

コーヒートを注文した威圧感を醸し出す眼鏡はご存じ須部鐘馬<sup>すへかねま</sup>。州臣とはクラスメイトでありそれなりに深い仲で、知人に彼を“嫁”とか紹介しちゃうお茶目さんである。件の飼犬が“花たまご”というそれなりに可愛い名前になったのは彼の功績だったりする。

そして、最後にジンジャーエールを頼んだのが、この集団の未っ子的存在の小折謂寿<sup>こおりつくかず</sup>である。口癖が「意味わかんない」「何期待してんの？」なシャイボーイだ。いつもは人語を解するやかましい鳥を連れているが、店員さんに怒られてしまうので今はいない。名字は違うが、乗江とは実の兄弟である。

え？ 小折の名前が初登場から変わってる気がする？ 気のせいである。気にする必要はないのである。

さて、全員の紹介が終わったところで州臣が戻ってきた。手にはコーヒールとジンジャーエール。自分の飲み物を持つには手が足りなかつたらしい。

「いやあ、なんか混んできましたねえ。やっぱり、暑いのは僕達だけじゃないんですね」

テーブルに飲み物を置きながら州臣が言う。周りの席にも制服姿が増えてきていた。ヘタ校の他にも、タリア女学院、W学園など、近隣の他校の制服がちらほら見える。

「ここ最近猛暑猛暑ってテレビでうるさく言ってるかなあ。みんなバテてんだべ。かーっ、うめえ！ もういつぺえ！」

出幕がレモネードを酒のように煽る。たちまち空になったグラスを州臣がドリンクバーへと持っていく。

「あんこやがまし。お前のせいで室温が上がるべ」  
そんな出幕に辛辣な口をきく乗江。が、言われた当の本人はあまり気にしておらず、「そーけ！」とよくわからない返事をする。

「……日さ暮れて、もう少し涼しくなったら帰んべ」

そんな二人のやりとりをクールに眺めながら、須部が結論を出す。「そうだね。パフィンには悪いけど、もう少し留守番してもらおう

うかな」

持ち込んだリコリスをぱりぱりかじりながらいう小折。時折通りすぎる店員が、(メニューのもん頼んで食えや)という目で見ているが、「何、期待してんの？」で一蹴する。

「よし！ じゃそれまでなんかゲームすんべ！ 一番負けた奴がおごりな！」

「あ、僕トランプ持ってますよ。何します？」

「男は黙って大富豪だべ」

「意味わかんない。普通ポーカーでしょ」

「……ババ抜きだな」

たちまちトランプゲームの喧々囂々な議論が始まる。さらに、「じゃあ、ここは間をとって七並べでえがっぺ！」という出幕の空気を読まない一言に、乗江が折檻を始める。

こうして、とあるヘタ校生たちの放課後は過ぎていくのだった。

その17 2 韓国製のCDは見つからない

「ない、ない、ない、ないんだぜ〜っ!？」

ある日の地那家のことである。

地那先生宅に故あって居候……もとい下宿をしている高校一年生、古里矢勇珠いんまみが、家中をひっくり返すような大騒ぎで何かを探していた。

「朝からうるせーある……なんあるか、一体」

ちょうど古里矢が通りすぎた戸から、髪を後ろで括った年齢と性別がいまいちつかめない人物が出てくる。言わずと知れた、地那耀ちなよう先生である。

「兄……先生！ 聞くんだけ、俺のCDが見つからないんだぜ!？」

古里矢は地那先生に気づくと、猛スピードで走っていた足に急ブレーキをかけて振り返った。

「……CD？ 音楽の録音されたあれあるか？」

あまり最近の音楽に詳しくない地那先生が首を傾げる。この人が古里矢と年代のとき、レコードも出回っていなかったような時代である。MDとかiPodとかは完全に未知の領域であろう。

「そうなんだぜ！ こないだ買ったばかりのKARAのCDがないんだぜ！」

古里矢が暑苦しい喋り方で頷いた。

「カラ……？ あの韓国人の女性ユニットのあるか。大方、梅花まいかが香かおるが持つていったんじゃねえあるか？」

地那梅花ちなまいか。港香みなかおる。共に古里矢の下宿仲間である。梅花は地那先生の姪、港も似たような感じである。ちなみに古里矢は、ただの遠縁である。

「俺もそう思って訊いたけど、二人とも知らないって……」

残念そうに頂垂れる古里矢。どうやら彼にとつて、そのCDは余程大切なものだったらしい。

「しょうがねえあるな。それで、そのCDはどんなジャケットあるか？」

呆れたように頭を振り、地那先生は古里矢にCDの特徴を訊ねる。

「？ ……もしかして、探してくれるんだぜ？」

「お前の探し物で家中ほじかえされるのはたまんねーある。今日だけあるよ？」

「兄貴………！！」

「……だから兄貴って呼ぶなよろし。歳の差いくつあると思ってるあるか」

「さすが兄貴！ 俺に出来ない事を平然とやってのけるッ！ そこにシビれる！ 憧れるウ！」

「だから兄貴じゃねーある！」

その後も、こんな感じのやりとりが延々と繰り返され。

翌日。

「それで、肝心のCDは見つかったネー？」

「……CDのことはすっかり忘れて、ずっと兄貴と遊んでたんだぜ……」  
「本末転倒的な？ やべえマジありえねえ」  
古里矢のCDは、未だ見つかっていない。

ちなみに、余談。

「いやー、このピカピカしたfrisbee、良い鳥避けになるあるな」  
「……兄貴。それ多分俺のCDなんだぜ……」  
「こ、これがあるか！？ てつきりfrisbeeだと思ってたある！」  
「それはないんだぜ……」 「ありえねえ的な」 「先生……それはフ  
オロー出来ないヨ……」  
「頼むからそんな目で見ないで欲しいある……」

続く

その17 北の故郷から／韓国製のCDは見つからない（後書き）

はい、なんだかんだでへタ日も17話になりました。  
今回は色々あって二本立てです。薄っぺらいのと薄っぺらいのを  
合わせると、ギリギリ薄くなくなるといい例です。

仙人のアレは別に悪意があつたわけじゃないです。ただ、リアル  
お爺さん略してリア爺ならあんな感じかなあと。だから石とかシナ  
ティとかフリスビーとか投げないでください。

じゃあ北欧の名前。今までの名前に比べたらかなりまとまな部類。  
ただ、小折の下の名前だけ浮いてたのでこっさり変更。つぐつぐ兄  
弟です。兄が『つぐ』、弟が『かず』って呼ばれてるくさい。

香と梅の名前。どっちもまんますぎる。ちなみに梅は普通『まい』  
とは読みません。『ばい』だと可哀想なので。

……なんかもう書くことが尽きてきた。じゃあ、そろそろ嘘予告  
でもするか。

~~~~~ここから妄想~~~~~

「 私が貴方を守ります。だから、貴方はもう泣かないでくださ
い」

三年前。後に百鬼夜行の時代と呼ばれる、少年たちの凄絶な闘争
の年。

既に血にまみれていた少年がその日出逢ったのは、まだ穢れを知
らぬ無垢な少女。

二人の出逢いは互いの歯車をずらし、狂わせていく

「堕ちたもんだな。てめえが女に頼るなんてよ」

「本当にそれでいいと思ってるのか？ お前も、彼女も」

「じゃあ、俺がそう願ったら、君は死んでくれるのかい？」

「貴方が本当にそう思っつのなら、それも悪くありません」

戦いに次ぐ戦いの果てに、二人にはどんな結末が訪れるのか

「俺が君を守っていたら、もっとマシなエンドマークがついたのかな？」

~~~~~ここまで妄想~~~~~

こんな話書けたらいいんですけどねー。シリアス書けないからいつも妄想止まりです。

じゃあ本当の次回予告。

謎の転校生来襲か、おっさん教師が若返るかのどっちかになると  
思います。

それでは、また次回もお会いできたら幸いです。

ご読了ありがとうございました。

その18 転校生が来る(前書き)

久々に学園モノらしい話になりましたね。  
by 本田先生

## その18 転校生が来る

さて、もう七月も間近な、六月の終わり頃のことである。

「秀太君、早くしないと遅れちゃうよ!？」

「わ、わかつてるですよ!」

弁当の一件で、何故か仲が親密になってしまった井木秀太いぎひいたと奥州戸和衣すとかずえは、なんやかんやで朝一緒に登校する程度には仲良くなっていた。

「もう、もつと早く起きればいいのに」

「だ、だって昨日の夜遅く匿名ライダー虎騎のアメリカ版の再放送があつて……」

「素直に『夜更かししたら寝坊した』って言えばいいじゃん」

と、若いお二人さんが実に“青春”って感じのやりとりをしながら走っている。

「やあ! 君たち、へ夕校つてどこにあるか知ってる?」

二人に、へ夕校の制服を着た少年が声をかけた。

「きゃあああああああああああああ!」

「な……なにこれ!？」

いや、ただ声をかけたわけではない。それだけだったら二人もここまで驚かなかつただろう。

その少年は 木から逆さまに吊られ、頭から赤い液体が垂れていた。

「あのー、そんなにびっくりしなくてもいいんじゃない?」

「驚くに決まつてるでしょ! なんなのそれ!」

謎の宙吊り少年に和衣が的確なツツコミを返す。

「ああ、これネ。大丈夫だよ、予行練習してたら失敗しただけだから。赤いのはケチャップだしネ!」

なんだか微妙な口調の少年はケチャップと称する液体を拭くと、降りるつもりなのか木から身体を抜こうとし、失敗して落下した。

「ウギヤー！」

おもいつきり頭を打ってしまったらしく、しゃがんで頭を抱えて  
「痛い……最高に痛い……」と凹んでいる。

「……えっと。君なにしてんの？」

それを見た和衣は、危険な人物ではないと判断したのか話しかけた。さりげなく年上にタメ口を使っているが、この世界にはよくあることである。

「うう……痛い……ああ、今日僕へ夕校に転入するんだけどネ。最初のインパクトって大事じゃない？ それでいろいろ練習したら、いつの間にかあんなことになってたんだ」

「な、なにそれ……」

何を練習したら木に引つ掛かるようなことになるのだろうか。

「うわああああ！ お化けあっちいけですよー！ ばかばかあっちいけー！」

と、まだまだ混乱から立ち直っていない秀太が少年をばかばか殴り始める。

「うわ、ちょ、痛い痛い！ やめて、本気で痛い！」

効果音のわりに結構な威力があるらしい秀太の拳から少年はみっともなく逃げ出した。

「あつ！ ところでへ夕校ってあっちであつてる？」

「え、うん、確かそっちの方にあるけど……」

「ありがとう！ あと五、六年ぐらいしたら一緒にお茶でもしようネ！」

それだけ言い残すと、少年はへ夕校の方向へ走り去ってしまった。  
「……なんなんだろ、あの人」

和衣は未だ泣きわめく秀太と少年が走り去った方向を見比べ、呟く。

「……って、このままじゃ遅刻しちゃうじゃん！ 行くよ秀太君！」

「うわーんお化け怖いですよー」

慌てて走る和衣と手を引かれる秀太。残念ながら二人の出番はこ

れでおしまいなので、この二人がはたして遅刻せず登校できたかどうかは神のみぞ知る世界である。

ところ変わって、ここはへ夕校二年A組である。

いろいろ問題児が多いへ夕校の中でも屈指のダメ率を誇るこの教室だが、今朝のようにまだ担任が来ていないときではさらに高い力オス値が観測される。

具体例を挙げると。

「な、なんだこの臭いは!? 井木! 学校にバイオ兵器を持ってくるなどあれほど言っただろう!」

「俺は何も持ってねえよ!」

「おひゃあああなんでスーさんの鞆にシユールストレミングがあああああ!」

「誰か爆発物処理班とか連れてきたほうがいいんじゃない?」

「うわあああ目があああ目があああ」

「救急車か衛生兵を呼べー!」

……まあ、そんな感じの騒ぎもいつものことなので、担任の本田先生が来る頃には収まっている。

「皆さん、おはようございます。……なんだか今日は、変な臭いがありますね?」

いぶかしげな顔をする本田先生に、生徒たちは一様にひきつった笑いをする。換気は充分にしたはずだが、それでもうつつすらと発酵臭がする。

「さて、今日は皆さんに嬉しいお知らせがあります。……なんとこの中途半端な時期に、うちのクラスに転校生が来ました!」

何故かガッツポーズでシャウトする本田先生。それにつられて、クラスのテンションも一気に上がる。まあ、学園モノに『変な時期に来る転校生』はお約束である。

「男ですか、女ですか!」「どこ高から来たんですか!」「イ

ケメンですか!? アイドルですか!?」「超能力者ですよね!?」  
「やっぱりガチホモなんですか!?」

教室中から質問が殺到する。後半のほうはなんかもうアレな質問ばかりだったが。

「み、皆さん落ち着いてください……! そういうことは本人に訊いてください。もうそこにいるんですから……」

本田先生はそう言うと、扉に向かって「瀬保君、入ってください」と声をかけた。

「……」  
しかし、反応がない。不審に思った本田先生が扉を開けるが。

「……いない?」  
そこに転校生の姿はなかった。

「おかしいですね、さっきまでそこにいたはずなのに……」

本田先生は首を傾げながら廊下の端から端を眺めるが、どこにも転校生の姿はない。

「……? どこに行ったんでしょう?」

いかげん本田先生だけで話進めるのも限界だなあ早く出てきてくれないかなあ、というような感じの雰囲気になってきたとき。

それは上からやってきた。

「うぎゃああああああああああああああああああああ」

雑魚キヤラみたいいな叫びをあげ、窓の外に真っ逆さまに落下していく一つの影があった。

な、なんだあれ! 自殺か!? いや……落ちてないぞ、引っ掛かってる 突然の事態に生徒たちは窓際に殺到する。影は何かに引っ掛かったのか完全に墜落せず、ちょうど窓から逆さまの上半身が見える程度に止まっていた。

もし、この光景を外から見る物がいたら、こんな疑問を持ったことだろう。

なんで学校でバンジージャンプなんかしているんだろう と。

「や……やあ! 僕の名前は瀬保琉芽せほ りゅうがさ! 気軽にセボちゃんって

呼んでくれていいからね！」

この、めちやくちゃインパクトがある登場をした転校生が、今朝秀太と和衣に絡んでいた宙吊り少年だということは　今更書き加えることでもないだろう。

その後、朝のSHRは急遽中止され、二年A組の生徒は教室に瀨保を入れる係と屋上のフェンスに結ばれたゴムロープを外す係とに別れて、どうにかこうにか瀨保を救出した。

そして瀨保はどうなったのかというと

「全く、あんな危ないことなんてしたんですか！？　成功したからいいものを、もし失敗したら間違いないで死んでましたよ！」

「う……ごめんなさい……」

あんなサプライズを敢行して無罪放免で済むはずがなく、瀨保は職員室で本田先生に説教されることとなった。

もしゴムロープが切れたりしていたら即死、しかも第一印象のためにこんなアホなことをしたという不名誉すぎる死に様になっていたかもしれないので当然ではあるが。

「なあ……土井津」

大多数の生徒のように職員室に出歯亀にいかず、大人しく教室で待機していた井木が同じく優等生な土井津に声をかけた。

「どうした？」

「いや……あの転校生、なんか板利に似てなかったか？」

井木は、あれだけの騒ぎがあつたにも関わらず、未だに机に突っ伏して幸せそうに眠る後ろの板利を見て言った。

「そういえば……確かに似ているかもな」

土井津は瀨保の顔を思いだし、板利の顔と見比べる。そう思えば飛び出たアホ毛や髪の色、優男的雰囲気似ているかもしれない。

「何か関係があるのか、板利と……？」

こうして、瀨保のファーストインパクト（ファーストインプレッ

シヨン・インパクトの略)は、各方向にいろんなフラグ立てたり伏線張ったりして終わりを告げたのだった。

続く

## その18 転校生が来る（後書き）

なんか久々に教室が舞台になった十八話です。

ぶつちやけ伏線とかフラグは回収予定ありません。

とりあえずやる予定だったものを消化しました。転校生のあの人の人選に特に意味はないです。

瀬保って苗字探したらありそうですね。まあないんでしょうけど。意外と書くことないし、嘘予告のネタも思いつかないんで今回はこの辺で。

次回はいよいよおっさんは若返って青春する予定です。

その19 若返り 前(前書き)

実に……実に羨ましいです!!

by 本田先生

## その19 若返り 前

フランツ・カフカの代表作、『変身』という小説がある。  
グレゴール・ザムザという青年が、ある朝目覚めると、巨大な虫  
に変身していた、という物語である。

……何故、ただのくだくだコメディであるこの小説が、こんな一  
見シリアスそうな出だしなのか？

「……な、なんでい、こりゃあ……」  
今まさに、へタ校名物おっさん教師の取古佐竺とふるさじくがそんな状況だか  
らである。

ただし、取古先生の場合、虫になっていたわけではなく、若返っ  
ていたのだ。

それも、CMの胡散臭い化粧品でのアンチエイジングなんてもん  
ではない。髭生やした中年のおっさんが若さ溢れる十代にまで若返  
ったのだ。

「お、おお、おう……」

取古先生は鏡に映る自分の姿に戸惑い、顔やら身体やらを触って  
みる。中年の脂ぎったカサカサ肌からは程遠い、ハリのあるもつち  
もちの肌だ。

「痛え……こりゃあ、夢じゃあなさそうだ」

頬をつねるという超古典的手法で正気確かめる取古先生。ぶっ  
ちやけ夢で五感が擬似体験できるなら、頬をつねったぐらいでは夢  
かどうかなんてわかるわけないと思うのである。

「まさか……あれ、本当だったのか……？」

取古先生は何か心当たりがあるのか、昨夜のことを思い出した。

~~~~~回想~~~~~

取古先生がその日、なんやかんやあって学校を出たのは夜中だっ

た。

そして、なんやかんやあってちよっぴり泥酔していた。

そんな取古先生が千鳥足で帰途に着いていると。

「俺はブリタニアエンジェル、通りすがりの天使だ！ 覚えておけ！」

天使のコスプレをした不審者と出会った。

「お前……二年の井木じゃねえか。何やってんでい、こんなトコでそんなカツコで」

その不審者は、やたら目立つ太い眉毛といい、ツンツン跳ねた癖のある金髪といい、どう見ても井木だった。

「ち、ちちち違っ！ ブリタニアエンジェルだばかあっ！」

慌てて否定する自称ブリタニア以下略。だがその態度はやっぱりどう見ても井木である。

「こんな時間だぜ、寮へ帰んな。もう門限も過ぎてるんじゃないかいい？」

ちよっぴり泥酔はしていてもまがりなりには教師、取古先生はしっかりと注意した。

「だーから！ 俺は井木とかそんな名前じゃない！ ブリタニアエンジェルだ！」

意地でもその名前を使うつもりらしいブリなんとかさん（仮名）。

「今日はお前の願いを一つだけ叶えにきたんだ！ べ、別にお前のためなんかじゃなくて、たまたまくじ引きでお前の名前を引いただけなんだからな！」

ついにはツンデレ気味に電波なことを口走りだすブリなんとかさん。

「願いだあ？」

取古先生の仮面で隠れた赤ら顔が訝しげに歪む。見た目にはほとんどわからないが、現在の取古先生は判断力がかなり低下している。普段なら妄言だと笑って一蹴するようなことも、もしかしたら本当なんじゃね？ というテンションになっているのである。

「じゃあお前、俺の願いをなんでも叶えてくれるってえのか？」

「一つだけならな。ちなみに、回数を増やすとかお前が神になるとかはできないぞ」

「こういうシチュエーションになったらまず最初に思いつくことをしっかりと潰すブリなんとかさん。」

「じゃあ……俺を高校生ぐれえに若返らせる、ってえのは？」

「得意分野だ。だが、本当にそれでいいんだな？」

「あまりにもあっさり願いを決めた取古先生に、ブリなんとかさんは少し戸惑う。」

「ああ。……先公なんてやってえとな、時々、ガキどもが羨ましくなるんでい。俺もあんな風にまたはしゃいでみてえとか、考えちゃうもんなのさ」

いきなりしんみりしたムードに持っていく取古先生。一応書くがこの人は酔っている。

「……そうか、じゃあいくぞ。ほあたっ」

謎の掛け声とともに杖を振りかざすブリなんとかさん。ぼむっと煙が現れ、見る見るうちに取古先生を取り囲み、そして

「おい、何も変わってねえじゃねえか!？」

なんとということでしょう、そこには酒に酔った仮面の中年男性の姿が！

「あー、きつとアルコールのせいで魔法が効ききってないんだな。多分酒が抜け次第効果が出るはずだから」

「なんか一気に適当な対応になったブリなんとかさん。」

「あ、それとな。魔法の効果は一週間ぐらいで切れるから」

「一番大事なことじゃねえのか、それ」

「またいつか会おうぜ！ ハバナイスデイ！」

無然として突っ込む取古先生を華麗にシカトし、ブリなんとかさんは爽やかに帰っていく。

「あ、おい、待て！」

慌てて呼び止めるも、既にブリなんとかさんの姿は闇に消えてい

た。

「……………」

一人残された取古先生は、ただただ立ち尽くしていた。

~~~~~回想終了~~~~~

とまあ、そんな感じのことがあったのである。

「……しかし、どうするかねえ、今日は……」

ひとしきり自分の姿を確認したあと、取古先生はベッドに倒れこんだ。

もちろん今日は平日である。しかし、この姿で登校しても誰が取古先生だと気づくだろうか。精々生徒のいたずらか何かと勘違いされるだろう。

「ま……行くだけ行ってみるか……」

取古先生はのっそりとベッドから身を起こすと、いつものスーツに着替えはじめた。

「……そういうわけで、信じらんねえかもしれねえが俺は取古なん  
でい」

職員室に着いた取古先生は、真っ先に同僚である本田先生に相談していた。ちなみに仮面は説明のため一旦外している。

「そんなことが……実に羨ましい限りです」

ヤングバージョンな取古先生より遥かに若く見える本田先生は、茶を啜りながら取古先生を羨望の眼差しで見つめた。

「……なんか、あっさり信じてくれんだな」

「二次元にはよくあることですから」

魂が入れ替わったり性転換したり時間ループされるよりはよっぽど実害がありませんよ、と本田先生。

「せつかくですし、貴方の願い通り生徒に交じって高校生活を楽し

んでみては？」

「そうしてえのは山々なんだが……流石に一週間も担任が欠席するのはマズくねえか？」

ちなみに取古先生は数学教師で、三年E組の担任でもある。

「自習や副担任でどうとでもなりますよ。一週間程度なら授業は支障が出ないでしょうし」

「そうかねえ……」

まあぶっちゃけ、他の先生方に多大な迷惑をかけるだろうが、それはそれである。ヤングなままむりやり授業をするよりはマシである。

「私の方から適当に言っておきますから、楽しんできてください」「じゃあ、そうさせてもらうぜ」

こうして、取古先生の期間限定バカンスは始まったのである。

「なあ、いくらなんでも先生遅うない？」

「どうしたんだべ……」

ここは3Eの教室である。普段ならとっくに来ているはずの担任の姿がなく、教室はざわめいていた。

そんなとき、前の扉から取古先生の代わりに本田先生が入ってきた。

「取古先生は体調不良のため、一週間ほどお休みすることになりました」

唐突な発表に、生徒のざわめきが大きくなる。

「先生、どういうことですか？」

代表して帆ヶ梨絵里紗はんがり えりさが訊く。他の席からも「ソーだソーだ」「今北産業」などと野次が飛ぶ。

「取古先生によると、酔っ払って路上で寝てしまい風邪をひいたそうです。命に別状はありません」

どっと笑いが巻き起こる。取古先生の酒癖の悪さは知れ渡ってい

るので信じたようだった。

「それはさておき、今日は皆さんに嬉しいお知らせがあります」

本田先生は（そういえば軽くネタ被ってますね……）とか考えながら廊下から生徒を連れてくる。

「今日から一週間、このクラスで過ごすことになった滝誠一君<sup>たきせいいち</sup>です」  
そうして教室に入ってきたのは 言うまでもなく仮面を外し学ランを着た取古先生（若）である。

「滝君は家庭の事情で一週間だけですがこのクラスに編入することになりました。皆さん仲良くしてあげてください……ど、どうしたんですか、桐支屋君！？」

本田先生の紹介の途中で突然桐支屋伯<sup>はく</sup>が何かを喉に詰まらせたように咳き込んだ。その顔は驚愕の色で染まっていた。

「ん……なんでも、ない……」

桐支屋はゆっくりと首を振るが、その目は未だ取古先生 いや、今は滝と呼ぶべきか を睨んでいる。

「な、なんだよ……？」

まさか早速正体がバレたか？ と滝は内心焦る。

「先生、そろそろ授業が始まるのでは？」

教室内が緊迫した雰囲気包まれかけたそのとき、教室後方から声が上がった。

その声の主は

「江尻<sup>えじり</sup>、貴方喋れたんですか！？」

押鳥<sup>おすとり</sup>楼出<sup>ろうしゅつ</sup>が彼の前方の席に座る江尻空太<sup>くうた</sup>をびっくりした顔で見つめた。

「喋れないわけないだろう」

きよとんとした顔で見つめ返す江尻。この浅黒い肌と被っている白い頭巾みたいなものが特徴的な少年は、それまで滅多に喋らず「これで饒舌設定ってどういうことなの……」とか「口調は捏造でおk？」とか散々言われるようなキャラであった。

「え、ええと。それでは私、授業がありますので」

これ幸いとばかりに本田先生はすっかりぐだぐだな空気の收拾を放棄して帰っていつてしまった。

「……そういやあ、俺、どこに座ればいいんでい？」

滝が、席について何も教えてもらっていないことに気づいて愕然とした。

その後、滝は学園モノにありがちな『何故か不自然に空いていて誰も片付けない空席』に座って授業を受け、合間合間の休み時間に質問攻めされながらもどうにか上手いこと捌ききり、昼休み。

「ん……来い……」

滝は、桐支屋に校舎裏へ呼び出されていた。

「な、なんでい。カツアゲか？」

不敵な笑みでまぜっかえす滝だが、内心は焦りまくりのどつきどきであった。

「……………」

桐支屋は周りに全く人気がなくなると、いきなり滝の胸ぐらを掴んだ。

「おっ、おい何しやがる!？」

「……お前、取古だろ」

やっぱりバレていた。

「な、なんの話でい？」

とりあえずすつとぼけてみる滝。

「とぼけるな。母さんのアルバムの中にお前と同じ顔の取古の写真があった」

取古先生と桐支屋の母は高校の同級生であった。それでもってその頃現役の教師だった校長板利朗真いたりろうまとただれた三角関係を築いていたりしたのだが、それはまた別の話である。

「他人の空似つて奴だろ？ 世界にや同じ顔の人間が三人いるつてえ話だぜ」

「ん……ただのそっくりさんが同じ江戸っ子口調で喋るわけがない……」  
それはごもつともである。

「くそっ……てめえにだけは絶対にバレたくなかったんだが……」  
観念した滝はこれまでのいきさつを話すことにした。

「……ってえわけだ」

「意味わからん」

桐支屋は取古先生の葛藤やらなんやらを六文字でバツサリ斬った。

「んだとお！？ てめえは若えからわかんねえんだよ！」

「顔近づけるなひげづら……」

若者に中年の気持ちが変わらないのは世の道理である。

「……別にお前がどうしようもどうでもいい。俺に近寄らなければそれでいい」

「こつちだってお断りでい」

「あと、本田先生にも近づくな」

「それは関係なくねえか？」

滝と桐支屋はそんな感じに、この一週間互いに顔を合わせないという協定を結んだ。

「だが、そういう取り決めは上手くいかないのがお約束というものだ」

「江尻、貴方誰に向かって喋ってるんですか？」

続く

## その19 若返り 前（後書き）

そんなわけで十九話、どきっおっさんだらけの高校生活〜ぼろりもあるよ〜前編でした。

もう前後編にはしないつもりだったんだけどなあ。

とりあえずおっさん出したかったんです。主役で出したかったんです。その答えがこれでした。

若おっさんの名前ですが、サディクには正直や誠実といった意味があるそうです。それであんな名前になりました。本当はサディクをもじりたかったんですが、佐竺以外が思いつきませんでした。

苗字は英語の Turkey をもじりました。トウルキエで鶴木江も考えましたがさすがに無理がありました。

あとは新キャラ江尻くん。リクエストもらったんですが口調をどうするか悩んだ末に捏造しました。駄目だったら本当にすいません。

今回は後編の予定。何かが間違っただらすいません。

今回もご読了ありがとうございました。

その20 若返り 後(前書き)

実は前回と今回で三年E組の生徒(現在確定している人のみ)は全員出演してらんですよ。

b y 本田先生

だからなんあるか？

b y 地那先生



入っていたのだったか。

「まあ、適当に見学してみるわ。ありがとな、栖辺院」

「おおきにー。あ、俺は“シエスタ研究部”にいるからよかったら見学に来てやー」

さりげなく自部の宣伝をして去る栖辺院。流石関西人である。

「部活……か」

「一通り見てみたけど、なんかなあ……。やっぱり、ガキの遊びって感じしかしねえやな」

変な所でおっさんモードになる滝であった。

「もうこんな時間か……そろそろ帰っか」

滝が下駄箱へと歩きだした矢先。

ぶにゅ。

滝の足が何か弾力のあるものを踏みつけた。

「な……なんでい、こりゃあ」

白く、楕円形のシルエツト。触れたぶんだけ跳ね返す弾力。その物体を滝は一瞬、場違いにもほどがあるが 餅、だと思った。

しかし、生暖かい体温と、抗議するように身体をくねらせる様は、それが間違いなく何らかの生物だと告げていた。

「Ouch! Why are you trampled me!?!」

その生物は 喋った。

「But, if you given me cabbage, I forgive you! Come on, please me cabbage!」

「……な、なんだあ!?!」

英語らしき言語を話す謎の生物が跳ね回るのを見て、滝はようやく我に返る。

「Please! Please! Pleeeeeeeeee

「a s e ! !」

「わわっ！ やめろ、体当たりしてくんじゃねえ！」

顔文字みたいな顔をした謎の生物は滝にキャベツを要求してくる。しかし、これから帰宅しようとしている学生の鞆にキャベツが入っているはずもない。

「こ、こら！ 他人に迷惑かけちゃ駄目じゃないか！」

そんなとき、眼鏡をかけた男子生徒が滝と謎の生物に割って入る。「すみません、うちの子が迷惑を……怪我、ありませんか？」

「あ、ああ……。それにしても、なんなんだ？ それは」

言ってから、その生徒に見覚えがあることに気づく。一年生の、江州登恵努えすこだった。

「この子ですか？ そうですね、強いて言えば もち、ですかね」「もち？」

「はい。実は、僕もこの子たちがどういう生き物なのかよくわかりません。身体が餅みたいだから、便宜的に『もち』と呼んでるだけで」

さっきの滝と同じ思考であった。

「It's OK! I'm American!」

と、突然もちが体から星条旗を出しアメリカ人宣言をする。

「はいはい。じゃあ、僕はこれで」

江州登はもちを抱いてどこかへ去っていく。どうやら、そのまま帰るわけではないようだ。た。

「……………帰るか」

今日はキャベツを買って帰ろう。なんとなく、滝はそう思った。

変化にも慣れた三日目の放課後のことである。

「ゲーセン行く奴この指止まれ！」

教室の真ん中で突然シャウトし人差し指を突き上げたのは、へ  
夕校一残念な兄として知られる土井津義流どいつであった。

「私は行きませんよ。どなたか別の方とお行きなさい」

押鳥楼出おすとりろうしゅでが不参加を表明する。

「お兄さんは行くのかな。栖辺院はどうする？」

「俺も行くでー」

悪友その一、風連池土主ふうれんちちしずと、悪友その二の栖辺院は参加。

その後、楼出さんが行かないなら行きません」「楽しそうだな！俺は行くっぺ！」「あんこがうざいから行かね……」「と行く派・行かない派に分かれていく。

「滝、お前はどつする？」

煙草でも吸ってそんなダウン系男子、低地蘭太ひくちらんたが訊ねた。

「俺？俺あ……」

行かねえ、と言いかけて、口を閉ざす。そういえば、今も昔もゲーセンには行ったことがない。今はそんな場所に興味はなく、昔はそもそも近所になかった。

「そりゃあ、行くさ」

「よし！来る奴は駅の東口に集合な！」

じゃあ解散！と、ちゃらんぼらん兄はここでだけ妙に弟っぽいノリでその場をしめた。

ゲーセンという場所は……とにかくまあ、凄かった。

あちこちから流れる大音量の音楽、たむろする若者、女子高生は何台も置かれたプリクラで遊び、音ゲーのブースでは既に何か音楽が出来るのではないかと思うほどの手練れたちが一心不乱にプレイする……。

「……すっげえなあ……」

ゲーセンはおろかデパートか何かのゲームコーナーにも寄ったことがない滝が目眩を起こすのも、そう不思議ではなかった。

「あれ、お前遊ばねーのか？」

「あ、ああ……ちつと、気分が悪くなつてなあ。少し休んでるわ」

「そつか。あんま無理すんなよー」

義流はシューティングゲームのブースに向かっていった。それを見、滝は「若えなあ」と呟く。

「あれだな、やっぱり心は若返れねえのか……」  
休憩用のベンチに横たわり、いつも以上におっさん臭くぼやいてみる。

「……おっさん臭い。近寄るな、ひげづら」

頭頂部の方向から声がする。滝はつむじにひやりと冷たいものを押しつけられた。

「自分から近づいといて、そりゃあねえだろ？ 桐支屋」

「うるさい。死ね」

今度は頬に押しつけられる。それは缶ジュースだった。

「なんでい、お前。俺がいるから来ねえんじやなかったのか？」

「ん……どこに行こうが、俺の勝手だ……」

「そっかい」

そして会話は途切れ、不思議な沈黙が二人の間に訪れる。

「……おい、取古」

「なんでい」

「……………死ね」

「なんだそりゃ」

「明日で最後か……」

六日目の夜。滝は自宅でたそがれていた。

その手にあるのはチャイ。本当は酒を飲みたかったが、うっかり飲みすぎて悪酔いするかもしれない。

「よう、調子はどうだ？」

そこに闖入してきたのは、例のブリなんとかさんである。

「な、なんでいお前、どうしてここに来た？」

滝は驚いて空になったコップを倒してしまう。

「特に理由はない！ なんとなくだ！」

ブリなんとかさんは男らしく言い放つ。

「じゃあ帰りよーう、嘘嘘嘘！ ちゃんと理由があつて来たんだよ！」

剣呑な目付きで立ち上がる滝に、ブリなんとかさんは慌てて撤回する。

「ほら、魔法は明日で解けるだろ？ 言い忘れてたが、魔法が完全に解ける前にもう一度同じ魔法をかけると、魔法の延長が出来るんだ。やってみるか？」

ブリなんとかさんの魅力的な提案に、しかし滝は全て訊き終わる前に首を振った。

「いや、いい」

「え？ なんでだ？」

不思議そうな顔をするブリなんとかさんに、ああ きっとこいつは若いんだろうな……、と滝は苦笑する。

「強いていうなら、これ以上ワガママになりたくねえから、だな」

「……まあ、お前がそれでいいんなら、いいか。じゃあな、残りの一日、楽しく過ごせよ！」

ブリなんとかさんは翼を大きくはためかせると、まるで出来の悪い特撮のようにパツと消えた。

「……あたぼうよ」

滝は自分に言い聞かせるように、小さく呟いた。

「……まさか、お前が泣くとは思ってなかった」

「うつつるせえ！ あれは汗でい！」

滝は桐支屋と共に帰り道を歩いていた。

「てめえ、知ってて黙ってたろ！？」

「ん……サプライズをわざわざ本人に言う義理はない……」

「く……くそっ」

滝の学生生活がいよいよ終わるといふその日、三年E組では授業が終わると突如滝の送別会が始まった。

その『たった一週間だったけど凄く楽しかったぜ！ ありがとうな！』といった青春的やりとりに、歳のせいで涙腺が緩くなってきた滝は泣いちゃったりしたのである。

「……いい生徒を持ったな、俺あ」

「何か言ったのか……？」

「いや……少なくとも、てめえにや関係ねえ」

「意味わからん」

そして、翌日。

「久し振りだなあてめえら！ 出席取るぜい！」

「先生、桐支屋君がまだ来てません」

「桐支屋が？ 俺あ何も訊いてねえが……」

と、そのとき。教室の黒板側の扉が開く。

「ん……遅刻した……」

入ってきたのは 限りなく桐支屋に似た、しかし小学二年生ほどの男の子である。

「ん……？ どうか、したのか？」

「どうかもへちまもねえ！ どうしたんだてめえは！」

三年E組の教室はいきなり大騒ぎになる。

その窓の外からは、鳥にしてはやけに大きな羽ばたきが聴こえてきた。

「……別にこれ以上続きませんよ、このお馬鹿さんが！」

続く。

## その20 若返り 後（後書き）

というわけでどきっおっさんだらけの学園生活〜ポロリは特別な  
かったよ〜後編をお送りしました。

うん、学園生活って難しいね！

途中意味もなく出てきたエドともち。

実は展開に悩んで「いつそもち出してエドとキャツキャウフフさせときゃいいんじゃない？」と血迷ってたときの名残です。流石に一週間ずつとキャツキャウフフさせるわけにはいきませんでした。もちが喋ってた英語は適当。英語力のないp主なりに頑張ってみましたが、多分絶対間違ってます。間違ってたなら指摘してください。

ちなみに話の適当な意識

「痛いっ！　なんで君は俺を踏んだんだい！？」

「だけど、もし君がキャベツをくれるって言うなら、俺は君を許してあげるよ！　さあ、俺にキャベツをおくれ！！」

「ちょうだい！　ちょうだい！　ちょうだーいーい！！」

「大丈夫さ！　俺はアメリカ人だからね！！」

後半から訳さなくても大丈夫な気がしたけど別にいいや。

次回はお兄さんが昼休みにラジオをする予定です。

今回もご読了ありがとうございました。

番外編 マリアさまは別にみてない(前書き)

土井津、今回は番外編だから俺たちは出ないんだって！

b y 板利

じゃあここも俺たちがやる必要ないんじゃないか？

b y 土井津

## 番外編 マリアさまは別にみてない

見るからにお坊ちゃんお嬢ちゃんな生徒たちが登校していることはヘタ校……ではなく。

その隣の市にある私立聖タリア女学院、通称タリ女である。授業や校則にキリスト教の教えを取り込んだいわゆるミッションスクールであり、教職員にはシスターなどの聖職者が多い。

……ちなみに、“女学院”とあるが数年前から共学制になっている。何故未だに“女”が取れないのかは、タリ女七不思議の一つに数えられている。

そんなわけで、今回はヘタ校ではなくタリ女生の学園生活に迫るのである。

「乙女ー、おっはようー！」

タリ女生である独活林乙女は登校中、突如背後からタックルをかまされた。

「ん、幸姫か……いきなり何をする、危ないだろう」

しかし、女子高生にしてはやや大柄な体格の乙女は意に介さず、タックルをかました張本人を見る。

「えへへ、ごめん。乙女に会えて嬉しくって」

「お前の家では友人知人に体当たりをするのが普通なのか？」

乙女は軽いため息をついた。

タックルをかましたのは伊集院幸姫。ブラウンの髪をポニーテールにし、乙女と同じタリ女の制服を着こなしている。

「むむ、今日も実にけしからんおっばいですな。食らえー！ 伊集院家秘伝胸部マッサージ術ー！」

「やめろ、揉むな。これ以上大きくなったらどうする」

「大きくなればいいんだよ！ おっばいは世界を救うのさ！」

「具体的にその方法を提示してから寝言を言え」  
と、女子校モノにありがちな百合的やりとりを繰り返す二人。  
二人はプリキ ア……ではなく親友なのである。  
「おいそこの二人。校門の前で不純同性交遊はやめなさい」  
と、いちゃついている間に二人はいつのまにか校門のところまで来ていた。金髪をツインテールにした眼鏡の風紀委員から注意を受ける。

「へん、あなたの言う通りになんかしないよー、だ！」  
「なんだとー!? いつもいつもお前は！」

幸姫は風紀委員こと英賀保有栖あがほにアカンベありすをした。陳腐な挑発だが、元々幸姫と仲が悪い有栖はあっさり乗ってしまう。

毎度毎度この二人が顔をあわせる度に繰り返される掛け合いに、乙女は本日二回目のため息をついて言った。

「幸姫、喧嘩なら他人の迷惑にならないところでやってくれ。私は先に行くぞ」

「あ、待ってよ乙女〜！」

「おい、まだ話は終わってない、てかまだしてもないぞ!？」

まだ頭から湯気を出している有栖を放置し、乙女と幸姫は校舎へ向かう。

「この、覚えてるよ!？」

有栖の声だけが空しく響いた。

「それでは出席を取ります。英賀保さん……」

乙女と幸姫のクラス、二年一組の今日の一時限目は国語である。担当教師にしてクラス担任の日向さくら先生が出席を取っていた。ちなみにさくら先生の台詞からわかるように、有栖もこのクラスである。しかも席順で幸姫の前の席だったりする。

「露草さん……露草さん? おや、露草さんは欠席ですか?」

さくら先生がいぶかしむ。露草恵実めくみはプラチナブロンドに仄かに



「でな、昨日の乙女はすっげえ可愛かったんだぜ!？」

「へー、そうなん?」

「綺羅はいつもそればかりね……」

場所は代わって、今度は三年五組の教室である。

一時限目と二時限目の間、十分の休憩時間。普通に授業の準備をする者、ゲーム機や携帯を弄る者、真面目に勉強に取り組む者と、様々な生徒が見受けられる。

その中で乙女の姉である独活林綺羅とその友人たちは仲良く談笑していた。

「あ、うち宿題忘れたわ。誰かノート写させてくれへん?」

友人その一、西条アンが自分のノートを開いて言った。

「え、宿題なんてあったか? やべ、私もやってねえよ」

銀髪赤目というどう見ても（ryな綺羅が冷や汗を垂らす。

「授業真面目に聞いてないからでしょ。まあ、お姉さんもやってないんだけどね!」

「「やってないんかい!」」

総ツッコミを受ける友人その二、仏ノ座ぼつげのフランソワーズ。

「つーわけで腐れおじよーさまさんー、私たちにノート見せてくんな?」

綺羅は後ろの席にもたれ掛かり、顔だけ振り向いて言った。

「誰が“腐れおじよーさま”ですか、このお馬鹿さんが! あと“

さままさん”ってなんです、敬語が重複していますよ!」

“腐れおじよーさま”と呼ばれた、実際かなり育ちが良さそうな少女 塙宮政子はまみや まつこがぷりぷり怒りながら答える。

「政子さん、こんなやつにノートを見せてやる必要はないですよ。

いつもこうなんですから」

と、そのさらに後ろから声が。

「お前には関係ねえだろ、洪」

綺羅にそう言われ、政子の後ろの席の長い髪を結んだ男子生徒、  
洪誓太郎がむっとした表情になる。

「関係ないわけないだろ。お前のせいで政子さんに迷惑がかかってるんだ」

「尚更お前には関係ねえじゃねえか」

実は誓太郎は政子のが好きなのである。それはもうベタ惚れなのである。政子のほうもそんな誓太郎にまんざらでもないので、相思相愛といっても過言ではないのである。

そのため、誓太郎はことあるごとに政子にちょっかいを出す綺羅のことが嫌いなのである。きらがきらい、偶然ダジャレになってしまったのである。

「関係なくない！」

「関係なくなくない！」

と、ついには掴み合いの喧嘩になる綺羅と誓太郎。

「あの二人はほっといて、とりあえずうちらだけでも見せてくれへん？」

「すぐ写してすぐ返すから、ね？」

「しょうがないですねえ……」

この後、結局ノートを写し損ねた綺羅が授業で当てられ、当然あ  
たふたしまくることになるのだが、それはまた別の話である。

「……ちなみに、中国四大奇書は三国演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅あるよ。覚えておくよろし」

「先生、今は日本史の授業ですよね？」

「金瓶梅はちよつとえっちなお話ある、読みたかったら大人になるまで待つあるよ」

「無視しないでください……」

一年二組の二時間目は歴史である。

しかし、教師である中里耀先生が肝心の日本史そっこのけで古代

中国史をやってしまったので、ほとんど自習のような時間になった。

なので、

「お姉様のパジャマ……渡せるといいなあ……」

授業中にパジャマを縫う者、

「姉さん姉さん姉さんと結婚結婚結婚姉さん結婚結婚」

姉を捕まえられず何らかの禁断症状に陥る者、

「ゲームの起源は私の国なんだぜー！」

携帯ゲームで遊ぶ者、と教室内は実にフリーダムな様相を呈していた。

その中でも特に目立っていたのは。

「ぱくぱくもぐもぐくごくじゅーじゅー……」

机いっぱいにハピーセトを広げてひたすらそれらを咀嚼する、

米原<sup>まいばら</sup>エミリイであった。

大胆にも程がある早弁だったが、わりといつもの光景なので誰も気にしない。

ただ一人を除いては。

「（え、エミリイ……止めようよ……）」

ともすれば聞き逃してしまいそうな、か細い声。その声はエミリイの隣から聞こえてきた。

「……ごっくん。あれ？　なんでここにいるの？　マーシイ」

「（なんでじゃないよ！　注意しにきたの！　私が風紀委員だって忘れたの！？）」

マーシイと呼ばれた眼鏡でお下げな女子生徒は屈みながら地団駄を踏むという離れ業をやったのけた。

エミリイとマーシイ　加寿<sup>かす</sup>マーシイは、その似通った容姿から

わかる通り双子の姉妹である。苗字が違うのは家庭の事情である。

「（もう、授業中なのにこんなにハンバーガー食べて！　せめて休み時間まで待てないの！？）」

「食べたいときに食べるのが一番の幸せなんだぞ！」

「だから太るんじゃない！ 身体測定の前日にダイエットするなら食べなきゃいいのに！」

「う、うるさいんだぞ！」

「……西遊記で有名な三蔵法師は、実際は一人で天竺まで行ったあ。孫悟空も沙悟浄も猪八戒も実在しねえあるよー」

授業中に姉妹喧嘩を始めても誰も気にしない。それが一年二組クオリティであった。

「ねえ幸姫、いつまで起きてんの？ もう電気消すよ？」

「あ、もうちょっと待ってー。もう少しで終わるから」

「……何あんた、手紙なんて書いてるんだ」

「うん。こないだナンパされて、『お友達から！』って言ったら、文通することになった」

「今どき文通？ 今はメル友の時代でしょうに」

「いいんじゃない？ これはこれで楽しいよ」

「ふうん。で、今日はなんのこと書いてるの？」

「えーと……学校とか、クラスのこと。どんな部活やってるとか、クラスメイトのこととか」

「へー……。その相手って、どんな奴だった？」

「んー、いい人だったよ？ ヘタレだったけど」

「草食系男子って奴？」

「それとはちよつと違うかなー……つと、書けた！」

「終わった？ じゃ、電気消すからね」

「うん。お姉ちゃんおやすみー」

「おやすみ、バカ妹」

続かない。

番外編 マリアさまは別にみてない（後書き）

というわけで番外編です。

元ネタはによりたりあから。みんなの名前は、国名＋人名の意味を元にしてます。そうじゃない人は人名をもじったり、よく使われるに  
よた名を使ったり。

この人が誰かわからない、というのがあったらご一報ください。

次回こそはお兄さんのアフタヌーンなラジオだよ！

その21 お兄さんのオールアフタヌーンヘタ校(前書き)

俺の出番マダー？

by板利

## その21 お兄さんのオールアフタヌーンヘタ校

「みんな、ボンジュール！ お兄さんのオールアフタヌーンラジオの時間だよ」

昼休みのヘタ校。生徒たちが昼食をとったり遊んだり思い思いに時間を使う中、各教室のスピーカーからシャンソンをBGMに突如放送が始まった。

声の主は、このシリーズで登場回数ぶつちぎりが高くね？ 疑惑のある風連池土主ふれんちである。風連池は別に放送部員ではないのだが、以前放送室をジャックして校内放送を行った際、意外にも評判が良かったので週一度の放送を黙認されているのだった。

そんなわけで、ここからは風連池のラジオをお送りするのである。決して手抜きではないのである。

ウツクーシークウツクシサーミミモトデカタッターアゲル

「じゃあそんなわけで、お兄さんがお送りするアフタヌーンラジオを始めるよ。今日のOP曲はRN“乙女リカン”さんからのリクエスト、「トレビアンな俺に抱かれて」だね。

「気づいたらいつもこの曲を聴いています」……お兄さんも大好きだよ！ 乙女リカンさんからはED曲のリクエストも届いてるね。それは番組の最後までお楽しみに。

それじゃ、早速お便りを読んでいこうか。まずはラジオ相談室のコーナーだ。

RN“精一杯將軍”さんからのお便り。

「こんにちは、風連池お兄さん」こんにちは「僕の悩みを訊いてください。僕には歳の近い従妹がいるのですが、どうやら僕のことが好きらしく、何かにつけて求婚してきます。

従妹のことは嫌いじゃないんですが、小さいころから一緒に育ててきたので中々恋愛感情が抱けません。かといって、下手に断ると変なことになりそうで……風連池お兄さん、僕は一体どうしたらいいんでしょうか？」

おお……初っぱなから凄いい悩みが来たねえ。こういうこと言っちゃ駄目なんだろうけど、そんなに熱烈に愛してくれる従妹がいるって、お兄さんちよつと羨ましいなあ。

いっそ、その従妹ちゃんと一度付き合ってみたらどうかかな？ 本当に付き合っくんじゃなくて、一週間ぐらいお試し期間みたいな感じで。現状維持し続けるよりはお互いの考え方が変わるかも。

今、精一杯將軍さんに好きな人がいないんだったら、腹を括って本当に受け入れるのも手だよ。

いずれにせよ、従妹ちゃんとは一度きちんと話合ったほうがいいと思うな。

続いては、RN“駄目イプル”さんからのお便り。

「僕には双子の兄弟がいます。見た目はそっくりなんですけど、僕は全然目立たないのに何故か兄弟は校内に知らない人はいないくらい目立っています。」

それは別に構わないんですが、そのせいか最近、よく兄弟と間違われます。ちゃんと話せばわかってはもらえるのですが、兄弟の起こしたトラブルに巻き込まれ、酷い目に遭うこともしばしばです。

ちゃんと見分けてもらえるよう、髪型やファッションに気をつけてみましたが、それでもあまり効果がありません。どうしたら間違われないようにできますか？」

双子か……。そういえば俺の知り合いにも双子がいるけど、時々見分けられないことがあるなあ。

トラブルに巻き込まれる、ってことはその兄弟、トラブルメーカーなのかな？ 自分は関係ないのに顔が同じってだけで巻き込まれるってのは確かに面倒だね。そこらへん、一度話し合ったほうがいいかも。

見分けてもらうのはちょっと難しいかな。根気よくアピールしていかないと駄目だね。兄弟とファッションについて打ち合わせたりしたら効果的かもよ？

おっと、もうこんな時間か。精一杯將軍さん、駄目イブルさん、お悩みが解決することを祈ってるよ。

続いては、“今週のラピュセル”のコーナー！

このコーナーでは、毎週リスナーから出演リクエストが多かった女の子をお招きして、リスナーからのあんな質問やこんな質問に答えてもらおうコーナーだよ。

さて、今週のラピュセルはこの子だ！

マールカイトチキュウ マールカイトチキュウ マールカイトチキュウ リヒテンシユタインデス

「み、皆さんはじめまして。一年B組の水巢璃妃すいすりひと申します……」

「この間、“妹にしたい女子ランキング”で数ある猛者を抑えて一位に躍り出たりヒちゃん！ どう、放送室って入るの初めて？」

「はい……知らない機械が沢山ありますね……」

「大丈夫、多分放送部員でも全部の使い方は知らないと思うから！

じゃあ早速質問してくけど、準備はいい？」

「はい、大丈夫です」

「あ、ちなみに言っとくけど、あんまりアレな質問は俺が殺されちゃうから弾かせてもらったからね。それじゃあお便りを読んでくよ。

「好きなタイプは？ どんな人なら好きになりますか？」

「好きな人……まだ恋愛をしたことがないのでよくわからませんが、お兄様のように頼りになるお方だったらいいな、と思います」

「お兄さんみたいな人か！。じゃあ俺なんてどう？ お兄さん繋がりです」

「……………」

「ははは、返しに困られるのが一番傷つくな！。次の質問行こうか。民間防衛部ってどんな活動しているんですか？」

ん、これはお兄さんも気になるな！。ていうか民間防衛部ってな

「なんだい？」

「お兄様が護身術や持っていても不自然でない護身具、悪漢に出くわした際の対処法を教えてください。時々、特別講師として絵里紗さんも来てくださいます。」

「なるほどー。最近物騒だからね。」

「はい。事前にお兄様に許可を頂ければ、部員じゃなくても参加させてくれるそうです。」

「そりゃあいいねえ。おっと、そろそろ時間が押してきたからこれで最後の質問だ。」

「貴女のベッドに行くにはどうしたら」「ってあれ？ 水巢？

「いやそのこれは違うんだ、俺が訊いたわけじゃなくてなんかの間違いで紛れ込んでたk」ダシヨーン

「お、お兄様！？」

「放送上、不適切な質問があったので本日の放送はこれで終了するのである。ED曲はRN“乙女リカン”さんからのリクエスト、「立派 やっぱ パリ」である。さあ、帰るぞ璃妃。」

「ええと……本日はお招き頂き本当にありがとうございます……」

「パーラッパパーラッパパーリパーリパーリパーレードー パーラッパパーラッパパーリパーリパーレールー リーッパヤーッパパーリー

「……お兄さんのオールアフタヌーンラジオ、また見てねー……ぐふっ」

「……ボンジュールジュテムフラインス……」

「おまけ。」

「今日、ラジオでリクエストした曲、流してもらえたんだー」

「へえ、あの曲リサちゃんがりくしたん？ 羨ましいわあ、うちもなんかリクしてみようかなあ？」

「何頼むの？」

「うーん、最近アイ スってアニメ始まったやん？ そのアニメの OP ちよつと気になるから、それにしよかな」  
「中の人繋がり!?!」

続く。

その21 お兄さんのオールアフタヌーンヘタ校（後書き）

久々の投稿なのにこんな話ですいません、な二十一話です。

ほとんどラジオを聴いたことがないのに聞きかじりの知識で書いたので、色々おかしな部分があると思いますがご容赦ください。

ちなみに例の乙女リカンさんはリサちゃんです。本名は早乙女リサとかそんなんに違いない。

今回は多分久しぶりに板利と土井津がでるんじゃないかな。

その22 今にも落ちそうな試験の中で(前書き)

久しぶりに俺の出番だよ!

by板利



「うわーっ!? ごめんなさーいっ!」

土井津は改めて、板利が馬鹿であることを再確認した。

(偏差値は高いはずなんだがな、偏差値は……)

ようやく正答が続いてきた答案を見て、土井津は再び溜め息をついた。

「そーいえばさー、俺が言うのもなんだけど、土井津はテスト勉強しなくていいのー?」

「今やらずに済むほどには万全だ。こうしてお前の答え合わせをするのも復習になるしな」

「うわー、土井津マジ完璧超人だよー……」

(大抵のことはやれば出来るお前のほうが超人だろう……)

こう見えて努力家な土井津は、休み時間は大体昼寝している板利と違い、真面目に勉強しているのだった。

そんな感じにグダグダしていると、不意に誰かが土井津たちの部屋をノックしてきた。

「土井津、いるか? 文化祭のことで話があるんだが……」

入ってきたのは同じクラスの井木亜佐<sup>あさ</sup>であった。太い眉毛がニクイアイツである。

「井木か。すまない、後にしてくれないか?」

「テスト勉強やってるのか? じゃ、書類だけここに置いとくから、目を通していてくれ」

そう言っ出ていきかけた井木のズボンの裾を板利が掴んだ。

「……なんだ?」

「あのさ、井木って英語得意だったよね? ここ教えてくれない?」

「はあ!?!」

「……板利、井木はこう見えて忙しいんだ。というか、問題くらい自分で解け」

「こう見えて、ってなんだよばかあ! 畜生、いいぜ、やってやる

！ 問題見せてみる！」

「わー、ありがとー」

「やれやれ……」

こうして、何故か井木も試験勉強に参加することになった。

「ばかつ、このingは『くする』『じゃなくて』『くすること』だ！

toがついてるだろ？」

「そっか、じゃあこうかな？」

「そっだ、やればできるじゃないか」

「えへへ」

「英語もいいが、まだ現代文と数学があるのを忘れるなよ」

「ヴェー、そうだった……」

井木が加わったことで、試験勉強は驚くほどはかどっていた。

（まあ、井木も納得しているようだし、俺の負担も減るからいいか……）

そんなことを思いながら採点を続けていると、またノックの音がした。

「土井津君…… ちょっとかくまってくれないかな？」

残念な従姉妹に定評がある呂士谷つしや依伴いばんだった。服の端々がボロボロになっている。

「呂士谷か。どうした？ その格好は」

「えへ、ちよつと奈多に追いかけてられて…… 駄目かな？」

「別に構わないが……」

とそのとき、部屋の外からどたばたと足音が聞こえてきた。呂士谷は慌てて土井津たちの後ろに隠れた。

「兄さんはどこだあ！」

次いで、ばたんと勢いよく扉が開かれる。入ってきたのはやはりというかなんというか、呂士谷の従妹の白露奈多はくろだった。

「兄さんは…… 兄さんはどこだ……！」

「…… あー、白露だったか？ 呂士谷ならここにはいないが…… そそもここは男子寮だろう。なんで女子のお前がいるんだ」

「黙れ、いいから兄さんを出せ……!!」

「い、いないってば〜」

「さっさと女子寮に戻れよ、ばかあつ!」

奈多の妙な迫力に気圧される男子。実に不甲斐ない。

「くそ……どこだ兄さん……!!」

しばらく部屋を見回したが、呂土谷を見つけることはできなかつたらしく、奈多は諦めて出ていった。男子たちは胸を撫で下ろした。「ありがとう土井津君。お陰で助かったよ。何かお礼はできないかな?」

「いや、別に……そうだな、板利の勉強につきあってくれないか?」

「ヴェえ!? なんで!?!」

「そ、そうだ! 呂土谷は別にいいだろ!?!」

「そんなことでいいの? じゃあ僕手伝うね」

「すまない、助かる」

「……ど、土井津のばか つ……!!」

こうして、呂土谷は国語を担当することになった。

「うふふ、だから違うでしょ? ここはこの文章を要約するって問題なのに、なんでCを選んだのかな?」

「ヴェ……う、ごめんなさい……」

「なあ、俺帰っていいよな? そういえば用があつたんだよ、なあ?」

「……あー、呂土谷? 注意するときにはもっと優しく言ってやってくれないか?」

数分前まで平和だった室内は、呂土谷が来たことで一気に殺伐とした。

「何回言つたらわかるのかなあ? コルコル」

「ごめんなさい命だけは取らないでえ!」

「今勉強してるんだよな!? 拷問してるんじゃないんだよな!?!」  
(どうしてこうなった……)

流石の土井津もこの時ばかりは己の判断ミスを悔いた。

「なんだつたら、もう二度と間違えられないようにしてあげてほしいんだよ?」

「ごめんなさい……せめて顔と手だけは……」

「なんだよこれ!? 冬軍曹かよ!」

井木が上手いこと言おうとして盛大に滑ったとき、本日三度目のノックがなった。

「やれやれ……今度は誰だ?」

「我輩である! ヤギが逃げたので探しているのだが、心当たりはないか?」

入ってきたのはシスコンで有名な水巢芭種すいすいばしゅだった。

「いや、見かけなかったが……」

「さつき庭にいるの見たよ?」

「てか、なんでヤギを屋内で探してんだよ……」

「そうであるか。協力、感謝するのである」

「待ってくれ」

事務的に礼を言い、出ていこうとする水巢を土井津が呼び止めた。

「なんであるか?」

「……いや、なんでもない。すまない、忘れてくれ」

「……? そうであるか」

今度こそ水巢は出ていった。

大体お気づきの方も多いただろうが、土井津は水巢にも手伝ってもらおうとしたのである。しかし、前者二人と比べてわりと緊急そうなところと、これ以上人が増えたら部屋が狭すぎるのとで諦めたのである。てかぶつちやけ、一度に五人も動かせないのである。

「さあ板利、今度は数学の時間だ」

「ヴェエ!? 土井津まで!」

代わりに土井津は自分が頑張ることにした。

「どうした板利! ここの公式はさつき教えたはずだぞ!」

「え、あれ? そうだっけ? えーっと……」

「板利君と土井津君って、本当に仲がいいよね」

「……俺、そろそろ帰っていいか？」

板利の勉強会は、寮内の食堂が開く時間まで続けられたのだった。

そして試験は終わり、結果発表の日となった。

「土井津一、一緒に結果見に行こうよー」

「俺はもう見た。一人で見てこい」

「ちえ、ケチー」

ヘタ校では、試験の総合点数をランキングのように貼り出すという、アニメに出てくるエリート校にありがちな形式を取っていた。

「……わ、うわ

！ やったやったやった

「!!」

後ろの方で板利が狂喜乱舞する声が聴こえる。土井津はその声を聴き、ため息をついた。

「総合500点満点で一位か……」

487点で六位だった土井津は、その結果を複雑な思いで噛みしめたのだった。

「お前のそういうところが嫌いなんだ……」

続く

その22 今にも落ちそうな試験の中で（後書き）

久々に男臭い話になったような気がします。

板利と土井津は全然出番なかったので出したかったのと、それほどでもないけどやっぱり出番が少なそうな人を適当に選んで出しました。

次は貴族あたりを出そうかと思っています。

その23 ぐだぐだ会議(前書き)

時間の進み遅くね？

by 義流

しーっ

by 風連池

## その23 ぐだぐだ会議

七月である。誰がなんと言おうと七月である。

七月といえ、十月の文化祭に向け、そろそろ準備しなければならぬ時期である。

というわけで、三年E組では文化祭の出し物を決めるホームルームが行われていた。

「何か意見があつたらお言いなさい！」

今現在、この場を取り仕切っているのはアホ毛が素敵な貴族こと押鳥楼出であつた。彼がこのクラスの文化祭実行委員なのである。

もつとマシな人材はいなかったのか？ 残念ながらいなかったのである。だつてこのクラス、大半が変態かバカなのである。おつとり気味な所を覗けば、押鳥は比較的常識人であつた。

「文化祭といえはやっぱりあれだ、バンドだろ！」

と、真つ先に発言したのは、土井津の残念なお兄さんこと土井津義流、見た目は中二、中身な小二のニクイアイツだ。

「何言つてるのよ。バンドはクラスじゃなくて有志で参加するんじゃない。もつと考えてから発言したら？」

あつという間に押鳥の許嫁というそれなんてエロゲ？ な設定を持つ帆ヶ梨絵里紗が否定する。

「じゃあお前がなんか意見出せよなー。あるんだろー？」

「……う、うるさいわねっ！」

ないらしかつた。

「模擬店とかどうなん？ 食べ物売ったり喫茶店みたくしたり、なんかグッズ作ったり色々あるやん」

すかさず現実的な案を出してくるのは、河内弁使いの陽気な男、

栖辺院斗仁夫である。

「ほんなことゆうたつて、一体何を売るんや？ 食べ物は調理がひつでもんにだし、下手なもんこさえたら食中毒になるかもしれん。

グッズも何をこさえるか決めないとどんな材料を用意すればええかわからんやないけ」

金が絡むと途端にうるさくなる低地蘭太ひくちらんたが福井弁で口を挟む。

「そこでお兄さんは、この流れであえてお化け屋敷を推薦するよ！」と、名乗りを挙げたのはヘタ校一の変態として名高い風連池土主ふれんちしすだった。

「お化け屋敷ですか？」

「そうさ。ちよつと準備は大変かもしれないけど、一番楽しそうじゃない？ 暗闇で怯える女の子たちを驚かしたり、どさくさに紛れて悪戯したり、セツトの裏に連れ込んでそのまま」

風連池が台詞を言い切ることが出来なかったのは、絵里紗によって投げられたフライパンが顔面に命中したからであった。

「なんでそういう方向にしか持ってけないの、アンタは！」

「そうですよ、お下品です！」

流石に押鳥も少し怒った。

「せっかく最後の文化祭なんだし、みんなの思い出に残るようなものにしたいなあ」ドバーン

世界が嫉妬する巨乳こと、宇久蕾菜うつくらいなが極めて当たり障りのないことを言う。

「内容はそんなに凝らなくても、みんなで心を一つにすれば、いい出し物になると思うよ？」ビビーン

「そうだな！ 今、宇久がいいこと言ったべ！」

「あんこうざい」

「そーけ！」

出幕でまくと乗江のるえは今日も通常運転だった。

「……では、ここは皆さんの意見の間を取って、私のピアノの演奏会を開きましょう」

「全く間取れてねーじゃねーか！」

「楼出さん、それも有志扱いになると思います……」

「それがええんやったら俺、闘牛士やるわ！ 本場のマタドールの

腕前見せたるで〜！」

「ファッションショーはどうか？　ただし衣装は薔薇の花だけで」

「ん……猫の品評会……とか」

「だから文化祭は一発芸大会でも無礼講パーティーでもないんだってば！」

「こんな感じでぐだぐだ討論が行われた結果。」

「……というわけで、出し物はスイーツ喫茶に決まりました。何か反対意見はありますか？」

「意義なし」

「良かった……まともな案に落ち着いた……」

「どうしましたか、絵里紗？　疲れているようですが」

「誰のせいだと……はああ……」

珍しくツツコミ役を買ってしまったため、くたびれた絵里紗が溜め息をついた。

「おし、じゃあ俺様のバンドに入る奴拳手な！」

「だから……有志でやれって言うてんでしょうがあああああ！」

続く

### その23 ぐだぐだ会議（後書き）

タイトルの元ネタは某軽音部アニメの『ふわふわ時間』です。  
予想以上に小さくまとまったので、二本立てにしても良かったかな。  
次回も文化祭関連になりそうです。

その24 “メイド”・イン・ジャパン(前書き)

メイド！メイド！！メイド！！！！

by 本田先生

先生、落ち着け。

by 土井津

## その24 “メイド”・イン・ジャパン

そろそろ七月と言い張り続けるのも厳しくなってきたが、七月なのである。

二年A組では現在ロングホームルーム、略してLHRが行われていた。

議題は三E同様に『文化祭の出し物について』である。

「メイド喫茶にしましょう」

いの一番にそう声をあげたのは、なんと常識人のはずの本田先生だった。

「文化祭といえばメイド喫茶です。異論は認めません」

「い、いやいや、先生？」

慌てて異議を出したのは文化祭実行委員になった井木である。

「どうかしましたか、井木君」

どうかしたのはお前の頭だ。今、クラスの心が一つになった。

「いきなりメイド喫茶と言われても……もう少し生徒の話を聞いたほうが」

「聞く必要はありません。メイド喫茶で決定しました」

いつになく強硬な姿勢を見せる本田先生。

「というわけでこれから決めるのは女子の衣装と内装です。誰か意見のある人」

「だ、だから人の話を聞けって！」

「そうぞ先生。その提案には、明らかに無理がある」

井木に助け船を出したのは、僕らの頼れるムキムキこと土井津だった。

「このクラスにはモブを除けば女子はほとんどいないではないか。

そんな状態でメイド喫茶などできるわけがない」

「くっ、痛いところを……！」

実はこのクラス、作者の配分ミスにより女子がほとんどいないの

である。いるのは地那先生の親戚の梅花と、猫耳が似合うと巷で評判の鈴子だけなのである。

「……ん？ 低地は隣のクラスじゃなかったのか？」

「『考えてみたら別に他のクラスにする必要なんてなかった』ってことで、こないだからA組に入ることになったんよ。よろしくしたって！」

「ちなみに俺もいるぞ、このやるー」

「わーい、兄ちゃんと鈴子さんと同じクラスだー」

「……ご都合主義にもほどがあるだろう……」

土井津がため息をつく。……本当に申し訳ありません。

「でも、土井津の言う通り、二人だけでメイドやるのはちょっと厳しいヨー。別のにしたほうがいいと思うネ！」

梅花も賛同する。他にもちらほら、「まあ、無理がありますよね……」「奈多ちゃんのいないメイド喫茶なんて……」「ていうか、

梅花ちゃんと俺の喋り方微妙に被ってるよネ？」と声が聞こえてくる。

「むう……だったら……」

考える本田先生の目に飛び込んだのは、「ピンクの木馬でメリーゴーランドを作ればよくね？」と戯れ言をのたまう堀須賀の姿であった。

「……女装喫茶にしましょうー！」

「えっ」

「んな……っ!?!」

「うわあ……」

「Oh……」

クラス中がドン引きという感情で、再び一つとなった。

「女子がないのなら、女子を創り出せばいいのです。幸いこのクラスには女装が似合いそうな生徒は沢山いますし、なんなら私も女装しましょう」

本田先生の視線が堀須賀から利戸簿、そして水巢に移る。このク

ラス、いやこの学校きつての女顔たちである。

「ふ、ふざけるな！ である！」

自分の顔つきをやや気にしているらしい水巢が激昂する。確かに頭にリボン載っけてエプロンドレス着ててもなんら違和感ない顔立ちである。

「ふざけてなどいません。大真面目です」

キリッ、などと語尾につけてもいいくらい真剣な顔で本田先生が言う。

「考えてみれば、既にテンプレート化したメイド喫茶よりは、まだ浸透していない女装喫茶のほうが目新しいはず。他のクラスと被る可能性も低いですし、人目も引くでしょう」

力説する本田先生を他所に、板利がぼそつと呟く。

「俺、土井津や呂土谷や須部が女装してるとこ、あんまり見たくないなあ……」

「……あー……」

土井津がこの上なく微妙な顔になる。

「僕もあんまり女装とかはしたくないかな……」

「んだべな……」

呂土谷と須部も同意見のようである。当然の反応だった。

「ぐ……ぐぬぬ……」

本田先生が歯を食いしばる。どうやら盲点を突かれたらしい。

「じゃあ、私にどうしろって言うんですか！ なんだったらOKが出るんですか!？」

「いや、まずは生徒の意見をだな……」

本田先生を諷める為に近づいた井木は、ふと、本田先生の顔が妙に紅潮しているのに気がついた。

「先生……?」

「どうしてメイド喫茶が駄目なんですか！ どうして」

次の瞬間、本田先生はくずおれるように倒れた。

「せ、先生っ!？」

慌てて駆け寄った井木は、本田先生の息が荒く、熱があるのを確認した。

「凄い熱じゃねえか……！ 保健委員、先生を保健室に運んでくれ！」

「うんっ！」

「呂士谷が保健委員だったのかよ!? ま、まあいい、担ぐの手伝ってくれ！」

井木と呂士谷がそれぞれ本田先生の上半身、下半身を持ち、保健室へ向かう。

「そうか……先生は熱でおかしくなっていたのか……」

「どうかなー? 案外、本心で言っていたりして」

「恐ろしいことを言うな、板利」

そして、本田先生が保健室に寝かされたあと、生徒の意見を公平かつ冷静にまとめた結果。

「今度の文化祭では、うちのクラスはおばけ屋敷をやることになりました」

翌日。職員室でマスクをし、少し咳き込んでいる本田先生に、井木は企画書を提出した。

「め、メイド喫茶は……?」

「満場一致で却下です」

「ぐ、ぐぬぬ……」

マスクの下で歯を食いしばる、涙目の本田先生だったとき。

続く

その24 “メイド”・イン・ジャパン（後書き）

なんか本田さんがえらいことになったなあ。

次回は一年だ。

その25 私はヒーローになりたい(前書き)

こいつらの将来が真剣に心配ある。

by 地那先生

## その25 私はヒーローになりたい

七月だったら七月なんだからね！

さて、一年B組では現在ロングホームルーム以下略。

議題は三E同様に文化祭の以下略。

「何か意見があつたら積極的に挙手してくれ」

一Bの文化祭実行委員はどこぞの髭男の妹、ふれんち風連池萌那もなだった。背と胸は小さいが、可愛い眼鏡っ娘である。あだ名は“モナ子さん”である。

「はい！ はいはいはい！」

真つ先に手を挙げたのは、次期キング・オブ・ヒーロー、略してKOHを狙っているともつぱらの噂のめりか米利科ある在である。

「ヒーローがやりたいんだぞ、特設ステージで！」

特設ステージとは、よく有志のバンドやミスコンなどの会場になつたりする、文化祭時に特別に建てられる野外の舞台である。

「ヒーロー………というと？」

「このクラスで戦隊を結成して、ヒーローショーをやるんだぞ！」  
ようするに、デパートの屋上などでやってるあれを文化祭でクラスの出し物にしたい、ということらしい。

「なるほど………面白いな！ 次、他に意見がある者は？」

「特にないな」

「（僕もそれでいいと思います………）」

「ダレ？」

「賛成っすー」

「いいんじゃないの？」

「俺は展示がしたいんだぜ！ へタ校の起源が俺であることを写真や年表でわかりやすく主張したいんだぜ！」

「よし、ではヒーローショーに賛成の人は挙手！」

「………はい」「………」

「待つんだぜ！ シカトしないでほしいんだぜ！」

こうして、一年B組の出し物はヒーローショーに決まったのだった。

「ひょっとしてこれはいじめなんだぜ!？」

「でも、ヒーローショーって一体何をするんですか？」

イケメンイケメンと言われているわりにあまりそう見えないイケメンこと江州登が発言する。

「とりあえずヒーローの戦隊と、悪役について決めるんだぞ！」

「戦隊……っていうと、ゴレスゾジャーとか、ギソガマソとか、最近やってるゴークイッジャーとか、ですか？」

意味もなくぶるぶる震えている羅飛が訊く。今年二月から始まるゴバヌタースもよろしくね。

「そうだぞ！ だから “ 戦隊 ジャー ” みたいな語感の戦隊にしたいんだぞ！」

「ええと…… “ 戦隊 ” の “ ” には作品のテーマのようなものが入るのですよね？ それなら、この戦隊が何を守るのかを先に決めたほうが良いと思うのですが……」

おそらくこの手の特撮はまったく見たことがないであろう璃妃が、それでも頑張って提案していた。

「無難にヘタ校と文化祭を守る、“文化祭戦隊ヘタレンジャー”とかでいいんじゃないっすか？」

晴子がとつさに考えたにしてはそこそこ良いネーミングを披露した。

「いや、それだと駄目なんだ。 “ ” の部分は二文字だって昔から決まってるんだぞ」

「だったら…… “ 学祭戦隊ヘタレンジャー ” ？」

「それもなんかしっくりこないしなあ……うーん……」

ここで一年B組は怒涛のシンキングタイム、というか大喜利タイ

ムに入る。

「“爆竹戦隊クーロンジャー”的な？」

「“中立戦隊オニイサマン”はどうでしょう」

「“美形戦隊イケメン5”がいいと思います」

「（“砂糖戦隊”メイプルマンとか……）」

「“不明戦隊ダレ？ ンジャー”」

「“起源戦隊オレンジャー”がいいんだぜ！」

次々と容赦なく提案される戦隊名。

「ま、待て待て！ そんないつぺんに言われても聞き取れない！

落ち着いて、一人ずつ挙手してから発言したまえ！」

半ばパニック気味に対応する萌那。

「みんな、一回黙ってくれ……っ！！」

「……で、結局どうなったあるか？」

ところ変わって、職員室。LHRが終わり、萌那は一年B組の出し物の企画書を担任の地那先生に提出しに来ていた。

「はい。多数決を取ったところ、ヘタ校の眼鏡とコンタクトレンズを守り、悪の組織レーシックと戦う“眼鏡戦隊グラッシーズ”に決まりました」

「どうしてそうなったあるか！？ 今からでも遅くないある、考えなおすよろし！」

「ちなみにレッドは米利科君、ブルーは江州登君、イエローは古里矢君、グリーンは……ええと、金田君で、ピンクは私です」

「すっげーどうでもいいある！」

こうして、ヘタ校の眼鏡とコンタクトレンズを守る正義の戦隊“グラッシーズ”は結成されたのだった。

続  
く

## その25 私はヒーローになりたい（後書き）

本当にどうしてこうなった。

起源の人がちゃっかりグラスシーズにいるのは竹林及びキタユメのリクエスト漫画から。

そろそろ連載を次回あたりで完結しようと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8401m/>

---

ヘタ日学園高等部 【もしヘタリアが日本の学園コメディだったら】

2012年1月6日20時50分発行